

---

# ひだまりメモリーズ

弘悦

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ひだまりメモリーズ

### 【Nコード】

N8779Z

### 【作者名】

弘悦

### 【あらすじ】

中学三年生、茉莉花優紀、愛称ユウは悩みがあった。

それは彼氏が出来てもすぐに別れてしまう事。

それはユウに悪霊が憑いており、超常現象を起こす為だった。

(FC2重複投稿)

## 茉莉花優紀の憂鬱

「おれさあ、前からおまえみたいな可愛い子に、彼氏がいないのが不思議だった。おまえには奇妙な噂が立っているんだってな。でもな、そんな噂だけで彼氏いないのは可哀そうだ……と、おれ的には思っわけだ」

「はああ……？」

「噂の内容は深くは知らないが、彼氏と付き合っても長く続かないのは知っている。でもさ、それってよ、おまえに振られた奴らが悪口を言っているだけで、本当のところは魅力が無いからだろう？ ဆိုつらにな。都内でも有名なおまえの女子達の評判も、気味が悪いとか影があるのかなだけどさ。それもおまえの中学生ばなれした美少女ぶりへの嫉妬だろうな。確かに高校のおれの同級生と比べても、大人っぽいというか落ち着いた感じがするし。まあ、話はそれだが、とりあえずおれの気持ちはこれでかなり伝わったと思う」

いきなり初対面で、大量の話の放流を始めた高校生。

いきなり「おまえ」呼ばわれされた、茉莉花優紀まつりか・ゆうき十五才は、こう答えるしかなかった。

「えーっと……そうですか」

「それでな、茉莉花、おまえと別れた奴は、おまえの外見の良さ、その軽いブラウン系の髪の毛、肩に少しかかる前髪を余裕でおでこを半分出し。色白できれいな卵形の輪郭に、少しツリ目の大きな瞳。そして背は高めで、たしか百六十五センチだよな？」

「はああ……良くご存じで」

「スタイルは少しやせ気味だが、胸や腰も成長度は十分だ。だが、おまえの人生が分ったような、その表情を見ていて思うんだ。もっと中学生らしく、生きていいんじゃないかと」

……中学生らしく生きる……ってなんだろうと思った。

「いいか！？ おまえに何か問題があつてとしても、おれはその問題

を、丸ごと包み込む覚悟がある。それはだな、おれがおれで在るための、ジャステイス！」

親指を突きだして決めポーズ。

「あの……私、クラスメートから、この公園に来るように言われて……それで」

優紀はとりあえず、今自分が置かれている状況を確認する事にしてみた。

「それで要件はなんでしょう？それと、なんで私の身長や名前とか色々詳しいの？」

「それはだな、おれの妹が偶然おまえの同級生だった。茉莉花の個人情報も妹から聞いた。なんか運命感じるだろ？妹がおまえの同級生で、おまえを知っていたなんて！まさしく、おれ達が出会う為の必然でやつだな。まさに茉莉花とおれは宇宙レベルで結合されている。そう思わないか？あ、言わなくてもおれには分かる、だからユウには言っとく事がある」

茉莉花優紀、親しい人はユウと呼ぶ、その顔が困っていた。

「千代田区に大きな個人病院があるだろう？あそこはおれの親父が経営している」

学校帰りの茉莉花優紀の制服姿は、普段はブレザーなのだが、今は七月、夏服の上は真っ白な丸襟のブラウスに赤いリボンを結んで、下はプリーツスカートでネイビーレッドのチェック柄。

脚は紺色のハイソックスを履く。高校生の感想どおり、美少女の定義に十分あてはまる。

「えーつとですね、親が医者なのが、今までの話と関係ありますか？」

「うん？おれ、なんかおかしな事言ったか？ユウ」

「……あとですね、いきなり愛称で呼ばれるのはちよっと。初対面ですし」

首を傾げる高校生は、空気感覚が欠如している模様。

「なんでさ？ユウっていいじゃん？ニックネームで呼んだ方が親密感も湧くしさ、世の中はそんなもんだぜ！まあ茉莉花と呼ぶのもい

いけどな、可愛らしい名字だ」

「はああ……ありがとうございます」

「あ、そうか大事な事を言い忘れていた。よく聞いてくれ。おれのニツクネームはな」

「あの私、あなたの名前も知らないのに、ここで、いきなりニツクネームにいきます!？」

「ああ、そうか!なるほどな、じゃあ、おれの本名を先にいつとか!」

ユウの肩に少しかかる、軽いブラウン系の髪の毛が左右に揺れて、ニツクネームも本名も、今はいいと伝えた。

「そうか残念だな、じゃあおれの名前は後のお楽しみ、とっておくか」

「出来れば用件を……お願いします」

「まあまあ!親が医者なのは今までのおれと、これからの茉莉花にかなり関係ある。いいか、背が高くてイケメンなおれが、今こうしてこの世界に存在出来ているのは、親父が医者でその地位と金の力を使い、綺麗な嫁さんをゲットしたからだ!少し頭が悪いのは愛嬌で済まず、うちの母親をな!」

「それは良かったですね……」

力なく答える。確かに背が高くて顔もまあイケメン風ではあるが、明らかに父親の仕事は継げそうもない、頭の悪そうな説明を、長々と続ける男子高校生。

見知らぬ高校生をどう扱うべきか……ユウは下目から高校生を見上げる。

「おお、いいな、すごくいい!その下目づかいの表情。大人っぽい、とってもいい!」

高校生の身長は百八十センチは有りそうで、女子として背が高いといっても、百六十五センチのユウ。高校生を見るときは、下から見上げるしかなかったが、それを色っぽいか言われてもなあ、と思ったりしていたが、まずは自分がここにいる理由を確認する事が先

決。

このまま深夜とか、まさかの朝帰りになったらたまらない。

「それで用件はなんでしよう？」

今まで大量に話し続けた高校生が一旦、話の放流を停めた。

どうやらこれからが本題らしい。今までのは何だったの？と高校生を見ようとしたが、また色つばいと勘違いされても困る。黙って高校生の胸の辺りに視線を落としたままにする。

「そのけなげな目線もいい！」

「ええ？違う……」

「さつきから話が少し遠回りしたが、茉莉花とはよく話し合った方がいいと思つてさ。なんせ“初対面”なんだし」

……初対面でここまで話すものなのか？……

そんな事を思っていたら、つい下から高校生の顔を見てしまった。

「やつぱりいいな！その下目づかいの表情……たまらん」

……だから、違うつつつの……

色白できれいな卵形の輪郭についた、少しつりぎみの目で、ユウは高校生をジッと見る。

「あんまり時間が無いの……もつとはつきり要件を言つてください、お願いします」

ぺこりと頭を下げたユウの態度に、またも空気感覚を持たない高校生は、自分への好意だと思ひ込み満足そうにニンマリ。

「さつきから、出来るだけわかりやすく、話しているつもりなんだけどなあ。なんせ初対面だから緊張しちやつてさ。知り合いからもよく、何言っているかよく分らないと、指摘される事もある。つまり、おれって結構恥ずかしがり屋なんだ。話し下手というか……その辺は察してくれ」

……あなたの何を察して良いか、わたしには分からないわ……  
イライラしておでこに半分かかった、軽いブラウン系の前髪をなぎ払う。

「もしかして、私と付き合いたい……そんな感じですか？」

「そそ！それ！おれはおまえと付き合いたいんだ。なんだ通じているじゃないか！」

やっと結論にたどり着いた高校生は、それだ！指さしとモーションする。

「今日からおれと付き合ってくれ！」

とりあえず、目の前の邪魔な高校生の指さしから、身体を横に避けて考え始める。

リップクリームを塗っただけで、艶やかに輝く均整で薄い唇が小さく開く。

「そうですか……分かりました」

「で？答えは？」

「あなたがいいのなら……ただし……」

付き合う場合の、何かの条件を言いかけた薄いピンクの唇。

「やった！やつぱりおれって最高だな！」

やはり空気感覚がゼロな高校生は、OKの言葉を聞いて興奮状態。続いてユウが述べた言葉など、まったく聞いていなかった。

万歳三唱を繰り返す、今さっき彼になったばかりの高校生を慌てて止める。

「あ、やめて！そういうのは人のいない場所をお願い……だから目立って！」

色白できれいな頬が恥ずかしさで赤くなった。

さて、それから一週間後の事。

「おれたちは別れた方がいい。宇宙的にはそれは必然、まさに自然現象だ」

「はああ……？」

「おまえの事は嫌いじゃないよ、でもさ」

先週告白された、公園に呼び出されたユウに、現彼の高校生は言葉の堰を切って放流を開始。

「なんかおかしいんだよ。おまえとつきあい始めてからな。朝起き

ると、目覚まし時計が止まっていてさ、太陽ソーラーで電波時計なんだぜ？普通止まらないだろ！？やばい！学校に遅刻しそうだ！と、慌てて飛び起きて着替えたんだ。完全に遅刻だ！急いで学校へ行こうとする、すると財布が無い。探したけど全然見つからない。ここは仕方がないと諦めて、玄関に座って靴を履いていると、これがあつたんだ！玄関の床の上に。おれが手を置いた床のすぐ側に財布が置いてあつた。さっきまで完全に無かつたはず。まずここまでで不思議だと思わないか？」

……いきなり、そんな事を聞かれてもね……  
空気感を欠乏している彼は気づくわけもなく、彼氏のアメイジングストーリー（奇妙な話）は続く。

「深く考えるのが少しだけ苦手なおれは、ほぼ考えず財布を掴んで自転車に飛び乗った」

……考えないわけね、まあ確かに考えるのは苦手そうだね……  
にっこりつと微笑んで肯定すると、彼はまたなんか勘違いして嬉しそうに笑った。

「クゝ笑顔がいいなあ。おまえ普段はツリ目で性格が悪そうに見える。だから余計に可愛く感じる……ちょっと惜しくなってきたなあ」  
「かなり余計なお世話」

「なに、なんか言った？」  
「うっん、続きを話して。ただし要点をまとめて出来るだけ簡潔に……おねがい」

「やっぱいいいな！その下目づかいの表情……たまらん」  
……だから、違うつつうの。下目づかいなんてしてないわ……  
「それでどこまで話したっけ？あ、起きたら目覚まし時計が……」  
ユウが素早く、彼氏のアメイジングストーリーを早送り。

「自転車に乗ったあなたは、学校へと急いでいた……はい、前回までのあらすじ」

「それでだ。学校へと全開の立ち漕ぎで進む途中で、今度はすっころんだ。イテテと言いなながら起き上がったおれが見た転倒原因は、

なんだと思う？」

答えを振られたユウは、仕方ないので一応回答する事にした。

「マンホールが濡れていた」

「ブブー不正解」

「もうメンドクサ、早く話を進めてよ！」

「なんか、今日のおまえ乱暴じゃねえ？普段はもつとおしとやかで

……」

「あ、えっへん、早く続きが聞きたいわっ！ねっ！」

「そうか、俺が朝起きると……」

また最初から話そうとする彼氏、慌てて早送りする。

「時計停止、財布紛失及び発見、自転車立ち漕ぎ急ぎ学校、途中に転倒、理由はなに？はい、ここからスタート」

「そうそう、転んだのは……バナナ。路上のバナナの皮のせいだった。自転車のタイヤでバナナを踏んでおれごと転倒。バナナの皮で転倒って、おまえよ、いつの時代のお笑いだっちゅの！なあユウもそう思うだろう？」

わからないので、力のない笑いで答える事にする。

「ハハ……それで？」

「なんとか学校へ着くがもう午後の時間だった。そして科目は数学。なあ五時間目の数学なんてありえない、そう思わないか？飯をたらふく食った後に、数学の呪文を聞かされたら、無理だろう？」

「なにが無理か分からないけど……ところで急いで学校へ向かった設定じゃなかった？」

「うん、急いで向かった」

「なんでお腹一杯なの？」

「ああ、朝飯を食うのも忘れたから、途中のびっくりドンドンでハンバーゲットと、オムライスを食った。当然フリードリンクとサラダバーをつけてね」

「食い過ぎだろう……朝から」

「え、なにかまた言ったか？」

「びつくりドンドンのハンバーグ美味しいよね、仲間も言ってたわ仲間？」

「あ、ともだち」

「ふーん、ユウは友達を仲間と呼ぶのか？」

「えーと、そんな所に食いつかないで、話を先に進めましょうよ」

「うん。午前中の疲労と満腹による脳への血液不足によりおれは爆睡した……おれは元々数学嫌いなんでいつも寝てるけど、その日は超がつくほど寝た。その最中に怖い夢を見たらしい」

「え？怖い夢……どんな？」

「そこまで興味を示さなかったユウが聞き直す。

「すごく怖い夢だった。あまりの怖さに内容は覚えてない。ガバツと起きて直立不動のおれは、教室で何かを大声で叫んだらしい」

「その夢に誰か出てきた？」

徐々にユウは、興味を持ち始めた。

「うーんやっぱり、きれいなサツパリに記憶が無いな。ただ確かに怖い夢だった。その後、爆睡 寝言 絶叫の三連コンボで先生には怒られ、クラスの連中に笑われ……それだけならいいけどさ」

「……まだ続くの？」

聞いた話を整理中のユウに、彼の話が堰を切って再度放流された。

「今度は家での話なんだ。その日は、二階の自分の部屋でいつの間にか寝ちゃったんだ。色々あって疲れたからな。ベッドの上でウトウトしていると、急に部屋のテレビに電源が入った。デカイ音に驚いて、リモコンでテレビ電源のオフを押した。でも全然テレビが消えないんだ。おかしいと思ったが、テレビの音がかすぎる。まずはテレビを阻止すべしと、電源ケーブルを抜いた、それでもテレビは消えない。もしかしてあれかな？流行の省エネ家電ってやつ。充電式のテレビなのかな。おれのテレビは50インチのプラズマだし、電池入れるところなんか無さそうだけど。それでだ、テレビのデカイ音にも負けない睡魔のせいで寝てしまい、時間が過ぎて深夜の事だ。起きたらテレビは消えていた。よかったと思ったら、アレがし

たくなつてトイレに行くと、誰かが入っているんだ。こうノックするじゃん？トントントンって。そうするとドンドンって強く誰かが中から答えるわけ。すっごく困るんだ、出したい時に出さないと健康に悪いだろっ？アレ。おれんちは一階にもトイレがあるから、そっちへ行って出すけどな。おれんち、鉄筋三階建、なんと建坪合計三百平米、各階にトイレと風呂がついている」

……三階建て合計三百平米、各階トイレ風呂付きってのは関係ないのでは……

「そうそう、風呂といえば、シャワーを浴びている時に、誰かに見られているみたいで落ち着かないんだ。あと大きな鏡が一階にあつて、そこに影が写つたつて母親が……」

「鏡に影……まさか」

「うん？何か知っているのか？」

「なんでもないわ、その辺で一回お休みいれてね……つまりわたしとつき合つてから、不思議な事が起る、と言いたいわけなの？」

「ああ、そうなんだよ、他にも誰もいない三階の廊下から人の歩く音が聞こえたりさ。それに見たんだ……はつきりと……」

「はつきり、何を見たの？」

「だから、おまえは嫌いじゃない！……だけど……噂は……」

風で流れたブラウンの前髪を払い、彼氏を見つめるツリ目ぎみの瞳。「だけど、何？」

ハッキリしない彼氏にユウが聞き直す。

「噂……噂は本当だったと……」

艶やかに輝く均整がとれた薄い唇が小さく抗議する。

「言いたい事は分かつたわ。でも付き合い初めて一週間なのよ？」  
スマンと頭を下げた彼氏。

「噂なんか信じないって、私に言ってくれたよね？」

「こんなに凄いと思わなかつたんだ。おまえにはやはり何かあるよ……これ以上は、さすがのおれでも厳しいというか、怖いというか

……つまりだな……」

だんだんと勢いがなくなり、語尾が怪しくなった彼の言葉。

「つまり……私と別れたいの？」

自ら結論をハッキリと口にしたユウに、頷く彼氏は顔が青ざめていた。

心なしか一週間前より痩せたように見える。

「悪い！これで終わりにしたい。本当にごめん……あ、塾へ行く時間だ……じゃあ、ここからは、おれとおまえは、完全に無関係ということだから……それじゃ！」

言い終わるより早く、ユウからもの凄い勢いで離れていく元彼。それを啞然として見送るユウは肩を落とす。

「塾なんて行ってないくせに……ちょっと惜しかったな、親がデカイ病院の院長って魅了だったのに」

今年中学三年で十五才。茉莉花優紀、知り合いはユウと呼ぶが、ユウにはもう一つの“ゆう”の意味が重ねられている。

そのもう一つの意味が理由で、ユウは家族と別れて今は一人、東京で暮らしている。

「あ、そういえば最後まで彼の名前聞いてなかった……まあ、今更どうでもいいか」

公園から歩いて最寄り駅まで歩き、電車で秋葉原まで移動。

駅から二十分程歩き自分のマンションを目指す。

雑居ビルが見えて来た。その五階にユウの部屋がある。

彼との会話の途中で、別れる原因に勘づいたユウは呟いた。

「さっきの話だと、またアイツが何かやったな……今度こそ尻尾を掴んでやる」

「ハアーハアー、結構キツイなあ〜この階段……ふう」

ネイビーレッドのチェック柄のプリーツスカートから伸びる、ほどよい太さの太腿を手で押さえながら、ユウが懸命に階段を登っている。ユウのマンションは五階建てエレベーターが無い。

その為に一番上の五階の部屋代は、秋葉原でもなり安いほうだ。

ラストの階段を登り切り、最上階の五階の廊下にたどり着いた。冷房が効いてない五階の廊下は、立っているだけでも汗が噴き出る。五階まで一気に登ったユウの、淡い茶色の前髪が垂れる額にも汗が吹き出る。持っていた鞆を左手で抱え、右手でロックを外しハンドタオルを取り出した。右手で前髪を書き上げて、額の汗を拭き始める。きれいな卵形の輪郭を拭き終えたユウは、右手で部屋の鍵を取り出す。

チャリン、チャリン、取り出した部屋の鍵には、不自然な数のお守りがついていていた。

ギョウツ、お守りを強く握り絞め、丸襟のブラウスの赤いリボンの辺り、大きくはないが形のよい胸に押しつける。そしてお祈りの言葉を呟いてから、部屋の扉の鍵を解除する。

ガチャリ、静かな五階に鍵を開けた音が響いた。スツと扉が開く。

カーテンを閉め切った部屋の中は薄暗く、湿った空気が漂い微かに埃の臭いがする。

ユウの掃除嫌いのせい、閉めきった部屋のせい、そんな事では説明できない。

もう七月、初夏だというのに、異様な程の冷たい空気が、ねっとり部屋を流れている。

「やっぱりまだ居たか……」

ユウはため息をつき、ソレがいる事に十分失望してから、玄関から大きな声を出した。

「あんた、またわたしの邪魔をしたでしょう？ またも、彼氏が逃げ出したわよ！」

ソレは部屋の中央にあるソファに座って、テレビの画面を見ていた。人の姿をしているのは漠然と分るのだが、それ以上はハッキリしない。

何故ソレがはつきり見えないのか？

それはカーテンを閉めきった部屋が暗い、そんな物理的な理由ではなかった。

「なんとか言いなさいよ！この悪霊め！なんで私に取り憑いて邪魔をするのよ！」

ぼんやりと映っていたソレが、姿の輪郭を現し始めた。

当世具足、戦国の世の鎧。

張子を付けた当世兜を被り胴丸を着た、部屋の中央に座るソレは、生きた者ではなく、鎧武者の姿をした霊体だった。

「ユウ、まず帰ったら、普通は“只今、帰りました”であろう？」

逆に注意され、ムカツキ度が大幅にアップしたユウは、武者姿の悪霊へと駆け寄り、その顔の辺りを人差し指で強く指さす。指された悪霊は座ったままでユウの立ち方向を向いた。

悪霊の顔は黒い霧のような感じで、その表情は分らない。

どちらを向いているかは、赤く光る丸い目と立物、兜の正面の飾りが手掛かりになった。

「これ！部屋に入る時は、靴は脱ぐものぞー！」

悪霊がユウの足下を見て再び注意を則する。

「うつさい！ここは私の部屋であんたは居候なの！そんな事より私の彼を脅かしたのか、と聞いているの！」

「おまえの男を脅かすじゃと？……さて、何の事だか、我にはまったく覚えが無いの」

問いを軽くスルーし、再びテレビの方を向いた悪霊に、ユウはわなわなと怒りに震える。

「ところでユウ、これは、中々面白いものじゃな」

悪霊が持っているのはゲームパット。

ユウが悪霊の足下を見ると、ゲームの真新しいケースが落ちている。

「あんたまた買ったの！？よく配達の人がビツクリしないわね？」

ユウの腕組みをした姿を、テレビを見ていた悪霊が一瞥した。

「これか？これは、いつものあの子が持ってきてくれたのじゃ」

「ええ？もしかして……あゝわたしが、ついうつかりあんたがゲーム好きだと、八ちに言っちゃったからだわ」

ゲームのパッケージを拾い上げたユウが、タイトルを読み上げる。

「戦国SARABA……戦国時代へ思いを馳せる爽快アクションゲームって……あんだね！」

均整でピンクの薄い唇が大きくため息をついた。

「私の知り合いも沢山出てくる。知った名前があるのは親密感が出てよいの。実物はこんな美男では無いがな。特にこいつなど、絶対にあつてはならん事になっている……実際に本人に見せたいくらいじゃ……ハハハ」

「ハハハ、そうでしょう、そうでしょう。戦国ゲームは最近女子にも人気だから、武将の容姿はかなり美化されているの……って、そうじゃなくて！この〜やろ〜あたまにきた！」

悪霊からゲームパットのを奪い、ユウは中央のボタンを押した。

「な、何をいたす！時代が時代なら、ここで手打ちにするところ……」

ゲームを強制終了した事に、悪霊が不服を申し立てる。

「今は現代よ！何か文句ある？悪霊のくせにゲームなんかすな！」  
中央の電源ボタンを長押ししたままユウが言い返す。

プツリ、ゲーム機の電源が切れた。

「はい、ゲームはもう終わり。強制終了！」

「私の遊技の静的情報が破壊された時は如何いたす！」

「たかが、ゲームのセーブデータが消えただけでしょう？」

ゲームパットを悪霊に放り投げる。

「はい、これ返すわ。ふう、少しだけスッキリした」

「なんとも乱暴な娘じゃ……これだから私は気を抜けないのじゃ」  
悪霊は兜の下の、丸く赤く光る目をユウに向ける。目以外は黒い霧で覆われていて、顔の表情は分らない。前に銀河鉄道の車掌さんに似ているとユウが悪霊に例えたが、当然、何の事か、悪霊には通じなかった。

「なによ！凄んでも全然怖くないわよ。子供の頃からあんたが側にいたからね。おかげで、私の周りでは超常現象が起こりっぱなしよ！転校先では恐れられ、結局、私の生まれたこの区の中学に逆戻り。父さんの仕事の都合での都外への転校だったから、私だけ戻る事になってさ。イタイケナ中学女子が、一人暮らしになっている。誰のせいだと思っっているのよ!？」

「我がユウの此所に居るのには、ことわりが存在するのじゃ。そして我は悪霊では無いし、別にユウの恋路を邪魔しているわけではない」

腕組みしたユウが不満そうに聞いた。

「悪霊でないなら、ここにいる理由、生まれたときから私に憑いている、その、ことわりってのを教えてよ!」

「……それは答えないといけないかの」  
考え込む悪霊をツリ目の大きな瞳が睨んだ。

追い払う策を練る為に、悪霊がユウに憑いている理由をどうしても聞き出したい。

今まで憑いている理由、悪霊がいうところの、ことわり、については聞き出せなかった。

腕組みをして向かい合う悪霊とユウ……しばしの静寂の後に悪霊が話し始めた。

「そこまでおまえが言うなら……仕方あるまい」

「え？マジで教えてくれるの？結構意外な展開……やった！しつこく言ってみるものね」

「かわいいおまえの頼みじゃ、しょうがあるまいて……我がおまえの側にいる、それはじゃな……ことわりは」

悪霊の口は重かった。だがなんとか理由を聞き出したい、ユウは懸命に続きを聞く。

「それは？ねえ、早く言って!」

「それは……だな」

「うんうん」

「そのことわりは、ひ……つ……じゃ」

「はああ？はつきり言つてよ」

「それは……ひ・み・つ・じゃ！」

悪霊からゲームパットを奪い取り床に叩きつけ、大笑いしている……  
…と思われる悪霊に、完全にユウがヒートアップする。

「またそれ？いい加減にしてよね！おじさんの“ひ・み・つ”なんて気持ち悪いだけ！」

「いつも言っておるが、我は以外と若いぞ」

「悪霊が若いとか、そんなのはどうでもいいわ。とりあえず人の恋の邪魔はするな！それから私の所から出て行け！いいわね」

「少し脅かしただけで、おまえを見捨てる軟弱な若者は駄目だの」

「やっぱりあんたのせいか……あのね！“駄目だ”じゃないわ。いい？今どきはね、度胸とか器量とかを男には求めないの。親がお金持ち……それが一番なのよ。ちなみに今日の彼は親が医者、デカイ病院の院長のバカ息子」

「ユウは馬鹿な男が好きなのか」

「はあ？バカは嫌いだけど、お金持ちは好き」

「お金じゃと？この世で使われている紙屑の事か」

鎧武者は腕組みをしたまま、大きく首を振る。

「あんなもの……沢山あるうが何になる？」

「凄く私の為になるわよ。じゃあ、言ってみてよ、何ならいいの？黄金とか？金の延べ棒に換算したなら、分かってもらえる？あなたが言っ紙屑で、今どきはなんでも買えるわ」

「今どきも昔も、紙屑に価値などあるわけなかるう」

「戦国武将のあなたには、黄金なら分かり易い例えだと思ったんだけど……他に何かに例えられる？」

表情は分らないが、まじめに考えている……らしい悪霊。

「そうじゃな。おまえの婿なら、三万石くらいは欲しいところだ」

「三万石？それって時代劇で出てくる……たしか米の量の単位の事よね？」

頷く悪霊はそれが当然だと言い出す。

「そうじゃ。本来日本は力を米の量、石高により示してきた」

「石高ときたか。そつちは、わたしが分からないなあ」

「日本人にとって米は文化なのじゃ。単なる食糧とは違うものだと理解せい」

「日本人の文化を理解せい！と言われてもね。わたしパン好きだし石高なんて、なじみがないの」

「なんとばかりあたりなおなじじゃ」

「うーん、そう言われてもねえ……」

一応は考えてみたが全然価値が分からない。

「石高ねえ……さすが戦国武将の悪霊ね。でも三万石ってのは、現代でいったいどれくらいの価値なのかな。私に分かるように換算してよ」

価値の違いを埋める事に失敗し困った。その時に聞こえた小さな幼き声。

「1石＝10斗＝100升＝1、000合＝150キログラム、これが現代の米の重さだよ」

「ふーん、一石って150キログラムなんだ……初めて知ったわ」  
クスクス笑う小さな声が説明を続ける。

「10キ口のお米を四千円とすると、一石は六万円くらいかな」  
ほうほうと頷いて、小さな声の説明に感心する。

「一石が六万×三万石だから、おおよそ現代に置き換えた年収は、約十八億円のところ？」

「うはあバカ高い！年収十八億って、大リーグ選手の年俸なみじゃない」

十億を越えると大リーグの選手の年俸、それくらいしか思い浮かばないユウが、ハツとして小さな声の主を見た。

「フフ、ユウっていつも楽しそう」

少しカン高く小さな子供のようなゆっくりな話し方。

小さな声の主は、部屋の隅に置かれたユウのベッドに、ちょこんと

座っている。

明るい緑がかかった髪は後ろ髪だけが、背中より長く伸び束ねられていて、おでこを全て出す前髪は、中央で均整に別れて左右に流れて降りている。円形の大きな頭、その顔も童顔で丸顔。大きな瞳は少し下がり気味。背丈は小学生の高学年程度。

スタイルの等身はやはり頭が大きめで、身体はちっちゃめ。

まだまだ幼児体型から抜けていない。

ユウと同じく、丸襟のブラウスに赤いリボンを結んで、プリーツスカートはネイビーレッドのチェック柄。

「うああ、びつくりしたよ。ハチか。まったく驚かさないですよ」

「なんで驚くのよ？」

「また座敷ワラシが出たかと思ったわ」

「えー？あたし、座敷ワラシに似ているの？」

「声から体型から、区別がつかないくらい、座敷ワラシの奈々ちゃんにそっくり」

「えーと、それって、あたし喜んでいいの？」

「ほどほどに喜んでよし！座敷ワラシは、家に繁栄をもたらすと言われているから」

「福の神みたいね。なら、あたしはいつぱい、喜んでもいいんじゃないの？」

「たしかに座敷ワラシがいる家は繁栄する、けれどいなくなるとその家は没落するわ」

「あらら、色々とあるのね。妖怪さんの世界にも」

「うん、奈々ちゃんも三百年間、座敷ワラシをやっててね、繁栄するまでは、家の人に大事にしてもらえるけど、富があたりまえになると、家の人は奈々ちゃんを軽んじるって嘆いていた」

「なんかおかしいよ。富をもらったなら、感謝すればいいのに」

「わたしもそう思うけど、お金持ちになつた事がないから、結局のところ、その気持ちはわからんわ」

「人間の世界も大変だね」

「まるで他人事のような。いちおう八チ、あんたも人間だからね」  
「えへへ。そうだったよ」

ぺろつと舌を出した八チ。時々八チは、本当に座敷ワラシなのでは？と思うことがある。

「ところで……いつからそこに座っていたの？」

「え〜つと、たぶん一時間くらい前からだよ」

はまゆづ・ちか  
浜木綿千香十五才。愛称は八チ。

ユウの近所に住む、同じ中学に通う同級生。ユウの幼なじみ。

都外へ、父親の仕事の都合で引越した、ユウが引き起こす超常現象は、引越し先の人々を恐怖に落とし入れパニックにした。その為ユウは一人、生まれたこの区に戻るはめになる。

中一の冬に引越したユウが、中三の春に戻ってきた。

だが八チには、二年間近いブランクなどない。ごく自然にユウに接している。

幼いころから一緒だった八チには、ユウの起こす超常現象など慣れっこだった。

普通に扱われる事が、いかに有り難い事か、今更ながら八チを見て感じていた。

「八チ、そこで私と悪霊のケンカをずっと聞いていたの？」

「うん、聞いてたよ」

八チは、悪霊がこの部屋にいる事、ユウが独り言を話している事、どちらにもまったく関心が無いようだ。

「うん？待って八チ、それは……」

「ああ、これ、家から持ってきたよ」

八チが手に持った新品のゲーム“秀忠の野望オンライン”略してひでおん。

「八チ、また悪霊にゲーム持ってきたの？」

「うん、ユウがね、悪霊さんがゲーム好きって、言ったからね」

「あのね、私は嘆いていたの。悪霊がゲームばかりやって困る…

…ってね」

「そうなの？でも悪霊さんがゲーム好きなら、これを持って行ってあげなさいって、お母さんも言うのよ」

「このゲームは、ハチのお母さんベストチョイスなの？」

「うん。戦国時代の悪霊さんだと、前にユウが言っていたでしょ？お母さんがそれ覚えていて、戦国のゲームが懐かしそう、悪霊さんにはいいんじゃない？って」

「はあ、親子で結構なお気遣い、ありがとございます」

「うん！ユウも喜んでくれてハチも嬉しいよ、お母さん、今度出る最新のアクションゲームもママゾンで予約したって。悪霊さん、喜んでくれたらいいなあ」

「ハチのお母さん、ネットショッピング好きだね。あとゲーム詳しくすぎるわ」

転校先の街では悪霊との会話が気味悪がれ、靈感の強いクラスの女の子が悪霊を見てしまい、大騒ぎになったために、転校先でユウは孤立してしまった。

だがハチと転校先の人々、どちらが常識的かという転校先の反応が普通だろう。

悪霊が憑いていて、時々独り言を言うユウを恐れない、ハチの反応の方がおかしい……と思う。

「あのさ〜ハチ。他人から見ればね、コイツ、悪霊は見えない言葉も聞こえない。だから独り言を言い、いきなり怒りだして、ゲームパットを床に投げつける。そんな私はおかしな人間に見えるはずなの、普通はね」

頭は身体に比べて大きめ、幼い子供のよう。

だが大きな垂れた黒い瞳は、不思議な落ち着きに溢れている。

「ふ〜ん、そうなの……それで？話し合いは終わったの？悪霊さんと」

「いや、ただだけ。これから佳境に入る予感」

「そう、まだ続くのね。じゃあ私はここで、物語の続きを読んでるよ」

持っていた本の扉を開いたハチが、本を読み始める。

何か納得が出来ないユウ。

「もう子供じゃないんだから、八チも少しはわたしを怪しめ！」

「また、ユウがおかしな事を言い始めたよ」

「八チは私の事、おかしい奴だと思わないの？八チにも悪霊は見えないよね？」

「うん、見えないよ、言葉も聞こえない。でもユウが見えるって言うなら、いるんでしょう？そこに」

「そうだけど、なんで驚かないのかなあ……八チちつとは驚け！」  
おかしなユウの要求に、不思議そうな顔。

「それは子供の頃から、ずっとそうだからだよ」

「そんなものなのかなあ？慣れてるから……って事？」

「そんなものだよ。別にあたしは、おかしな事を言っていないでしょ？」

まだ疑問の残るユウの顔を見た、幼い大きな瞳は逆に聞き返す。

「それともユウは、私に嘘をついているの？」

真っ直ぐな八チの瞳に慌てて否定する。

「違うよ！私は八チに嘘なんかつかない」

八チへの誤解は絶対に生みたくないから、さらに言葉を付け加える。

「絶対にね！これ Teppan」

その言葉にニコッと顔を緩めます八チ。

「うん！分かったよ」

自分はおかしい奴と提言したが、その行為自身が、おかしな事だと八チに言われた。

でも、そのことはユウをホッとさせた。

「じゃあユウ、終わったら教えてね！」

「ねえ、なんで八チの髪の毛って緑色なんだっけ？」

八チの明るい緑かかった髪。後ろ髪だけが背中より長く伸びている。

「うん？またその質問なの？何回も聞かれている気がするよ」

何回聞かれても答えは変わらないと、首を振った八チ。

今度は八チの変わった考え方が、どの辺から発生するカリサーチし

てみる。

「だって、八チのお母さんって黒髪でしょう？お父さんって外人だっけ？」

「さあ？別に染めているわけでもないし、生まれた時からこの色らしいよ」

お父さんが「宇宙人とか未来人とか超能力者なら」八チのなんでも許容する考えも、ユウにも少し納得出来る。

「後ろ髪だけ伸ばしているのは、八チのお母さんの要望なんだよね？」

今度は育て方に焦点を移してリサーチするが、やはりそれがどうしたの？的な発言。

「そうだよ。お母さんが伸ばしなさいって。でも理由については聞いてないよ」

「またもや八チの不思議性を立証出来きなかった。」

「なんかさあ……八チ」

「まだ聞きたい事があるの？ふああ〜ちょっと眠くなったよ。あたしはいいけど、悪霊さんはほつといて大丈夫？」

ちらりと後ろを向くと悪霊は、戦国SARABAをロード中で、機嫌は上々の模様。

「あんたの方が、悪霊より不思議な感じがしてきた」

「ええ？そんなことないよ」

釈然とはしないが、八チの不思議を探る作業より、後ろで脳天気なゲームをプレイしている悪霊への攻撃が先だな……と方針を変える。

「そうね、まずはアイツをやっつける方が先だわ」

「よくわかんないけど、終わったら教えてね！」

「うん、分かった。ごめん、少し時間がかかるかも」

「いいよ。あ、悪霊さんもがんばってねー」

悪霊の言葉は届いていない、その姿も見えない筈なのに、悪霊のいる方向へ八チは微笑んだ。

「おお、八チ、我は頑張るぞー！」

ゲームパットを握った悪霊が八チを見た。

「まったく、悪霊が何を頑張るのよ？八チも余計な事言わなくていいの！」

八チは笑い再び本を開き、栞を夾んだ頁から読み始める。

「ところで何の本を読んでいるの？」

「え？これだよ」

八チが表紙を見せてくれた。

「えーっと、ばけ……化学の本なの？」

「違うよ、小説だよ。なんで化学の本だと思うの？」

「化学の事を“ばけがく”って言うから」

「鬼さん、蟹さん、蝸牛さん、猿さん、蛇さん、猫さん、蜂さん、鳥さんが出てくるよ」

「ふーん、最近の猿蟹合戦は、登場人物が増えたのね」

「そんな古い本じゃないよ」

「そうなの？猿と蟹が出る物語って、猿蟹合戦以外思い浮かばないなあ。それと随分立派な表装ね。単行本じゃないんだ。それでその本は面白いの？」

「うん、すごく面白いよ」

身長は百四十五センチ、頭が大きめの幼児体型。何事にも驚かない、全てを普通だと言ってしまう心を持つ、浜木綿千香のニックネーム、八チはユウがつけたもの。

生まれたときから超常現象を引き起こすユウに、人は驚きそして排除の心を持った。

その時ユウは、自分が普通じゃないと思いきらされる。

ユウは孤独を感じ……そして思い願う。

“この世界なんか壊れてしまえばいいと”

## 普通こそが難しい！買い物大作戦

二年前の秋。

「はい、みんな〜！ここを見てね！」

近所のカメラ屋さん、もう若旦那と呼ばれるには、大きなお腹と最近増えた白髪が、恥ずかしい年齢になった。父親の代から続けている、近所の小学校と中学校のアルバムの撮影の仕事。

今日はユウのクラス、中学一年C組の写真を撮る予定だ。

「それじゃあ、撮ります。みんな、目をつぶらないでね……はい撮りますよ」

カシャ、シャッターの落ちる音が聞こえ、撮影の終了を告げる声。

「はい、終わりました。みんないい顔で撮れているか、写真の確認を行うので、ちょっとだけ待ってね」

幼い子供へ話すような指示の仕方。

でも、街のカメラ屋さんには、学校のイベントがある度に、写真を撮られてきた、クラスのみんなには違和感はなかった。一眼の大きなデジタルカメラのメモリ情報から、撮ったばかりの写真を表示させ、撮れ具合の確認作業を始める。途中までは、にこやかな顔で写真の撮れ具合をチェックしていた、カメラ屋さんの手が突然止まる。

「え〜と、みんな、ちょっとごめん……」

体育館に仮設置された、撮影用の三段組みの足場から、降り始めたクラスみんなに呼びかける。

「逆光が入ったみたいだ。もう一度撮らせてください」

「え〜!?!」

クラス全員から不満が起きる。それでも、顔見知りのカメラ屋さん、にこやかな顔で再び撮影の準備に入ると、クラスのみんなは、指定された場所に、小さな不満と共に戻った。

「じゃあ……始めます」

再びクラスの全員が準備する、数名がアドリブを加えてポーズ。

「ここを見てください、はい、撮ります！」

カシャ、シャッターの落ちる音が聞こえ、再び撮影の終了を告げる声。

「はい、終わりました」

再び撮影した写真の確認に入るカメラ屋さん。

撮影時間が長くなってきた一年C組は、だんだんと不満の声が聞こえ始めた。

「撤収作業開始します〜」

解散しようとするユウのクラスに、再びカメラさんがストップをかける。

「ごめん、もう一回だけ！」

両手を合わせてお願いするカメラ屋さん。

「え〜マジか！？またやり直し？」

だが今度はなかなか収まらない一年C組。

不平不満があちこちで聞こえた。

「カメラ屋さん、腕悪いんじゃないの？」

「おれが撮ってやろうか？おれの新しいスマホで！」

「ばーか、プロの使うカメラの画素数はスゲーんだぞ。おまえのスマホなんかいらねーよ」

「もう〜疲れちゃったなあ〜」

「いったん、休憩を要望ね」

だんだんクラス全体に広がる不満の声。撮影用の段を降りて、体育館の床に座り出す女子もいる。困った状況に、カメラさんは、若旦那と呼ばれても、周りも自分も納得出来た時代を思い出す。

……中学一年生が、疲れた、休みたい、そんな言葉は聞いた事は無かったな……

だが、もう時代は進んだ、進み過ぎたくらいに。

手にしているカメラも、姿こそ一眼のカメラの姿をしているが、中はネガに画像を写し込む機械ではなく、デジタルデータを扱うコンピュータ。状況も昔とは大きく違う。カメラ屋が生きていける、

ささやかな仕事も本当に小さくなった。だからもらった仕事はキツチリこなすしかない。例え相手が“奇妙なもの”だとしても。

「はいみんな黙って！もう一度撮ります。準備して！」

さつきまでの、にこやかな顔はどこかへ消え。深刻な顔で大きな声を出すカメラ屋さん。

その豹変ぶりにクラス全員は驚き、段から降りていた女子もスマホを見ていた男子も、二回目よりも早くポーズを決め、三回目の撮影が行われた。

カシャ、シャッターの落ちる音。急いで三回目の写真の確認を行うカメラ屋さん。

今度は出来るだけ、カメラの露出やシャッター速度など、撮影用の設定を変更して、写らないようにしてみた。

「これでうまくいってくれよ！」

天にも祈ったその顔に、あきらめの表情を浮かぶ。

首から下げていた大きなカメラを、機材バックの中に置くと、クラス全員が立つ、体育館に仮設置された、三段の足場に向かって歩き出した。

そして立ち止まったのは、足場の三段目の左側に立つ、少しやせ気味で背が高い女の子の前。

「ユウちゃん」

きれいな卵形の輪郭を持つ顔が向きを変え、ツリ目で大きな瞳がこちらを見る。

「ごめんな。済まないけど……また……外してくれるかな」

クラス全員が注目する中、無言で五十センチの高さの足場から飛び降りる。

ネイビーレッドのチェック柄のプリーツスカート裾が風圧でめくられて、紺色の裏地と太股のかなり上までが露わになるが、ユウはクラスの視線など気にせず歩き出す。

そのまま体育館を出て、渡り廊下へと向かって歩いていく。

「ユウちゃん、ホントごめん！」

ユウの背後から、カメラ屋さんの謝罪の声が聞こえる。

薄いピンクの口を強く結んだまま、体育館の出口まで移動していたユウが、最後の謝罪の言葉聞いた。

「後で直してクラスのみなんと一緒に入れとくからね」

……また“奇妙なもの”が写真に写ったのね……

「はあ、また一人で合成写真で参加かあ……」

今までクラスの全員の写真に、ユウが合成写真以外で一緒に写る事は無かった。

「別に私は病気でも、まして死んだわけでも、ないんだけど」

……まあ、一人がいいか、いつもの事だし……

そう呟き、それ以上は考えるの止める。

そんなユウともう一人、合成以外で写らなかつた者いた。

「待ってーユウ私も一緒に行くよ」

少しかん高い可愛い声。走る姿は頭が大きくて、バランスがとれない。

愛らしい姿の浜木綿千香が懸命にユウの元に駆けってくる。

「クラスの記念写真はどうしたの？千香」

「足が早いよユウ。追いつくのが大変だよ」

千香がゼイゼイと息を切らす。

「またわたしにつき合ったの？」

「ふうふう、ユウは歩くのが早いよ」

「あなたまで合成写真で参加する事ないって、前にも言ったわよね？」

「うーんー言ったかも……ハアハアでもねーユウ……ふう」  
息を整える千香。

「ユウが一緒じゃないとね、あたしも嫌なのよ」

ユウは足を止め、横に明るい緑かかった髪が並ぶのを待った。

「もう一度言うけど、わたしにつきあう必要はないわ」

ユウが一人になりそうな時は、緑かかった髪がいつも側にいた。

そのことは嬉しい反面、浜木綿千香が自分のように、クラスからは

み出さないか、ユウの心に重荷を課していた。

「私もユウに、いつも言ってるよ！」

「えっ？」

ユウが見た千香の丸い顔、垂れ気味の大きな瞳。

こんな時に千香が送る視線と言葉には、意外な力強さが伴う。

「いつもユウと一緒にいたいってね！ユウは忘れたの？」

……いつも何も言えなくなっちゃうなあ。八チのストレートに向かってくる気持ちに……

さつき心で呟いた言葉「一人でもいいや」自分だけが特別視される事への、ひねた気持ち崩れていくのを感じる。

「分かった。そうだね。千香の言うとおりで。また私の負けだね」

「負けた？」

「そうだよ千香はまるで、忠犬八チ公のようだから」

「うーん？八チ公？あの渋谷の銅像の？」

いつも真っ直ぐにユウを見る瞳に照れて「ありがとう」と素直に言葉を繋げられない。

かわりに出たのは千香へのニックネームだった。

「そうだよ、飼い主をずっと待ち続けた忠犬八チ……さてよ、はまゆう・ちか、だから」

「どうしたのよユウ、急に考え込んで？」

「そうだ！これからは千香の事を八チって呼ぶからね」

「八チ？それが私のあだ名なの？」

「そうよ。はまゆう・ちかの、名字の（は）と名前の（ち）をとって、八チ」

「なんか、最近流行っている、アニメのタイトルを縮める呼び方みたいな感じよ」

「たしかに最近“オレイモ”とか“アノハナ”とか縮めて呼んでるわね」

「縮めて呼んでもらえないと、売れないとか聞いた事もあるよ」

「そうね　あと、八チはいつも私についてくる、忠犬八チ公のよ

うにね。それともかけた」

「そうなの？元々あたしは名前が短いから、今まで略された事ないよ。なんか変な感じがする」

「八チってあだ名は嫌？」

「ううん、いいよ八チで。ユウの好きに呼んでよ」

「じゃあ、改めて言うね。わたしは……八チが……いるだけで言いたい言葉がうまく埋められない。

「え？ユウとあたしがなに？」

こんな時に、素直に話せない自分のひねた心が少し嫌いになる。

「……八チは……私と一緒にいると虐められるよ！」  
埋めるべき言葉が感謝から警告へ変化した。

でもそんな脅しめいた言葉でも八チは「そうなの？」とユウに問いかけてから「ユウと一緒にいる事が嬉しい」と返した。

そんな素直な姿にユウの口調は、自然に和らげられる。

「……ごめんね、私、あなたにちゃんと感謝できない。何もしてあげられない」

自信なさげなユウの言葉に、少し八チの表情が曇った。

「そんなこと……あたしも一緒。ユウには何もしてあげられないよ。ごめんね」

八チの明るい緑がかかった後ろ髪、腰の辺りまで降りたそれに触れながら、ユウは少しだけ勇気を持って素直に答える努力をした。

「そんな事はないよ。八チが側にいてくれるだけで……嬉しい……よ」

ユウの恥ずかしそうな姿と言葉に、八チは明るい表情に戻る。

「うん！それなら私にも出来る。いつでもどんな時でも私はユウと一緒にいるよ」

八チは約束を守りユウの側にいつもいた。

父親の仕事の都合でユウが引越すその年の冬まで。

そして中学の最後の年、三年生になったユウは帰ってきた。

夏へ向かうこの街に……八チの側に。

「アチチ、さすがに暑くなってきた、もう七月か　今日も授業長  
かったなあ。なんで学校の勉強って面白くないんだろ？」

「うーん？ユウは何の教科なら、興味が湧くのかな？」

「そうね、黒魔術とか　飛行術が今の季節はいいんじゃない？この  
まま箒にまたがってピューンって家へ帰還するの」

「……ポッターさんの学園へ転校しないと、ダメそうだよ」

「イギリスは遠いなあ。わたし英語の授業は苦手だし。それにして  
も暑い……あ！」

いつもの学校の帰り道、八チと一緒にユウが何かを思い出す。

「八チ、今週の日曜日の予定は空いている？」

「うん。大丈夫だよ、何か用事あるの？」

「さすがに暑くなってきたから、夏物の服でも買おうかと思って」

「ふーん、随分ゆっくりなのね。もう七月で十分暑い夏だよーなっ  
！」

「夏の準備としては少し遅いか。でも、アイツがいると部屋は底冷  
えがして寒いくらい。季節感が狂うわ。エアコンいらずは、省エネ  
のこのご時世には良いことだけだ」

「そーなんだ悪霊さんがいると寒いんだ！それってかなり便利だよ」

「その代わりに冬はもの凄く寒いよ。シャワーから出たらすぐに着  
替えないとね、風邪ひくわ」

「そっかーなかなかうまくいかないもんだね」

八チが大きな頭で頷く。

「それと実はね、夏服は先週買いに行ったんだ」

「えー？一人で行ったの？ひどいなあ、あたしを置いて行って。で  
もお買い物に行ったなら、もういいでしょう？まだ買いたい物があ  
るの？」

「ごめん八チ、買い物は事前に計画していたわけじゃなく、何気な  
くフラリと、店に立ち寄っただけなの。八チを置いて行く気は無か  
ったの」

「べつに問題無いよ。さっきのは冗談だからね」

「うん分かってる。それでね、お店で気に入った服が何点見つかった夏服を買おうとは、したんだけど……」

「うーん？お金でも忘れたの？」

「いや、そんな事なら全然いいんだけどね」

日曜日、原宿をブラブラしていたユウは一件の店に入った。

その店で売っている洋服は値段も手頃だし、中学生としては落ち着いた感じが好きな、ユウの趣味にも合っていた。

何気なく歩く店の中は結構広くて、一通りの商品を見るのに一時間近く掛かってしまった。

「以外と時間掛かっているなあ。そろそろ決めなくちゃ……あれ？異変に気がついた。」

会わない。一時間店内を移動して。店員に一人も会わない。

たしかに大きめの店だが、一時間も買い物をしていて、一度も店員と接触しないなんて、そんな事があるのだろうか。ユウは一応お客様だし、少しくらい気にかけてくれてもいいはず。

……前に来たときは、店員の接客は良かったよね？……

「たしかに店員に、むやみに声かけられるのは好きじゃない。でもこの服のサイズの在庫を聞きたい」

ユウから一本右の通路を、二人の店員が商品を運んでいる。

「いるじゃん！あの二人に聞こうつと！」

店員が進む通路へ移動し、そこで店員を待つ事にした。

二人の店員が近づいてきた……

「あの、すみません。この服のサイズ、一つ小さいのありますか？あれ？」

質問は確実に届いたはず。そう確信出来る至近距離。

だが、二人の店員はコーナーを直角に曲がり離れていく。

「おいおい！いくらなんでも、その行動は不自然過ぎるだろう！？」話しかけたのに、無視されたユウは一人でつつこむしかなかった。

ユウのつつこみを知ってか知らずか、さらに加速して離れていく二人。

その顔は必死の形相だった。

接客を拒否され、さすがに力チン、ときた。

「なによ！この店！店員の教育がなってないわよ！」

キヨロキヨロ店内を見渡し、キッチンとしたスーツを着た店長らしき人物を発見する。

普段は目立つのが嫌なユウだが、ムカついたその日は、店長に向かって歩き出す。

「あの一すみません！」

「はい、お客様、なんでしょうか？」

ユウの言葉で振り返った、紺色のスーツを着た店長。

「あのですね！服のサイズを聞きたいのに、店員がわたし避けている。どうなってるんですか？この店は……お？」

不満を述べている最中に、ユウの顔を見た店長は顔がこわばり、微かに震え出した。

「あのですね、聞いてますか？店員が接客してくれないんですよ！」

「す、すみません。まだ全員分のお守りが届いていなくて」

「お守り？」

「は、はい。あとお被いは来週の月曜日になってます」

この展開、気になる単語。

……わたしに関係在り？でも一応客なんだし、ここはとりあえず否定していいこと……

「何それ？それと接客に何か関係があるの？」

ツリ目の大きな瞳が店長を睨んだ。

「いえ、なんでもありません。わ、私で良ければ、お、お伺い、いたします」

まるでチンピラに、街で因縁をつけられた普通会社員のような店長。

「あんたの話、聞き取りにくいですけど。それにわたしは、脅かしているわけじゃないわ」

「あ、はい。まだ、脅かされた方が、ましってというか……」  
「はあ？」

……なんでこんなに恐れられているのかなあ。前は普通の対応だったのに……

「フフ……キャハハ」

ユウの後ろで若い女の笑い声がした。

「やっぱり原因は……私!?」

先日びつくりドンドンに、ハチと一緒にハンバーグを食べに行った時にも、ソレが話かけてきて、店内が大騒ぎになった。

「この笑い声……今回もまた地縛霊に憑かれた？」

奇妙なものが見えませんが、祈りながら、振り返るユウの目に、白いシャツに紺のチェックのスカートの女の子が見えた。他校の中学に通う中学三年生、ユウに負けずに有名な女子、道明寺明莉どつみよつじ・あかり

「残念でした！人間ですよ〜それもかなり美人ですよ〜きゃはは」

「明莉、あなたここで何を……てか、あなたは笑いすぎよ！」

全国模試で常にトップテン圏内、色白でスタイル抜群の道明寺明莉は笑いが止まらない。

だんだん腹が立ってきた、嫌みを言ってみる事にする。

「あんたさ、Cool Eyeが下品に笑いすぎ！」

淡い青い色の髪はモテカワヘアで、肩にかからないくらいの長さで軽くパーマをかけている。

紺のチェックのスカート、裾には白い横のラインが入っている。白いシャツにモスグリーンのネクタイを胸元で結ぶ。陶器のようなきめ細かい肌、均整がとれた顔立ちは、抜群スタイルと合わせて、普段着で歩く街では良く高校生や大学生に間違われる。

外人モデルの様な、ヒョウのような美しく艶やかな肢体。

瞳は高い理性を見せるが、普段は冷めた表情をしている。

道明寺明莉はCool Eyeと他校生に呼ばれる程、完璧な知性と体型を持っていた。

都内で文武両道を目指す私立中学の特待生である、明莉はやっと笑

うのを止める努力を始めた。

「あはは、ごめん。そのCool Eyeだけど、周りが勝手に言っているだけだし、あんまりいい意味じゃないでしょう？。普段私が笑わないのは、世の中が面白くない奴らばかりだから……なんだけどね」

「あんたはわたしの前では、いつも笑っているじゃない！現に今もそうでしょう！？」

「フフ、私を笑わせるのは、ユウとあとは若干二名程。極めて貴重な存在だわ」

「あんたの、期待のお笑い三人組に、エントリーしているの、今知ったわよ！」

「ふふ、ありがたく思いなさいね」

また笑い出す予兆を見せた道明寺明莉。

「それに今の状況よ。ちゃんと見なさいよね」

「何よ！なんの状況よ」

「私が笑わなかったらユウは、次の展開に困ったわよ？」

「な、なによ！？私が困るって」

明莉が目線で後ろを見ると催促する。

振り返ったユウの目に、お守りを握りしめ拝み続ける店長他、店員十名が映った。

「あんた達、何か用なの？この女は、残念ながら生きてるから、心配ないわ」

本当に明莉が生きている事が残念そうな仕草。

そんなユウに店の従業員を代表して、紺色のスーツの店長が懇願を始める。

「どうか成仏してください。幽霊が出る店なんて噂は困ります。最近不景気でお客さんが減って、それにあなたまで現れるなんて。でもどうか、お気を悪くされずに。災いは起こさずにおとなしくお帰りください。ああ、神様お願いします、私達の願いを聞いてくださいー！」

「成仏つて……私はまだ生きてるわよ。それにあなた達はいったい誰に何を頼んでいるのよ！」

「す、すみません、もう私達ではどうにもこうにも……もう神頼みしか残ってなくて」

「はあ？私に帰つてと、お願いするのはまだ分るけど。神様にお願いつて、いつたいどういう意味なの？」

「あ、怒らないでください……このとおり謝りますから。すみませんお許しください」

まるで懐かしのダイエー映画の大魔神怒る！みたいな雰囲気店内。大魔神役のユウが、村の村長役、店長に理由を聞いたです。

「ちゃんとわけを説明してよね！私が納得するような」

大魔神ユウは、こんな扱われ方は不当だと不満顔。

「は、はい、では述べさせて頂きますね」

ユウを下目使いでチラ見する店長。

「こうというのが下目使いよね。でもおっさんだと萌えないか……」

「はあ？なんの事でしょうか？」

店長の問いに益々不機嫌になり、ツリ目と声が大きくなる。

「あなたには関係ないわ！人の苦い思い出を、呼び起こすもんじゃない！」

「うああ、す、すみません、もう余計な事はいいけませんから、お怒りをお鎮めください」

大魔神は両手を組んで憤怒の表情をしていた。

「だから、早く説明しなさい。何処かの政治家みたいに説明責任は放棄したら……ぶちのめす」

「は、はいそのお言葉、肝に銘じます！」

ダイエー映画、大魔神怒る！は、純粋な少女の祈りで柔和な顔の大魔神の石像が、憤怒の表情に変わり、人々を苦しめる悪漢をぶちのめす話。

ここに現れた大魔神ユウは、勘に障る少女、道明寺明莉の笑いのでいで、最初から憤怒の表情をしていた。

「あなたがこの店に来店されるようになって、一番左のトイレがずっと使用中になりました」

恐る恐る事情を話し始めた店長、下目使いからチラ見で大魔神ユウの表情を伺う。

……ギク、もしかしたら いや、まだわたしのせいだと決まった分けじゃない……

「どうかされましたか？」

「なんでもないわ、話を先へ進めて」

「は、はい。トイレをノックするとドンドンと返事があって……それが閉店までずっーとそうなんです。仕方がないので閉店後、上から覗くと誰もいない」

「う、そ、それで？」

「あげく確認した女の子の家のトイレが開かなくなってしまいました。その子は一人暮らしなんですよ。自宅のトイレに他に何がいるっていうんです？」

「やっぱり……いや、そうなの？」

だんだん興奮して話す速度が加速する店長に、この展開はやばいなと思いはじめ。

「店の試着室はお客様の叫び声が聞こえます。鏡を見たお客様が、奇妙なものが写ったとか」

「こりゃ確定だ」

「え？確定って？」

「な、なんでもないわ。それで結論は？あなたはどう思うの？」

動揺しはじめる大魔神ユウ。

「つまり……全ては、あなたが来店してからで……他にも色々ありますが、話しましょうか？」

「あゝもう分ったわよ！それ以上の説明はいらない！」

両手を前に出してストップポーズ、店長を強制停止させる。

「つまりあなたはこう言いたいわけ？私が来てから超常現象が起って困っている」

うんうん、と頷く店長他、店員十名。

「だから店には来ないでください……あなた達はそう言いたいわけね」

「その通りです」

頷く店長他。

「でも、それは私のせいじゃない……とか言ってもどうせ無駄よね？」

「そうです正解です」

お守りを握りしめ、頷き続ける店長、他の店員は十名で、男女比率は三対七。

比率七、女性店員は、既に恐怖で泣き始めていた。

「べ、別に泣かなくてもいいじゃない……明莉、おまえは笑うな！」  
キヤハハ、とまた大笑いを始めた明莉と、必死に祈り続ける店長と店員。

「はああ、しょうがないなあ……分かったわよ」  
ユウは肩を落とした。

「ハハ、とっても面白いよ。ユウは色々な幽霊さんを連れているのね」

「全然笑い事じゃないわよハチ。それと、幽霊は連れているんじゃないわ、私に憑いてくるの！勝手にね。これもアイツ、悪霊のせいだわ。悪霊に惹かれて霊が集まるのよ。あと霊感が強い店員は、お店で雇わない、都内条例を制定して欲しいわ」

「そんなお店屋さんへのお願いは絶対に無理だよ。おかげで、ユウと一緒に買い物に行けるから、結果的には良かったかな？」

「わたしもハチとの買い物は楽しみだけどね。買い物へ行ったらアイツが……」

「あ、悪霊さんも一緒だね、とうぜん」

「はあ、どうしようかハチ。アイツ何でも興味持つからなあ。絶対憑いてくる。何かアイツが、憑いてこない方法を考えねば……また

騒動になる、はああ」

考え事をしているユウを、微笑みながら見つめるている、その人数は二名に増加していた。

丸顔で目が丸くて可愛い、八チとそっくりの顔立ち。違いは後ろ髪の毛の長さで黒髪。

はっ、ユウは深く沈めた意識から、慌てて自分をサルベージする。

「こ、こんにちは、おばさん」

「はい、こんにちは。ユウちゃん」

おばさん、八チの母親がユウに挨拶した。

どうやら八チの家の前で、しばらくユウは自分の考えの中に、潜水していたらしい。

「あの～おばさん、いつからそこに？」

バツが悪そうにユウが質問する。

「うん？ああ、一時間くらい前かしらね？」

「え？そんなに……ご、ごめんなさい」

ユウは時折、自分の考えの中に沈み込むクセがあり、その時はまったく周りが見えなくなる。

今も、日曜日の八チとの買い物に、どうやって悪霊を阻止するか考えていた。

「うちの千香が家の前で、じーっと、何かを見ていたの。それでね」  
一時間も待っていた事など、気にも留めない八チの母親。

「見たらユウちゃんが、立っていたから、私も家から出てきちゃった！」

「声をかけてくれれば、良かったのに……」

ニコリと笑った八チの母親はかまわないと言った。

「いいのよ。ユウちゃんは小さな頃から、時々考え込むクセがあったからね」

「はあ、すみません……またご迷惑をお掛けしています」

今年になってから、生まれた地元に戻ってきたユウは、幼い頃から八チの母親には迷惑を掛けている。でも、いつもの事だと、昔、幼

いユウに接したように、今も軽く受け流すだけだった。

八チの家は母子家庭。なぜ父親がいないかは、ユウは聞いたことは無かった。

この親子には、離婚とか死別とか暗い記憶なんて似つかわしくない。ユウの勝手な想いかも知れないが、八チとおばさんの笑顔を見る度にそう思う。

父親はどこか、長期出張に出かけている、そうに違いない。

「ユウちゃん……?」

再び深く沈み始めた意識が、八チの母親の言葉で浮上する。

「あ、はい?あ、また考え事をしてた……ごめんなさい!」

八チとおばさんが同時に笑顔になった。

「ユウちゃん、なんで謝るの?それより寄っていくでしょう?」

「え?ああ、今日は……」

「間に合わせて良ければ、夕飯を一緒にしたいわ」

「いつも済みません」

「ううん、ユウちゃんが一緒だとおばさんも楽しいわ」

ユウは軽く頭を下げる。一人暮らしを気遣い、いつも夕飯に誘ってくれる。差し入れをユウの部屋に届けてくれる。この優しさは無償なものだと感じる。

他人はよく口にする……一人暮らしなの?中学生なのに可哀想だね

……

八チもおばさんも一度も「可哀想な」そんな言葉で修飾などしない。あたりまえの事のように、平等で対等に温かいものを与えてくれている。

「わたしも、おばさんと八チと一緒にいるのは楽しいです」

……素直に言えた……

ホツとするユウ、感謝の言葉におばさんは頷いた。

「良かったわ。じゃあ、家が上がって頂戴。すぐに夕飯の仕度をするから」

後ろ髪を引かれる、でも今日は悪霊対策を練らないといけない。

「ありがとうおばさん。でも、このままだと考え込んで、二人を待たせてしまいそう。だから今日は失礼しますね」  
頭を軽く下げてから八子の方を向く。

「じゃあ八子、日曜日は予定を空けておいてね！」

「うん、わかったよ。じゃあねユウ、また明日！」

「またね八子、おばさんまた来ますね！」

二人に別れの挨拶をしてから、クルリと後ろを向いて歩き出す。姿がだんだん遠くなるユウ、その後ろ姿に手を振る二人。ユウが見えなくなっても、手を振り続ける二人に何度か振り返る。

最後に二人を振り返った時、空は茜色に染まり始めていた。

大きな夕日がビルに隠れた時間に、ユウは自分の部屋に帰る。

またゲームパットを握りしめているアイツ。

「またゲームなの？よく飽きないわね……おや？」

何かいつも違う悪霊の様子。いつもなら、ここで一言あるのだが、今日はそれもない。

「どうしたの？妙に静かだけど……」

ゆっくりと、顔をこちらに向ける悪霊、やっぱり何か変だ……どうしたんだろ？

「ユウ……こ、これ」

「これって何のこと？」

「これはどこに居るのじゃ？」

普段と違う態度を不思議に思い、悪霊の問いを聞き直す。

「はああ？何がどこにいるって？あんたどうかしたの、なんか変だよ」

「この亡者どもだ」

「亡者？あんたの言っていることが、よく分らないわ」

ユウはソファの下に何か落ちているのを発見。

「うん？これは」

落ちていたのはゲームソフト、それを拾い上げたユウ。

「ああ、なるほどね。これの事が」

「どうやら、八チの母親がママゾンで頼んでいた、新作ソフトが届いたらしい。」

「こんな恐ろしい亡者が、この世にはおるのか!？」

「“ダークデモンズ”はゾンビを倒す有名なゲームのナンバリングソフト。マゾゲーと呼ばれる程の難易度が売りのアクションRPG。」

「あなたねえ……悪霊のくせに、ゾンビが怖いのか?」  
呆れながらユウが悪霊を見た。

「こんな者達は、戦国時代にはおらなかつたぞ!」

「バカねえ……これはゲーム……うん?まてよ!？」

良い考えが浮かんだ。

「なんじゃ、急に黙って……なんで後ろを向いた?」

悪霊は唐突なユウの行動に疑問を投げかける。ユウは笑みを見られないように、心を落ち着かせてから、深刻そうな顔と声に、偽装してから答えた。

「コホン、いるよ……ゾンビはいる。東京にたくさんいるわ」

「何!そんなにいるのか?この辺にもおるのか?」

「うんとね……ちょっと待ってね」

少し考え込んでから、場所の選択を行う。

「はい、決定しました!ゾンビがいる場所は、新宿・渋谷・池袋です」

「……何か急遽、今決まったような言い方じゃの?」

「悪霊のくせに、あんまり深く考えないの!禿げるわよ」

「だから、我は若いと言っておる。その三力所以外に亡者はいないのだな?」

念を押す悪霊に、透過するピンクのマニキュアの人差し指を、こめかみに当て場所を追加。

「……あと原宿かな」

「四力所か?それはまた随分限定されておるの」

「えっと、後で少し増えるかも」

「亡者の出る場所は増えるのか……本当にこの辺には居らぬのか？」

「秋葉原はね、女子として行きたい店がないから大丈夫」

「ユウの言っている意味が、たまに理解出来んのじゃが」

「いいの、いいの！わたしの言葉が理解出来ないのは、あんたが年取ってるからよ。なんせ四百年前の武将なんでしょう？今どきの中学生とは話合わないわよ」

「だから、いつも我は若いと言っておる！」

「私もいつも言ってるけど、悪霊の年齢なんか興味は無いの。で、あんたはゾンビが苦手なんだよね？」

「この亡者達は好かん」

「ふむふむ、実は今度の日曜日に、渋谷に遊びに行く予定なの」

「なんだ？今、渋谷という場所には、亡者が出ると言っただばかりではないか？」

「うん、だからあんたは、憑いて来ない方がいいわ」

急に真顔になった……と、感じられた悪霊が首を振る。

「そんな危険な所に、ユウを一人で行かせるわけにはいかん」

表情が分らない悪霊の真つ黒な顔。だが付き合いが長く、強い靈感があるユウには、今どんな表情を悪霊がしているか。なんとなく分るらしい。

「なにを考える事があるの？ゾンビが苦手なら、私に憑いてこなければいいだけの話」

悪霊が考えるのを止めてユウを見る。

「ユウはそんな危険な場所に、何をしに行くのじゃ？」

「え？あ、えつと、買い物よ。あとゲーセンとか……カラオケとか」

「いかん！危険な亡者どもがいる場所に、遊びに行くなどもってのほか。遊技は家でやればいい」

「買い物はどうするのよ？一人暮らしになってからは、時間が無くて買い物に行かないから、着たきり状態なのよ。忘れているかもしれないけど、私も一応、女子なんですが？」

「別に忘れてはoirん。おなごは着飾るのも仕事じゃ」

「お、分つてくれた？」

「大事なものだが、我が持っている着物を用意しよう」

「はあ？もしかして戦国時代の着物をわたしに着れと？」

「そうじゃ、と頷く悪霊に、大きく首を振って否定する。

「あんたねえ……私はただでさえ霊感が強くて、学校で気味悪がれるのに、そんなの着たら、何て言われるか……」

「年頃も合つておる……ユウに似合うと思つぞ」

「絶対着物なんか着ません！」

「なぜじゃ？それに遊技など、ホレここでやればいい」

「家だとあんたが、ずーつとゲームしてるじゃないの！」

「我と一緒に遊技をすればいい……合力遊技も楽しいものじゃ」

額から髪をかき上げテッペンに集め、しばらくその体勢でためる（攻撃アツプ効果！）を実行してから、一気に言葉を放出する。

「あんたさ！なんで中三女子が、おっさんの霊と協力プレイで、ゾンビを倒さないといけないのよ！だいたいこれって、十八禁のゲームじゃない！？」

「どう言おうが、とにかく我は反対じゃ」

「あんたに止められても、私は行っちゃうけど？どうする？憑いてくる？でもゾンビが出るかもねえ。あんたの嫌いなゾンビが一杯ね」  
ユウの言葉のため息をつき、再び腕組して悪霊は雄々しく言った。

「怖いからといって、亡者との対決を避けるのも武士としては恥ずべきもの」

急に態度が変わった悪霊に、ユウがビツクリ。

「ええ！やっぱり憑いてくる気なの！？」

「この亡者どもが襲ってきたら、命を賭しておまえを護ろうぞ！」  
「パサリ、頭のテッペンにまとめた髪を解放したユウ、明るい茶色の髪が肩へと落ちる。」

「あらら、武士の意地スキル発動？困つたな、良い作戦だと思つたのになあ」

両手を胸に組んだ、雄々しき悪霊の姿にため息をつく。

「はああ結局憑いてくるのね……」  
何気なく手にしたゲームのパッケージを見たユウ、新たな作戦のヒントがあった。

「うん！？まてよ。これ、使えるかも！」  
両手をポンと打った。

「大丈夫！あんたが、憑いて来なくても危険は無いわ！」

「何？どういう意味じゃ？」

「ほらこれを見て！」

ゲームパッケージの表に書かれた文章を悪霊に見せる。

「十八才禁止？」

のぞき込んだ悪霊が呟く。

「そうそう、ゾンビはね、十八才以下は襲わないのよ」

ユウはゲームのケースをひっくり返す。

「ほら、ここに細かく書いてある“このレーティングの対象は十八才です”って。レーティングはこの時代で公に決めた証なの。ほらここに印があるでしょう？」

「れーてんぐ？この“CERO”がお上の印じゃと？……うーむ。

そうは言っても……な」

「あのさ、逆にあんたが憑いて来たら、ゾンビが襲ってくるかもよ」

「なぜじゃ？」

「あんたが年を経ているから」

「だから、我は若いと言っておる」

今度は、ための+ための（攻撃力アップ効果？）で攻撃力をさらにアップしてから言葉を放つ。

「あんたの年齢なんか、ゾンビに分る筈無いでしょう？付き合いの長い私だって、あんたの年齢なんか見当もつかないのにさ。兜に、鎧に、真つ黒な顔じゃあ、誰も判断つかないって。ゾンビは、悪霊のあんたの年齢なんか分からず襲ってくるわ。これは絶対よ、テッパンなのよ！」

「しかし……そう言われても……心配じゃ」

困った表情をした……と思われる悪霊に、再び、ためる+ためる+ためる（攻撃力アップ効果？）で追撃。

「いつもあんたは言っているわ。世の中の“ことわり”は守るものだ」と

数百年前の人間であった悪霊は、ことわりについて良く話す。

世界には秩序があり、森羅万象、雨が降り、雪が積もり、作物が育つ、子が生まれ、親となりそして死んでいく。そんな当たり前前的事にも、全てに、理は存在すると。

そして、ことわりを守らなかった時、この世に大きな災いが起こると。

「そうじゃ、世の中のことわりは破っては決してならん！」

悪霊の言葉にニヤリ……いける！これで押すぞ……

「ほら、よく見て、十八歳以上推奨だと、ここに書いてあるでしょう？ゾンビだって世の中のことわり、CEROは守るわ」

印籠のようにゲームケースを目の前にかざすと、悪霊はますます考え込む。

「ふ〜む、確かに、そうかもしれないが……」

よし！いけた！黙ってしまった悪霊を前に、ガッツポーズで勝利宣言。

「これで決まりね！今度の日曜日は私に憑いて来ない事！いいわね？」

## プレミアムな白い粉〜恐怖のパンミックス

次の日学校で八チへ、悪霊が日曜日のお出かけに憑いて来ないと告げると、ちよつと可哀想ね、悪霊さん……と微笑む。また高次元の神のような、何でも受け入れる精神はやめようよと提言すると、そうだね、たまには一人になりたいよね〜と一応納得してくれた。それからしばらくして 怖ず怖ず、八チが相談を持ちかけてきた

……嫌な予感がある……

「ねえ、ユウ相談があるの」

「うん？八チどうかしたの？」

もぞもぞしてから、八チが内容を語り始めた。

「あのね、このあいだネットで注文したのよ」

「何を？」

「美味しそうなパンの素、プレミアムパンミックス」

そんな当たり前な物をネット買い？ユウは首を傾げる。

「パンミックスなんてネットで買わなくても、その辺に一杯、売ってるじゃない？まあ、最近八チの家では手作りパンがブームらしいから、珍しいパンミックスがあつたら、買ってみたくなるか」

最近のパンミックスは、バターミルクパウダーやカカオが入ったものも売られている。

「うん……プレミアム、世界一の純度って書いてあつたから」

「プレミアムはいいけど、純度って？パンミックスに純度なんてある？」

「うん、そうだよ、純度が高いつて書いてあつた」

なぜパンミックスの純度が気になる？八チの不思議。

一応、パンミックスにおける純度の意義を考えてみる。

「大吟醸のように麦を削つたのかなあ？」

「大吟醸ってなあに？」

「大吟醸は精米歩合50%以下の白米で作るお酒。米を削つて芯の

部分を使うの。穏やかな香りでフルーティな味わいがするわ。白ワインみたいなの味ね」

「えーっと、一応ユウは中学生で十五才だよね……」

「まあね。それで？プレミアムパンミックスがどうしたの？百キログラム届いたとか？」

「それはこの前頼んだお米だよ」

…… やっつぱり、嫌な予感がする……

どうもハチは、トラブルを集めて廻るのが趣味らしく、悪霊に憑かれたユウが感心するくらい、次から次へと問題を拾ってくる。しかもその内容が「そうか！まだその手があつたか！」とユウが感心するくらい、巧妙で絶妙なタイミングで実施される。ハチ自信はまったく自覚はない。だが時々「今ですか？なんで？よりによって今？そんな事をしちゃうかな？」とユウが、疑問符を連発する事も多かつた。

「で？今度はなんですかね？問題というのは？……あ、ちょっと待って！」

右手を胸に置いて深呼吸する。ハチはいつもユウの予想を、斜め横角度八十度の高さを超えてくる。ハチのトラブルに備え、心臓を叩いて、首と肩を回して、準備万端整え、さあ来い！と体勢を整えた。

「はい、トラブル内容をどうぞ！」

「パンミックスの粉がおかしいの」

何か凄い事が来ると思っていたユウは、ガク、と脱力しながらひとまず安心する。

「ふゝそんな事が。良かったホツとした」

「良くないゝ困っているのに」

「粉がだめだったら、捨てればいいわ。はい、問題解決ね！」

「それが、捨てられないの」

「はいはい。捨てられないくらい買ったのかな？ネットの注文の時に入力の間違えた？前回のお米騒動では、二十キログラムを二千キログラムって入れたわね。二トンの米にビックリしたわ」

「今回は違つもの、ちゃん一キログラムを頼んだし、量はぴったりなの。でもねえ〜」

大きな頭を揺らしながら考え込む八チ可愛い！思わず撫で撫でしたくなる。

「それでね……」

「え？問題は量じゃないの？ちょっと待って、再び心の準備をさせて」

右手を胸に置いて深呼吸、心臓を叩いて、首と肩を回して……

「請求金額が1200000000円だったのー」

「わ、わ！いきなり言わないでよ！まだ準備が出来てない」

「ごめんね」

「それで何だっけ？あ、請求金額ね、えーと1200000000円つて、一、十、百、千、万……えっ！一億二千万円の請求!？」

……そのうち八チのトラブルのショックで病院に運ばれそう……

「一キロで、一億二千万円の、プレミアムパンミックスなの」

「馬鹿高過ぎ！そんな事あるはずはない……まてよ？」

……ない、と断言出来ないのが、トラブルを磁石のように吸い付ける八チの諸行だった。

「そうね　まずは、その粉を見せてよ」

「うん、家に置いてあるよ」

その日は急遽、学校の帰りに八チの家に寄ることになった。

「おばさん、こんにちは！」

「あ、ユウちゃんよく来たわね。泊っていく？」

「えーと、直ぐに帰りますから、おかまいなく」

「そう、じゃあ、お風呂入って、食事の用意と晩酌つける」

「えーと、おばさんおかまいなく。覚えているかと思いますが、私は“まだ”中学生なので」

「そーなの、残念ねえ。うちのお父さんは晩酌好きだったのよ。ユウちゃんも小さい頃は、日本酒の山廃仕込みが好きだったじゃない

「あ、ビールはどう？アルコールが少ないから、大丈夫でしょう？」  
「駄目です！アルコールの量は関係ありません、子供の頃は分けが分らずに、飲まされていましたが、二十歳未満の飲酒は法律で禁止されています」

「そうそう、これ甘酒と違う！って怒ってたわね」

「そうです、酔っ払って鉄塔に登って、降りられなくなりました。

それ以来、高所恐怖症が全開です」

「そーなの？じゃあ、やめとこうね」

「はい、その方がいいと思います。それでは八子部屋へお邪魔します」

「あ、ユウちゃん、その前に」

「はい？」

「ここで服を脱いでいって」

「はあ？それはなぜでしょう？」

「洗濯よ。全部洗っちゃうから、パンツも靴下も全部脱いでね」

「たしかに暑くなってきましたが、ここで真っ裸になると、病院が警察に通報される恐れが」

「エアコンなど殆ど使わない八子の家は、窓とか玄関とか全開だった。大丈夫よ。以前うちの千香と一緒に、裸で走り回っていたじゃない？」

「それは十年以上前の事です。覚えているかと思いますが、私は“既に”中学生なので」

「あらそうなの。残念ねえ　じゃあね、あ、ユウちゃんどこへ？」

「お邪魔します！おかまいなく」

「……はあ、やっと八子の部屋に入れた……」

「いつもの事だけど、おばさんを突破するのに、十分は掛かっている」

「うん？お母さんが、どうかした？」

「いや、おばさんは間違いなく、八子のお母さんだなあ、と思った

だけ」

「そんなのあたりまえでしょ、おかしな事を言うのね」  
ケタケタ笑う、八子の頭をポンと叩く。

「もう、あんたは幸せな奴だよ。私と仲がよい以外はね」

「うん、でもユウと仲がいいのは、八子はとつても幸せだよ」

「また、そんな恥ずかしい事をハッキリ言う……」

私は幸せです……結婚式の花嫁みたいな言葉を臆面もなく言っ  
てしまえる八子、ちょっと羨ましいかも。ひねくれたわたしには真似  
できないなあ。両親の遺伝なのか、それが育ち？そういえば……

「八子のお父さんって、何処かへ出張とか行ってるんだっけ？わ  
たしには無いんだ。八子のお父さんに会った記憶が……」

「わたしも、お父さんの事は覚えてないの。お母さんに聞いても微  
笑むだけ」

「そうか、私が聞く事でもないね。で、プレミアムパンミックスは  
どれ？」

「あーこれだよ」

八子を取り出した大きめのダンボール箱。中には小分けになったビ  
ニール袋、その中には粉が詰まっていた。一つの袋を開けて、粉を  
嗅いだり触ったりしてみる。

「うーん、小麦粉とか強力粉とか、そんなのと違う感じがするなあ」

「やっぱりパンミックスじゃないの？ユウにはこれが何かわかる？」

「うーん、違うのは分るけど“何か”は分らないなあ、ちょっと舐  
めたらわかるかも」

「あ、でもねユウ、この間のように食べ物じゃないかも」

「そういえば、八子を買う物は私の想像をいつも超えてるわね。こ  
の間はポップコーンにかける香料を注文したら、アメリカの強力洗  
剤が届いて……」

ケラケラと思い出し笑いを始めた八子。

「あ、そういえば、そんな事あったね」

「そんな事ばかりでしょう？八子の騒動ってさ」

「ごめんごめん、あの時はどうしたんだっけ？」

「私が舐めたよ。数日舌が麻痺した……舐めるのは危険かも」

「どうしよう一億二千万円なんて払えないよ、返品できないかなあ？」

「返品かあ……ここまで開けちゃうと、どうなんだろう？」

泣きそうになった八チの大きな頭を撫でた時に、よい考えが浮かぶ。

「泣かないでよ、なんとかするから……まてよ？そうかアイツを呼ぼう！」

「え？誰の事を呼ぶの？」

「こういう事にうつつつけの女がいるじゃない……フフ」

「これは何の嫌がらせなのかしら ユウ？」

紺のチエックのスカートには裾に白い横のラインが入って、上部は白いシャツにモスグリーンのネクタイを胸元で結ぶ。陶器のようなきめ細かい肌、均整がとれた顔立ち。スタイルはモデルなみ、成績抜群のパーフェクトな優等生、道明寺明莉は不機嫌だった。

「おお、ごくろうさん！よくきたね、明莉」

「よくきたね、じゃないわよ。また八チのお母さんに、脱がされそうになったわ！」

自分の腕時計を見たユウは首を振った。

「おばさんの突破の時間はジャスト三十分か。慣れたらもっと早くなるよ、私なんか十分で突破しているから」

「あなたの、おばさんの突破時間なんか聞いてないの。私がなんでここに呼び出されたか、それを聞いているの！」

感情が露わになる明莉。その均整がとれた顔立ちと体つきから、よく高校生に、果ては大学生と間違われる。瞳は高い理性を見せ、普段の冷めた表情はCool Eyeと呼ばれているが、ユウの前では違うようだ。

「携帯で八チの一大事だって、明莉には言ったでしょ？」

「あのね、ユウはすぐ“八チの一大事”その台詞を使うけどね、ど

のくらい一大事が、全然わからないの。携帯のあなたの説明を聞いても、緊急性も意味もサツパリ分らない」

「だから来たら分るって、いつも言ってるじゃない？かいつまんだ説明は苦手なのよ」

「あ・の・ね！要件も分らずに、いちいちダツシユで呼び出される私の身にもなつてよ！」

「だってさあ、マジにやばい事とか、前に何度かあったでしょう？」

「たしかにね。あなた達二人で、無邪気にももの凄い事を起こす直前に、呼び出される事はあるわね」

「そうそう、だから何か嫌な予感がする時は、明莉を呼ぶ事にしたの」

「勘の鋭いユウの判断だから、たぶん間違っていないけど……でもなんかムカつく」

明莉が正座した脚を崩すと、短めの紺のスカートから伸びた脚は目を引く程に白かった。

「……で今度は何なの？」

ユウが明莉の前にダンボールの箱を出す。

「よいしょっと！これなんだけど、この粉はなんだかわかる？ハチがママゾンで買ったって」

「ママゾン？この箱には、社名なんかどこにもプリントされてないじゃない」

箱を開けた明莉が、中に入っているビニールの包みを手に取る。

「で、わかる？一億二千万円するらしくて、返品したいのだけど」

ビニールを開けて、中の粉に触れた明莉が、いきなり結論を述べた。「麻薬ね、コレ」

サラリと言った明莉の言葉に、驚いて少し後ろに下がったユウ。

「え？麻薬ってコカインと覚醒剤とか？警察二十四時とかに出てくるアレ？」

「中学生らしくない番組を見ているわね。そうよ、持っているだけ罪になるアレ」

「うわあ、どうしよう、明莉？」

「慌てないでユウ。私はこれが“麻薬だと思った”と言っただけよ」  
「うん？どういう意味？」

「コレが麻薬だったら、持っているだけで犯罪者なの、刑務所行きなの」

「それは困るよ、お母さんが心配する」

今一緊迫感が無い、八チの困った様子を見て、心配いらないと明莉が答える。

「八チはパンミックスとして、コレを購入した。でも欠品だったので返品したい。それでいいでしょう？」

「明莉が返品の交渉してくれるの？やった！」

肩の荷が降りて、喜び出すユウと八チ。

「まやややかさん、よかったよ」

「まやややかさん？」

ジロリと、八チを見たユウのツリ目気味の大きな瞳。

「あ、ごめん、かみみみた」

……ここで笑っていいのか？茉莉花優紀……

悩むユウに明莉が訝しげに質問する。

「二人で何の真似かしら？」

「いえ、かみみみた、だけです、じょうみゆうじさん」

二人の脳天気ぶりに脱力した道明寺明莉。

「道明寺ですよ 私の名字。覚えてますか？まにやにかさん」

「茉莉花です……すみません。もうやめます。普通に喜ぶ事にします」

タイミングを合わせてユウと八チと一緒に喜びの声を上げた。

「これでパンミックス、粉の件は解決だ！やった〜！」

脱線しそうだった本筋を引き戻した、明莉がジロリと二人を見た。

「やったーじゃないわよ。もう、どうやってたら、パンミックスがコレになるのよ！」

「なんか安心したらお腹がすいてきた」

背伸びをしたユウの言葉とほぼ同時に、八チのお母さんが顔を出した。

「夕飯の用意が出来ましたよ！」

「はいー丁度お腹が空きました」

「はあああ、もうこの二人は」

お気楽ユウと八チに首を振って脱力した、明莉はスカートをめくり、崩した脚の白い太股の奥に手を入れて、内ポケットから小型の携帯を取り出した。

「おお、すげー色っぽいなあ……ちょっとムラときた」

「バカ言ってる場合じゃないわユウ　ちょっと電話するからね」

「コレの返品の件ね」

「うん。だからちよっと、八チを連れて、先におばさんの所へ行って。八チやあなた、ましてやおばさんは、聞かない方がいい話だから」

「この魚の煮付け　とても美味しいですね」

明莉の褒め言葉が出た、今日の八チの家の夕飯のおかずは

メインはカレイを甘辛く煮つけた魚の煮付け。昆布とお豆腐のお味噌汁。ホクホクのコロツケ。タコの唐揚げ。ユウが好きな明太子。

明莉が好きな浅草海苔、それと、忘れちゃいけない、ほっかほっかの白い炊きたてのご飯！

「ごめんねーユウちゃん、明莉ちゃん、間に合わせになっちゃったわね」

「いえ、十分過ぎますよ。このカレイのお煮付けは、生姜が少し入っていて、それが味を引き締めていますね。あとコロツケはジャガイモを吹かして、直ぐにすりつぶしてから、カラッと揚げています。ホクホクの食感がすごくいいです」

無言の笑顔でパクパクとご飯を食べている、ユウと八チを横目で見ながら、明莉が夕飯の総論を述べていた。

「あら、わかるのね。さすがね、明莉ちゃんは頭良いから、なんで

も分かつちゃうのねえ」

「いえ、そんなたいした事では……」

恥ずかしそうに、下を向いた明莉。

「ねえ、明莉はおばさんの事が苦手なの？」

いきなりユウが聞いたので、明莉は一瞬、表情が固まった。

「あのねユウ、勘がいいのはいいけど、なんでもかんでも、バラシテいいわけではないわよ」

「あら、明莉ちゃんは、おばさんの事が苦手なの？」

「いえ、そうではなく、私はこういうの、家族で一緒に何かするのは経験が無い事で、どうしていいか分らないだけです」

「ふ〜ん、正直に話せるじゃないの、感心感心」

キラリ、ユウを睨んだCool Eye。

「だからユウ、人の心をばらすのはやめなさいよ！」

「うん？私は思った事をただ、ストレートに言ってるだけど？」

「ユウの場合は、あなたの能力も合わさって異常に勘がいいの。だから、言われた方はビックリするわ、心の中を読まれたかと思っ  
ね」

「うん？明莉、私は能力は使ってないわよ？」

「それは分っているけど。とにかく、思った事をすぐに、みんなの前で口にするのは、やめなさいよね！」

「みんなって、ここにはいつもの三人しかいないけど？」

淡い青い髪をかき分け、額に手を置いた明莉は、辛抱強く、天然主義のユウとの会話を続けた。

「そうかもしれないけど……それと、もしかしてユウは、今回のパ  
ンミックスも、私にしか処理出来ない、そう思ったでしょう？」

「うんうん、思った。おばさんこれ美味しいなあ、博多のふくふくの明太子は、自然な辛さで美味しいです」

「ユウちゃんが好きだからね、おばさんデパートの九州物産展で買  
つておいたのよ。ハチと私は辛いのが苦手だから、一杯食べてね」

「はいーそれじゃあ、ご飯と明太子をオカワリ！」

普段と違い、妙にハイなユウに疑問を持つ。

「ユウ、そのはしゃぎ方は、もしかして、私が困っているのを見て喜んでいるの？」

「ブツハ、いきなり何を！」

思わず味噌汁を嘔き出したユウが続ける。

「そんな事あるわけないわ。おばさんのご飯が美味しいだけ」

ジツと見つめる明莉の視線はユウの動揺を見逃しはしない。

「あれ？やっぱり分かった？バレテル？」

ため息をついて視線を緩めた明莉が呟く。

「ユウが、継続的に興奮状態だからね」

「凄い！明莉も勘が鋭い！」

「私のはあなたみたいなの、勘とか天然的なものではなく予測よ」

「えーと、どう違うの？」

八チの母親から、ご飯と明太子のオカワリを受け取ったユウが聞いた。

「データの蓄積と分析から導かれる予想結果と確率。ユウとは長い付き合いだし、データは豊富だしね」

「そっか、私達が初めて会ったのは十才だっけ？もう五年も経つか」

明莉に会心の笑みを浮かべてから、明太子でオカワリを食べるユウ、それを見て微笑む八チとおばさん。

明莉は三人を見ながら呟いた。

「今どき存在しないはずの家族の団らんか たまにはいいものね。ただし自分の家族とは勘弁だけど」

次の日、明莉はいつものように、始業十五分前には住宅地のいつもの場所に着いた。

そしていつものように、後席から運転手に指示を与える。

「今日はここで待ってて。あと粉の返品の件で連絡が入るかもしれないわ」

「はい、ここで待機しています。連絡を受け次第、携帯にメールを送ります」

「お願いね。三時半くらいには学校が終わる予定よ。あと、これを充電しておいて」

A4の半分くらいに折りたんだ、明莉、特注のタブレットPCを運転手に渡す。

生徒や教師に会わないように、住宅地を五分程歩き学校の正門へ向かう。正門をくぐり教室へと向かう途中、出会った人とは挨拶を交わし、全て毎日寸分も変わらない行動をとる。

三時間目の休み時間に、携帯を確認する明莉の顔が少し険しくなった。

そのまま職員室に向かった明莉は、職員室で無駄話をしているクラスの前で立った。

「先生、すみません、父からの連絡で、すぐに帰ってこいと言われました」

担任は明莉の機嫌をとるように言った。

「それは大変だな。すぐに帰りなさい。タクシーを呼ぼうか？」

明莉は全国でもトップクラスの成績、部活の陸上でも都の記録を幾つか持っていた。

文武両道を掲げる、私立中学の特待生の中でも、とびきり優秀な存在。

そして、明莉の父親はこの学校に多額の寄付をしている。

担任どころか、校長までもが明莉には特別扱いをしていた。

「はい先生、このまま帰らせて頂きます。タクシーは必要ありませんから」

クルリと方向を変えて職員室から教室に向かう。

鞆に教科書をしまい込み、教室を出て校門から外に向かった。

校内から出たところで、携帯を取り出し運転手に電話をかける。

「今から直ぐに向かうわ、準備しておいて。相手の事は？そう、まずは携帯に情報を送って」

早足で歩きながら携帯でメールを読む。

「面倒な事になったわね……」

呟いた明莉が、想像しなかったものを見つけて、驚きの表情になった。

明莉が想像しなかったもの、八チが手を上げていた。

「よかったよ。明莉を見つけた」

「どうしたの？八チはなんでここにいるの？」

近づきながら、明莉が八チに質問すると、ユウが原因だと八チが答える。

「ユウが今日は危ないから帰りなさいって。それで学校から早退させられたの。それで家に帰る途中に思い出して、ここに来たの」

「さすがはユウ、危険を察したのね。八チは何を思い出したの？」

「明莉が何かあったら、必ず相談しなさいって。それを思い出したの。明莉はどうしたの？学校は？」

「そうよね、確かにそう言ったわ。私は大事な用事が出来てね、これからそこへ行く所なの」

「ふーん、大事な用事があるんだ。じゃあ、私と一緒に帰るのは無理ね？」

「ううん、大丈夫よ八チ。大事な用事は自分から、歩いてここに来たからね」

八チは不思議そうな顔で明莉を見た。

「さあ、おいで。八チの家に行きましょう。パンミックスの返品は私が預かった事。最後まで面倒を見る」

「ここでいいわ。ここで待ってて頂戴」

八チの家の近くに車を止めさせた明莉。

「八チ、少しだけ車の中で待っていてね。私が帰るまで絶対に外に出たらダメよ」

「うん、分かったよ」

明莉は八チを車の中に残して歩き始めた。

八チの家が見える場所に、駐まっている黒塗りの車。

その車に近づき、濃い色のフィルムが貼られている窓をトントンと叩く。

「うん？なんだ、おまえは？」

スツと、窓が開いた。

車の中には、明らかに表の職業でない格好をした男が、四人乗っていた。

「ちょっと、話があるんだけど。白い粉の返品の件でね」

車の後ろのドアが開き、一人の男が車から降りた。

「乗れ」

明莉を後席の中央に押し込んでから男は、再び車に乗り込んだ。

後席で明莉は二人の男に挟まれる形になる。

「それで返品って、なんの話だ？」

助手席の男が明莉に聞いた。

「一億二千万円の粉の事よ。返品するから、この件からは手を引いて欲しいの」

「フフ、なんでおれたちが、おまえの言うことを聞くんだ？」

「あなたの親会社に昨日電話したわ。返品は受け付けたと聞いていたけど？どうしてこんな事をしているの？」

「うちはアフターがしっかりしているんだ。お客様の返品理由がなんなのか、ちゃんと聞かないとな。丁寧にしつくりと時間をかけてな」

「そうなの　あなたの会社は、最近、業績が伸びているわね。そしてかなりの無茶もしてる。さっき親会社から謝罪があったわ。押さえきれなかったってね」

ニヤリと笑った助手席の男。

「うちの会社の事を良く知っているな。あんた中学生か？大人びて見えるが。その可愛い顔で、裏の世界に顔が効くらしい。なるほど、マルチブレイン、最近裏の世界で聞く若い女の噂。まだ学生なのに、豊富な情報を複数の組織に提供していて、相手は国レベルまで及ぶ。

まあ、おれはおまえが誰でも構わない。うちの会社が伸びているのは、何でもやるからだ。人の嫌がる事でもな。そして邪魔は誰にも許さない」

「ふーん、口調が本職らしくなってきたじゃない？」

「そうか気をつけよう。ただ今はおまえしかいないから、少しくらい本職が出て大丈夫だろう？クク」

後席の二人が明莉の身体を押さえつける。

「何をするの！？」

「おまえも一緒に来てもらおう」

助手席の男が目線で合図を送った。

横の男が明莉の口を白い布で塞いだ。

薬品の香りが車内にたちこめる。

「おい！窓を開ける！おれたちも気絶してしまう！」

急いでドアのスイッチを押して、車の窓を開けた運転席の男。

口に薬品を含んだ布を押し当てられ、抵抗する明莉、だが、だんだん意識が遠くなる。

「……あなたたち 後悔するわよ……」

「あー？おまえを眠らせたなら、なぜ後悔するんだ？」

「私を眠らせたなら……あの子が……起きる……わ」

後席の二人が、完全に意識を無くした明莉の手を縛り、口にガムテープを貼り付ける。

「終わりました」

頷く助手席の男。

「あとは、あの家の娘が帰ったら、捕まえて仕事は終了だな」

「残念ですが、それはありえませんが」

その声に振り向くと、今、意識を無くした筈の明莉が男を見ていた。その瞳は高い理性を見せる、黒い冷静すぎる瞳ではなく、銀色へと変わっていた。

「おまえ、どうやって縄をほどいた？いやそれより、なぜ目が覚めた？」

「姉の明莉は眠っております。私は妹の咲夜です」

「なんだと？妹？おい、おまえらなにをやっている！その娘を押さえろ！」

返事はなく痛みを堪える声。後ろの席の二人は脂汗をかき、自分の脚を懸命に押さえていた。

「無理ですね。私が二人の脚を押さえております」

グツと指先に力を込める咲夜。男達の脚の一部がむしり取られた。車の後席と、前席の背面に血が飛び散りべつとりと張り付く。

二人の男の絶叫が車の中に響く。

「この車は窓にはフィルム、車内には防音処理。この方々が痛がる姿や叫び声が外に漏れなくて便利ですね。本来は姉にしたみたいに、拉致などに効果をあげる物でしょうけど」

血が噴き出す二人の脚は、十センチの肉がえぐられた跡。

苦しむ男達の歪んだ表情を、無関心そうに見ていた、咲夜。

「私って、人の悲鳴は好きな方なのですが、狭い室内、少しは我慢して頂かないと、これではお話も出来ません。仕方ありませんね、おとなしくして頂きましょうか」

後席の二人の首を同時に、右手と左手で掴みあげ軽く力を込める。

首の骨が砕けるような恐ろしい力で、首を締め付けられ暴れる男達、咲夜の手を離そうともがき苦しむが、数秒で酸素が脳に回らなくなり、気絶しておとなしくなった。

「なんなんだ？おまえは！？」

助手席の男が状況を理解出来ないまま叫ぶ。

「中学生ですよ。明莉の妹で咲夜と申します。あれ？これさつきも言いましたね。私と姉ってけっこう性格が違うんですよ、双子なんですけどね。でも無駄が嫌いなのは一緒なんです。だからこれ最後にしますね。今回の件は無かった事だと思ってください。あの家の方々に手を出さないでください。いいですか？お願いします」

「中学生に脅されて、引つ込むわけにはいかない、おれにもメンツがある」

咲夜の雰囲気、恐れを抱きながら助手席の男が首を振る。

助手席の男を見た、爬虫類のような無表情な銀眼。

「そうですね……それは残念ですね」

「あたりまえだ！おれたちは……ウグ」

話の途中だった助手席の男の首を、左手で掴んだ。

徐々に力を込める咲夜の握力は、みるみる男の顔を紫色に変える。

もがく男の横の運転席の男が、ポケットからナイフを取り出した。

「おいやめろ！その手を離せ！」

咲夜は、ナイフの脅しにも無感動だった。

運転性の男が握るナイフを感心無さそうに見る。

「それって脅しですか？この手を離さないと、どうなりますか？あと五秒でこの人の気管が潰れて、面白い声になりますよ。あなたは聞いてみたくありませんか……キャハ」

壊れた人形のように笑い続ける咲夜。

恐怖に支配された男は、ナイフを咲夜の左腕に刺した。

ナイフが刺さり、血が滴る自分の腕を、咲夜は無関心に見る。

「私は痛みを感じないので。残念ですね。でもこの身体は姉と共用しています。痛みを感じない私はよく身体に傷をつけて、姉に叱られます。なにせ痛みを感じないのでから、どこでどう怪我をしたかも覚えていません。でも今回は、とつても分りやすい。姉に説明をちゃんと出来ます。よかった」

ザシユ、運転席のシートを破壊して、咲夜の右腕が突き抜け、運転席の男の右手を掴んだ。

「姉にはあなたにナイフで刺されたと言います、それから報復として、右腕を砕きましたと言いましよう、姉も少しは納得してくれそうですね……キャハ、キャハ」

無表情だった咲夜の銀色の瞳が強く輝き、口元が大きくつり上がった。

大きな机の奥に座った、赤い皮のジャケットの男が不可解な顔をし

た。

「中学生の女の子にやられただど？」

「気管が潰され、しゃがれた声で報告する男。」

「はい、すみません。例の粉の回収の件です。油断していました。」

「今度は……」

机の上に両足を乗せて、言い訳する男を睨んだ、真つ赤な皮のジャケットと同じく皮の黒のパンツの男。ジャケットの下には紺と白の縦のストライプのシャツ、胸元に漆黒のペンダントが見える。

「それで、その中学生は何人だったんだ？随分派手にやられたみたいだが？」

「それが……一人なんです。しかも標的とは違う娘で……いきなり話があると車に乗り込んで来て……見かけは普通なんです、異常な娘で……」

言い訳を続ける男に、ますます不可解な顔になった九条武巽くじょうぶそん

年齢は二十八才。派手な金髪を後ろ髪へ長く伸ばしワイルドに流す。幅の薄い濃い色のサングラスをかける、面長で切れ長のつり上がった目は非情さと大きな野望を見せる。長身でやせ形（百八十八センチ）針金のような肉体は、肉食獣のよう<sup>ち</sup>で隠された力の解放を待っている。

「おまえが何を言っているか、よく分からないのは俺の頭が悪いのか？」

九条が胸元の漆黒のペンダントに触れながら、もう一度説明を求めた。

「いえ！そんな事は……すみません、取り乱しました」

「たった一人の中学生、しかも女に四人の男がブチのめされただど？おいおい、もう少し現実味のある言い訳を考えろよな」

金色の髪のコメカミに指をトントンと数回あてて、頭をちゃんと仕えとモーシヨンする。

「はい……どちらにしても、おれの責任です。今、その娘の居場所と名前を探っています」

濃いサングラスを外して机に置き、腕を組んだ九條。

「俺達の商売は、舐められたら、お終いなのは分かっているよな？」  
面長で切れ長のつり上がった目が、野獣の輝きを発する。大型肉食獣と一緒に檻入れられた感覚に陥った男は狼狽し、恐怖の表情を浮かべた。

「は、はい、よく分かってます、命にかけてその中学生を捕まえ、ターゲットの粉を返品してきた娘と一緒に連れてきます！」

「簡単に掛けられる命だな。まあいい、分かっているなら、グズグズするな。さつさと行け！」

震え上がる男がしゃがれた声で返事をし、部屋の扉へ向かう。

九條は、机の横に積んである本から、一冊取り出し読み始めた。  
本のタイトルは“汚れつちまつた悲しみに”

「大変そうね、組織をまとめるのも」

九條の後ろから声が聞こえた。

「まあ、俺は管理職だからな」

「フフ、毎日いろんな問題が起こるわね」

「ああ、中学生にぶちのめされる……ありえん」

「中学生が、あなたの組織の人間を倒すなんて普通あるかしら？」

「何が言いたい？」

「それってもしかして、あの子じゃないの？」

読んでいた“汚れつちまつた悲しみに”から顔を上げた九條。

「おまえはどう思う？」

「クシテイかもね」

「おまえはそう思うか。ならば、俺から挨拶に行ってくるかな。うちの連中では荷が重いだらう」

「あなた、なんだか嬉しそうね」

「そうかい？」

机の上の電話機を取り上げ内線をかける。

「あいつをもう一度ここへ呼べ。ああ、今すぐにだ」

再び呼び出された、咲夜に喉を潰された男が部屋に入り、九條に頭

を下げた。

「中学生はそのままがいい」

「え？うちの組織が、麻薬を扱っている事を知ってます」

「中学生の女の子だろう？」

「用心した方がいいかと。中学生の一人は噂の娘だと思われます」

「噂さの娘？マルチブレインか？なるほどな」

嬉しそうに口元を緩ました九條、だがその瞳は非情な光を強くする。

「いいか！おまえたちは、俺が言うまでは絶対に手を出すな！」

「しかし、おれのメンツもありますし……四人もやられています」

口元は緩ましたままだが、その身体は冷酷な肉食獣の殺気を帯びる。

「メンツだと？中学生にやられ、おれの命令に従わない……随分そ

れは重そうなものだな。おまえの命より重いか、確かめようか？今

ここでな！」

「はい……分りました、九條さんから指示があるまで、中学生には手を出しません」

喉を押さえた男が恐れを顔に出した。九條から顎で、部屋の出口をさされ、退出を即された男は、頭を深く下げてから部屋から出て行った。

「マルチブレイン。楽しみが増えたわね」

大きく背伸びをした九條は頷いた。

「ああ、楽しみな事だ」

## 幼き剣士、最強を目指す少女？

ジワジワと距離を縮めてくる、その手に握られた刀には必殺の気合  
いがこもる。

相手はこの世界で最強の剣士、一瞬のミスでこちらの命はない。

相手の剣士は長身、それに対するのは非常に小柄で華奢な姿。

とても互角に戦えるとは思えなかった。

しかし勝負はここまで互角だった。

大きくゆつたりと、上段で構える長身の剣士。

対する小柄な剣士は剣を斜めに下げ、中段よりやや下段気味で構え  
をとる。

最後の刻、勝負の決着が迫っていた。

小柄な剣士が握る刀に、必殺の気が満ち始める。

最後の勝負は一瞬で決まる、二撃目は無い。二人はそう思っていた。  
時が圧縮されていく感覚。全身の力を高めながらも、緊張は解いて  
いく。

満身の力を込めたら反応が遅くなる、無駄に体力を消耗する。

最後の一撃の為に、全ての力を抜いていく。

瞳を閉じ、周りの景色を視界から消し、意識から最後の一撃に無駄  
なものは完全に消しさる。

視界が消えてから、耳に入る情報は高まった。

風が草木を揺らす音、周りにいる者達の呼吸。

お互いに微動だにしないが、二人の戦いは進んでいく。

決着が徐々に近づいている、それを感じ自分の心臓が脈打つ音が高  
鳴る。

「落ち着け……心を殺すんだ」

小柄な剣士は意識的に、静かく大きく呼吸をり返す。

徐々に心臓の鼓動が消えていく。そして聞こえ始める相手の鼓動。

相手の心の動きが鼓動を通して感じられてきた。

来る！その瞬間、長身の剣士が響き渡る気合いを発した。

同時に必殺の一撃が、小柄な剣士の腕を切り落としに来る。

相手の心を感じ、打ち落とされる相手の剣より、僅かに速く反応を開始する。

縦に振り下ろされた、相手の剣を追い抜く、驚異的な速度を見せた小柄な剣士の身体。

ゼロから最大速度へ。急激に力が加えられた剣は鞭のようにしなる。相手の胴を狙った稲妻のような横一の剣筋……斬った！だが反撃の剣は相手に僅かに届かなかった。長身の剣士はバックステップで回避し、再び打ち出す上段からの強烈な一撃。

バツシイ、腕を打たれた衝撃で、その場に崩れ落ちる小柄な剣士。もはや立ち上がる力は残されていなかった。

相手は静かに近づいてくる。

……駄目だもう指一本動かせない……

「ハアハアハア」

呼吸も乱れた小柄な剣士に、近づく長身の剣士が問う。

「どうした？もう終わりか？」

小柄な剣士の目の前に剣先が突きつけられた。

「ハアハア……もう、戦えない……」

長身の剣士は、小柄な剣士の敗北の言葉にも、視線と剣先はそらさない。

だが次に、小柄な剣士が言った言葉で戦意を解いた。

「……腹減ったよ……先生」

長身の剣士、剣道部の監督である神代先生しんたいが、倒れた小柄な剣士、鬼灯マリの手を引いて立たせる。

「まったくいざとなると、いつも“腹減った”だな、マリ」

笑顔の神代先生は、小学校の時から剣道の師匠。

鬼灯マリ（ほおずき・まり）十五才。

墨を梳いたような黒鉛の髪は腰のあたりまで伸び、瞳にかかりそうな長い前髪は、練習中は後ろにまとめていた。人形のように硬質な

表情と透明感がある白い肌。幼い顔立ちだが、大きく開かれた瞳は不思議な蒼色に輝き、強い意志を称えている。本人が気にするくらい幼女体型で、よく小学生の低学年に間違われる（身長百三十九センチ）出るところもまだ全然出ていない。都内で文武両道を目指す私立中学の特待生。

なぜマリが剣道をやっているかと言うと、どうやら神代先生の熱心な説得と、マリの婆ちゃんの承諾で決まったらしい。マリはその時はまだ三歳、そんな密約はまったく覚えていなかった。その後もなぜ、毎日こんなに苦しい練習を続けているのか、マリにも良く分らない。

強烈な神代先生の小手打ちと、空腹で身体に力が入らないマリは、道場の床に大の字になった。

「くそ〜！また負けた。マリは中三の女子なのに、なんで毎日、真剣勝負なんてしてるのかな」

「それは、マリが剣道を好きだからでしょう？それか神代先生の事も……かな？」

マリの頭の上に立った。淡い青い色の髪、陶器のようなきめ細かい肌、黒い瞳に高い理性を宿し、冷めた表情からCool Eyeと呼ばれる、道明寺明莉。

紺のチェックのスカート、裾には白い横のライン。白いシャツにモスグリーンのネクタイ。

マリの視線からは、白い脚が程よい曲線を描き、スカートの中まで続いて、白いレースの大人っぽい下着へと連結していた。

「大人は絶賛、クラスでは賞賛の優等生のお出ましか。明莉、スカートが短すぎるぞ！それとわざと襟元を開けて胸を強調するのはよせ！」

マリが明莉に注意するが、普段は無鉄砲なマリの行動を、明莉が注意する方が圧倒的多かった。そして一応注意はするが、明莉が実際にマリの無鉄砲な行動を止めた事は一度もない。

逆にマリの行動を喜んでいる節がある。実家が大きなお寺で、父親

は政治家や有名人に、示唆する程の有名な霊媒師でもあった。優れた頭脳は全国模試でも常にトップテン。

しかし明莉が勉強している姿は、いつも行動を共にするマリも見つた事がない。

その言動はいつも明晰明快であり、まさに明莉の名前のとおりであった。

マリは大きく息を吸い、乱れた呼吸を整えている。

剣道の練習はまだ続いていたが、さっきまで鬼の形相だった神代先生は、小学生とじゃれ合って、楽しそうに打ち合いをしている。

「ふうう　　神代先生笑っているよ。いつも私には鬼の顔で“真剣勝負”なのに」

「今日も盛大にやられたわね…でもよく分るわね。倒れていて神代先生の事なんか…：：：だいたい神代先生の表情なんて、防具で見えないでしょう？」

運動選手がギリギリまで精神を集中すると、ゾーンという針の落ちる音や、時間が凝縮された感覚になる事がある。ほぼ毎日、神代先生にゾーンに追い込まれているマリには、離れていても先生の感情が伝わってくるようだ。

「すごいわね、感情のリンクが起こっているみたい。相手を倒すために、相手の動きを深く読み、相手を倒す為に、お互いの感情を理解するなんて、ちょっと素敵ね」

マリがこの道場に通う事になって十二年、五年前からは明莉もマリの練習につきあっていた。

それでも明莉のテストの成績が、落ちる事などまったくなかった。生まれもった特殊な才能と境遇が、明莉に完璧な理性を持たせている。

「来年は高校受験だろう？マリに付き合っている暇あるのか？」

自分の事を「マリ」と呼び、男の子の言葉を使う話しかたは、幼い表情と幼女体型なマリとは対照的だが、それが可愛さを助長する。

「一応覚えていると思うけど、あなたもね、来年は高校受験よ」

二人は文武両道を方針とする、同じ私立中学の特待生だった。

「そうだっけ？そうか、マリも三年になったのか、子供が大きくなるのは早いものだ」

「まるでお爺ちゃんが、孫の歳を忘れていたみたいない方ね」

「そういうの興味ないからな。明莉が覚えてくれればいい」

「覚えてはいるけど、たまには自分でも思いだしてね」

「ああ、そうしよう。ところでさっきから、神代先生を見ているが、もしかして、おまえこそ先生がお目当てか？」

マリの言葉で神代先生を明莉が見た。銀色に見える短い白髪を立たせ、ラフに後ろへと流している髪型。細面ながらエラがはり、強い視線を放つ瞳が、戦国武将のような無骨な雰囲気を見せる。長身で（百八十八センチ）細身でなで肩の体型は、武道家に見えない程着やせして見えるが、その身には瞬発力に長けた強力な筋肉を内包している。

神代先生から視線を外した明莉は、マリの方を見て笑った。

「そうかもね。それにしても、神代先生って剣道の世界チャンピオンでしょう？」

「うん、十二年前に十六才で、全て一本勝ちで優勝したそうだ」

「そんな凄い人を、本気で打ち負かそうとする、中三の女子もかなりいいわ。私は好きよ」

美しく艶やかな肢体と理知的な瞳にマリはドツキりする。

「おまえは、なんて事をサラリと言っんだ！」

「あら本当の事よ。それにマリも神代先生が好きなんでしょう？こんなに真面目に剣道を続けるなんて」

「嫌いじゃないが、恋愛感情はないな。負けばっなしが嫌なだけだ。あと一つ、先生が唯一負けた相手が気に入らない」

「またその話？先生に勝った相手に、マリは勝負を挑みたいんだっけ？」

「そうだ。本当の目的はそれなのに、相手は“まずは先生に勝ったらね”と勝負を逃がっている」

「世界一の剣士の神代先生を、完膚無きほど叩きのめしたのは女剣士だった」

「そうだ、その女剣士は私の婆ちゃんだ」

「あなたのお婆ちゃん幾つだっけ？十二年前っていつても、五十は越えているわよね。五十過ぎのお婆ちゃんが、現役世界チャンピオンを打ち負かさすなんて……いまだに信じられないわ。でも、神代先生もあなたのお婆ちゃんには、今でも勝てる気がしないって言うてるし」

息が整ったマリは身を起こし面を外した。首を左右に振ると長い黒鉛の髪が肩まで落ちる。

「そうだ、マリも信じられない。だから神代先生に勝ち、あの婆と決着をつけてやる」

その時、小学生の集団の中で立ち回っていた、神代先生が少し驚いた動作を取った。

それから笑みを浮かべながら、倒れている一人の女の子の手をとり引き起こす。

神代先生は、女の子のお面を外しながら話しかける。

「なんで君がここにいるのかな？大丈夫かい？」

汗が玉のように滴になり、明るい緑の髪の上でころがり流れ落ちた息を乱し懸命に呼吸するおでこ全開の前髪。丸い顔の大きな瞳は少し下がり気味で幼さを感じさせる。身長は小学生の高学年くらい。

「あっ！八チだ！」

マリが急に大きな声を出したので、道場の全員がマリの方を見た……はずだったが、神代先生と明莉以外は、マリの姿を捉える事が出来なかった。

一瞬、道場から消え、八チの側に立ったマリ。

突然目の前に現れたマリの姿に小学生が呆気にとられている。

「あれ？マリ姉ちゃん、いつの間ここに来たの？」

明莉は誰にも聞こえないように小さく呟いた。

「あの速さは人が造りあげたものだとしても、マリは奇跡の一刀。」

二度と造る事は出来ない刀」

マリは神代先生から八チを受け取り、その身体を抱えた。

八チの身体を床に降ろして、目まで隠れた髪の毛を、中央で左右に手で分けてから流す。

視界が開けた八チが目の前のマリが見えた。

「ふうふう……はあはあ……あ、マリ」

苦しそうな息遣いの八チ。

「どうした八チ？なんで小学生にボコボコにされているんだ！？」

「ふうふう……はあ……二人に会いに来たの」

徐々に呼吸が落ち着き、会話が出来るようになった。

「そうだったのか。でもなんで八チが剣道をやっているんだ？」

「ふうふう……さあ？私にもわかんない……はあはあ……あのね、いきなりあつちで“小学生は早く着替えて準備しなさい”って言われたの……ふう、そしたらこの子達が私に、剣道着を着せてね。あとは、練習が始まってこんな感じになったの」

まだ息が完全には落ち着かない八チを、マリは道場の床に座らせたまま小学生達を見た。

「おまえら……このおねーちゃんは中学生だぞ！」

小学生はお互いに、目を合わせてから首を振った。

「うそだ！俺達と全然変らない大きさだぞ！胸もちいちゃいし。あ、それはマリねーちゃんも同じか」

周りに小学生がゲラゲラと全員笑った後、すぐに逃げ出す事になる。マリが戦闘態勢に入ったからである。

「おまえら、一言、余計だったな。死んだぞ！」

「きゃあ妖怪“乳無し子”に襲われると、背がちっちゃくなるぞー」

「それも一言多い！絶対殺す！」

物騒な事を言いながら、マリが小学生を追い回し始めた。喜びながら逃げる小学生。

その光景見た神代先生が、複雑そうな表情を浮かべた時、横に明莉が立った。

「あれをどう思う?」

神代先生の問いかけに、明莉が先生に視線を移す。

「あれとは?何ですか?」

「あの光景をどう思うか聞いている」

「いい事だと思いますよ。マリ自身の為にはね」

「他に何か問題が在りそうな言い方だな」

「小学生と戯れるなんて、ただの戦闘人形には出来ない事ですね。

世界に最強の軍隊を造りだす計画も、最終段階に進むんじゃないですか?」

「その言い方は、明莉には気がかりがあるのか?」

「いえ、ただマリは苦しむでしょうね。戦う為だけに造られ、心を一度封印された。そして自力で感情の封印を解いた」

「ああ、そうだ。強さに心はいらない、それが初めの判断だった」

「先生」

「何だ?」

「マリが戦う相手は、組織の偉い人が決めるんでしょう?」

「作戦によってはそうなるかもしれないな」

「その作戦で、私や、あのおちびちゃん達も……殺すのね」

「そんな事はあり得ない……とりたいものだ」

「否定はしないのですね。先生は正直です、大人らしくないです。

私の褒め言葉ですが、世間的にはどうでしょう?」

「フツ、そうかもな。世間的には俺は駄目な大人だからな」

銀色に見える白髪を手ですいて、後ろに流した神代先生。

その時やっとな明莉に気がついた、八手がこつちを見た。

「明莉く〜」

「こんにちは!八チ。今日は一人なの?ユウはどうしたの?」

「なんかね、明日は八チとお買い物に行くからね、その為の作戦がどうか言って、帰っちゃったの」

「作戦?アイツの?また騒動にならなけりゃいいんだけどね」

「うん?騒動って?」

「あなた方が毎日のように起こすイベントの事よ。それで八ちは私とマリに逢いに来てくれたの？」

「うん。急に二人に逢いたくなつたの」

「そうとても嬉しいわ。でも一人で出歩くのは感心しないわね。ユウがいない時は、私かマリがつきあうから言つてね」

「ありがとう。でも、なんで一人で行動したら駄目なの？」

「歩いているだけで、八ちは災難を引き受けるからよ」

「そうなの？意識した事はことはないなあ」

「それは慈愛と救済で、全ての者を救う事が八ちの宿命だから」

「えーっと難しくて良く分からないよ」

「意識しても八ちは災難は避けられない。だから、いつも誰かと一緒にいて欲しい」

「うーん、とりあえず、ユウ、明莉、マリの誰かと一緒にいたいからね？」

「ええ、そうよ。それと困ったことが有ったら、直ぐに相談してね」  
「分かった。でもなんで三人なの、他の人は駄目なの？」

「八ちに降りかかる災難は、普通の人には防ぎきれない。私達三人は、人とは違う異能力を持っている、普段は自分で嫌だと思つその力は、八ちを守る為には役に立つ」

「うーん、わかんないなあ。私からはみんな同じ、普通に見えるよ」

「ユウは高い霊能力を持ち、マリは究極の速さを求められ、私はもう一つの心を持っている」

「やっぱりわからないなあ……明莉は明莉だし、ユウもマリもそう。人はそれぞれ個性があるでしょう？背が高かったり、足が早かったり、絵が上手だったり……普通の事だよ」

八ちの言葉を聞いたゆかりは床に膝を落とし、八ちに肩に手を置いた。

「あなたは私達を普通と言ってしまう。でも、世の中の人達は違つよ。少しでも変つたところがあれば、その者を差別し排除する。私達は今は持っている力の一旦しか見せていない。それはこの世界

で嫌われ排除されたくないから。世間から、はみ出たくないから」  
「はみ出すと困るの？」

「そうね、いつそ出ちゃったらすっきりするかも。でもね仲間だけは失いたくない」

顔を八手に近づけて、その丸くて大きな瞳を見ると、八手も明莉を見つめる。

「仲間って……ユウ、マリ、明莉、あと、あたしも入れているのかな？役立たないけど」

「当然、八手は仲間よ」

そう言いながら静かにゆつくりと、八手の身体を引き寄せる。

「あなたはこの世界にいなきやいけないの」

両腕を八手の背中にまわし、明莉は自分の胸元に引き寄せた。

「どうしたの明莉？」

突然で少し驚いた八手。

「少し疲れたちゃった」

明莉の左腕から微かに滲む赤い点を見つけた八手。

「これどうしたの？パンミックスを返品してくれた時、手を押さえていたけど……この傷は八手のせいなんだよね？」

なんでもない、八手には関係ないと首を振ってから、幼い身体を抱きしめる。

明莉の胸の中で、八手は目をつぶって明莉に身をゆだねる。

「こうしているとね、人の温もりを感じるの。そして八手からは、ひだまりの香りがする。温かさを感じて、香りをかぐだけで、自分がこの世界で生きていけるって思うの。世界を壊してしまおうと思う心も、こうしているだけで消えてしまうの」

「うっ、ん、やっぱり明莉の言うことは難しく、良く分らない。でも私もこうしていると、落ち着くよ。明莉はいいにおいがする…

…まるでお母さんみたい」

「お母さんか……ふふ、私はそんなものになれるのかな？あれれ？」  
疲れきった八手が、明莉の腕の中で寝息を立て始めた。

「まだ、このおねえーちゃんと遊ぶ！」

小学生が八チから離れようとしなない。

「おまえら、お姉ちゃんはまだもう疲れたって」

マリが小学生から八チのサルベージ（引き揚げ）を試みるが、十数人に囲まれて動けない状態。

「いいよーもう少し一緒にいるよ」

明莉に抱かれて眠ったおかげで、八チは元気を取り戻していた。

「でもなあ……腹減った……いや、八チは置いていけない！」

マリが無理やりでも、八チを小学生から引き離はなそうとした時、明莉が携帯で話し始めた。

「……そうなの……悪いけど、迎えに来てくれるかな……そう分かったわ」

「うん？明莉、誰に電話しているんだ？」

「ユウよ、あと三十分くらいでここに来るって」

「分かった、それまで待っていてよう……キュルル」

「でもお腹は待てないみたいね。神代先生、八チの面倒をお願い出来ますか？三十分でお迎えが来ます」

「ああ、分かった。その代わりにその暴走娘を頼むぞ」

「はい分かりました。マリは任せてください。それにしても小学生にも人気なのね、八チの何でも受け入れてしまう力には、性別も年齢も区別はないみたい」

「へい！いらつしやい！お、いつものお姉ちゃんじゃないか！今日もいいネタ上がっているよ」

威勢の良いかけ声に、思わずおすすめネタを注文する。

「カレー牛丼の合いかけを大盛りで！トッピングは、とろろ・キムチ・ウナギ乗せ・つゆだくで。あと紅シヨウガの箱取り代えて！」

剣道の練習が終わり道場を後にした、明莉とマリは家に帰る途中だったが、突然立ち止まりマリが深刻そうな顔で呟いた。

「もう限界だ……このままだと、家にたどり着く前に餓え死ぬ……」  
というわけでマリの自己申告を受けて、中三の女子が小腹が空いたからといえ、まず立ち寄らないであろう、牛丼屋チェーン店に入った。

「へい、お姉ちゃん、生きのいい牛丼、あがつたよ！」

……ここは寿司屋か！？……

明莉が咳いたが、マリの食いつぷりに、店員が惚れ込んでいるようだ。

「いつもこのお姉ちゃんの爆食ぶり、見ていて気持ちよくなるね、男でもこんなには食わないもんなあ」

「食い気で男の気持ちガツチリ、キャッチするなんて……私には出来ない芸当だわ」

道明寺明莉は呆れながらも感心する。淡い青い色の髪、陶器のようなきめ細かい肌、均整がとれたスタイル。男女構わず声を掛けるが Cool Eye と呼ばれるその冷めた表情が拒否する。

「牛丼屋のまるごと全部乗せ……初めて見たわ。それで大盛りもいくのね……それにしても、その食べ方はどうにかならないものかしら」

“ウナギ・キムチ・とろろ”その上に、紅生姜の箱を空けて、器具のトングがこれ以上開きません！くらいに、ガツツリつまんだ紅生姜を盛り込み、全部をかき回しそこへ唐辛子を積もるくらい振りかける。振っても出なくなつた瓶の穴を覗くマリ。

「紅生姜の箱も、唐辛子の瓶も空っぽ。身体の代謝が良くなりそうね……そんなの食べて大丈夫……なのよね、あなたは」

明莉が呆れながら感心している。

両手を合わせたマリの大きな一言。

「いただきます〜す！」

その後は無言で、必死にフルアーマーどんぶりとマリは格闘中。

マリの懸命な姿を見た明莉はクスツと笑った。

「これだから、あなたと一緒にはやめられないの」

明莉がマリと出逢ったのは小学四年の夏。

「……明莉……」

「……うん、咲夜？どうしたの？こんな真夜中過ぎに」

「私にも仲間が出来ました。明莉にも会って欲しいのです」

「いいけど、今あなたが私の身体を使っているでしょう？」

「そうですね。これから明莉に身体を返します。私の仲間に合わせてください」

「ええ？ちよつと！いきなり渡されても状況が分からないし、咲夜の仲間も見つけれないわ」

「……大丈夫」

咲夜が眠りに入り、明莉の意識が急激に覚醒する、潮騒の音が聞こえて来る。

目を開けると、朝焼けが眩しい。海風が吹いているここは、どうやら岬の灯台らしいが。

……なんでこんな所に　　また私が眠った後に、咲夜が遊んでいたのね、あれ？……

目の前に幼い少女の姿があった。墨を梳いたような黒鉛の髪が海風に流されている。

その大きく開かれた瞳は蒼に輝き、強い意志を称えている。

「ここは何処なの？あなた誰？」

面倒くさそうに、人形のように硬質な表情の少女は口を開いた。

「鬼灯マリ」

それ以来、咲夜も含めて三人はずっと一緒だった。

「この五年で一番変わったのはマリなのかも……マリ、しっかりしなさいよ！」

明莉とマリが大きな道路をふらふらしながら歩いている。

蛇行進行で進むマリを調整しながら、帰宅の進行方向を巧みに制御する明莉。

「むむ、ダメだ。エネルギーが足りない」

“ 牛丼大盛り・とろろ・キムチ・ウナギ乗せ・つゆだく・紅シヨウガ箱・とうがらし山積み”

牛丼屋の全勢力を上げた最終兵器のフルアーマーどんぶりも、マリには腹の足しにならなかったようだ。

「さつき、あんだだけ食べたでしょう？」

「ご飯は一日六食って決めている！ああ、腹減った」

幼い顔立ちだが、大きく開かれた瞳は蒼に輝き、強い意志を称えているはずだったが、腹を空かしてマリは、感情を外に出すというか凶暴になっていた。

その姿を見た明莉は、クスリと笑った。

「何がおかしい！マリは死にそうなのに！明莉は嬉しいのか？」

「やっぱりマリは変わったなああって。前はそんなふうに、他人の前で感情出したりしなかった」

「そうかなあ」

「そうよ、初めて出逢った時の事覚えてる？あなた仏頂面で、いきなり“鬼灯マリ”って自分の名前だけ言ったわ。目が覚めたばかりの私は、正直、どうしようかと思ったわよ」

「挨拶しただけだ。そんな事より、なんか食いたい」

「八手のおかげかな。あとユウの天然か……よく言えば裏表がない正直な言葉と行動。悪く言えば、少しは考えてから話さないよユウ！たまにムカつく！私個人としてユウは、悪く言えばの方がしっくりくるわね」

意識がユウへと飛びムカつく事を思いだした明莉が機能停止、補正機能が働かなくなったマリが歩道からはみ出す。慌ててマリの襟首を引っ張り、歩道へ連れ戻す。

「こらフラフラするな。車に轢かれたらどうするの！もう少しだから我慢しなさいよ」

「轢かれた車が大型トラックで、北海道の蟹が満載されていたなら許す」

「また分けの分らない事を……」

「わけ分らなく無いー！今なら蟹の甲羅ごと丸ごと食べそうだ！」

「はいはい、蟹の甲羅に含まれる、ポリ - 1 4 - グルコサミンがとれて、ますます、無駄に健康になりそうね」

ん？……不思議そうな顔をしたマリ。

「なに、そのグルコさんって？」

「言っとくけど人の名前じゃないわよ。キトサンて言えばいいのかしら。美容品によく使われているわ」

「きとさん？やっぱり人の名前みたい……マリに美容品はいらない人形のように硬質な表情と透明感がある白い肌のマリ。

「そうね、マリの肌は綺麗だわ。よく食べてよく運動してよく眠るものね。でもね」

「なんだ？人の身体をジロジロ見て。何か言いたいことがあるのか？」

「その暴力的な食欲で、なんでそんな細くてちっちゃいのかな？」  
「私のナイスボディがなんだって？」

蒼色の大きな瞳が明莉を睨んだ。マリは幼女体型で、よく小学生の低学年に間違われる。

身長百三十九センチで針金のように細い身体と手足。

小さいとか、ちっちゃい、幼女などはマリへの禁句事項だ。

「思うに、あなたが神代先生に勝てないのは、その身体のせいかな？」

マリの怒りなど、気にもせず明莉は話を続ける。

「どういう意味？」

「逆に言えば、その身体だからこそ、いい勝負が出来ているのかしら？」

「いつも分らんが、今日は特に、明莉の言っている意味が分らない」  
上から下からマジマジと、マリの身体を見た明莉は話を続けた。

「勝負は三本勝負、いつも一本ずつとり合って、最後はさっきみたいにフラフラになり、ガス欠状態で負けちゃう。マリは全てのエネ

ルギーを、勝負の決着前に使い果たしている」

「それがマリの身体と何の関係がある？」

「そうねえ、フフ……ここかな？」

突然、マリの身体に触り始めた。明莉には気を許しているし、腹が減って集中力を切らしている、とはいえ、マリは懐に入り込んだ、明莉の身のこなしに驚く。

「明莉、おまえも、武道とかやっているのか？」

「うん？そんな脳筋はやっていないわ。あなたみたいな過激な運動は、美容と脳に悪いわ」

明莉はそう言ってから、マリの身体を触り始めた。今度は入念にあんな所やこんな所も。

「何をする明莉　こんな公衆の面前で堂々とそんな事……あ、やめて、明莉……」

真っ赤になつたマリの身体の、表面積の約70%を入念に触り、明莉は納得したようだった。

「やっぱりそうだね。あなたの身体は、殆ど骨格筋、種類は白筋で出来ている」

「あーそんなとこ……こっかくきん？」

「筋肉は二種類あるの。骨格筋は、腕や足などの身体の骨格にくっついて、意識的に動かすことができる筋肉の事」

「でも筋肉って意識的に動かす以外は必要ないだろう？」

ペタリ、明莉はマリの頭に手を置いて首を振った。

身長差二十センチ、もちろん明莉の方が背は高い。

「たしかに骨格筋は、筋肉の50%くらいの比率を占めるわ。でもあなたが意識しないで、心臓を動かして、この少し足りない脳に、栄養を送っているのは誰のおかげかしら？」

言葉より身長差にムカついたマリは、胸を張って大きな声で答えた。「当然、マリのおかげだ！」

マリの墨を梳いたような黒鉛の前髪の上から、額をペチペチしながら明莉は頷く。

「そう、あなたのおかげよ、マリの平滑筋と心筋のおかげ。平滑筋は内臓を守り、内臓を活発にする筋肉。心筋は、心臓を守り心臓を活発に動かす筋肉。自律神経によって、コントロールされているの」  
頭をペチペチされながら、いまいち分らないマリは答えた。

「筋肉は筋肉だろう？」

「あなたの場合は、骨格筋が70%もある。内臓を動かす筋肉を減らして、自分の意志で力を発揮する筋肉に代えている。その為に必要な器では生存すら危うい。だから、その幼女の身体を保っている」  
明莉のペチペチの回数が目に見えて増えた。

「そして筋肉の質が違う。白筋と赤筋。白は一瞬で力を出す事が出来るけど、耐久性が低い。赤は安定した力をゆっくりと作り出す。その割合もマリは白金が異常に多い。ホモサピエンスの常識を逸脱する程に」

頭上にはなマークを表示させ、迷宮のラビリンスに入り込んだマリの頬を両手で挟み、ギュウ〜と潰しながら、明莉は言い聞かせる。

「短距離の選手や重量挙げみたいに、一気に力を使う人には白筋。マラソンのような長時間エネルギーを必要とする人には赤筋が多い」

頭上に大きななマークが増え、あほ毛が生えるのを見て、さらにギュウ〜と力を込めた。

「だ・か・ら・ね！あなたみたいな、一瞬だけの火事場の馬鹿力を出すのは、白筋野郎なのよ！You understand？」  
菱形になったマリの口から言葉が漏れた。

「わ、わかった……」

マリの頬を挟んでいた手を放して、明莉は推論を唱え始める。

「ここからは私の考えだけど、マリは骨格筋が多く、そして殆どが白筋で出来ている。人類の常識からは、ちよつと考えられない肉体の構造だわ。たしかマリの体重は32キロだったわね。身長は百三十九センチだっけ？」

気にしている自分の幼女体型を、ズバリと言われて怒り出す。

「お、おまえ！自分が少しくらい背が高いからって……それにマリの身長は152センチだ」

「十三センチもサバよんでいるわね。よく小学女子に間違えられるくせに……しかも低学年」

「な、なにを……そんな事はまず殆ど無いぞ“可愛いお嬢ちゃん、お菓子あげるからこっちおいで”と言われる事はたまにあるが」

「少しはあるわけね。あと、変なおジサンについていったらだめよ」「お菓子だけもらって、ぶっ飛ばした」

「おじさんが危ないって、言おうとしたのだけど、遅かったか……その幼女の姿は、変な色気があるから気をつけなさい」

「今、幼女って言ったな！」

「うん。まさにアニメの主人公役の天使みたい。なんでそんなに、そその姿、格好なんだろう？それが自分の成長まで止めて、戦う事を優先した姿なんだから、ある意味アニメ的な奇跡的な現象ね」

気にしている体型の事を好きだけ言われ、マリは怒りモード突入で明莉を指さす。

「この乳デカ女め！今日こそは決着を……」  
距離を取ろうと下がったマリの後頭部が、何かに当たった。

振り返ると、いかにも柄が悪そうな三人の男が立っていた。

空腹と幼女問題で不機嫌なマリは、自分でぶつかっただにその怒りを男達にぶつける。

「何だおまえら！こっちは勝負に負けて、頭で負けて、体型で負けて、ムカついている！」

明莉が言葉を補足した。

「本当はお腹が空いてるだけです〜」

「そうそう、腹が空いて凶暴になっている。だから非常に機嫌が悪い」

中学の女子、しかも、やけにちっちゃくて、やせっぽちの女の子に因縁をつけられた、男達は驚いていた。しばらくして、やっと本分

を思い出して決め台詞を唱える。

「おまえら、意味が分って言っているのか？俺達が誰か分っているのか？」

明莉が三人の男を見ながら話を始めた。

「最近、この辺を取り仕切っている組織がある。急激に力を持ったその組織は、噂ではクスリや売春、臓器売買など裏の仕事も行っていると言われている。組織の構成員は、全員、銀色のネックレスをしており、組織のトップは、赤いジャケット、黒いネックレスを身につけている」

二人の男達が、だらしなく開けている胸には、クロームのネックレス。

そして少し離れた位置に立つ、派手な金髪、幅の薄い濃い色のサングラスをかけている男。

真っ赤な皮のジャケットと同じく皮の黒のパンツ。ジャケットの下には紺と白の縦のストライプのシャツ、そして胸元に、漆黒のペンダントが見えた。

「まだ、小学生くらいか。最近流行りの“幼女”って事で、結構高く売れるかもな」

「雑魚は黙ってる！」

マリが幼女と言われて腹を立てる。

明莉は、奥の赤いジャケットの男が気になっていた。

濃い黒のサングラスで表情は見えないが、男は笑っているようだ、口元が緩んでいる。

……この男から感じたことのない、強いプレッシャーを感じる……

暑い七月の日差しの中でも、身が寒くなるような圧力。

明莉の様子など気がつかずに、小学生のような女子が因縁をつけ、組織の構成員を戸惑せる。まず日常では起こるはずもない事を、マリは順調に進めていた。

裏の暴力組織である、彼らにとって因縁は、つけるもので、つけられるものではないのだ。

「おい。どうする、こいつら？」

マリに雑魚だと判断された一人が、もう左の男に聞く。

「小学生をいじめてもなあ」

その言葉でマリの怒りは頂点に達した。

「この雑魚どもめ、人が一番気にしている事を！こつ見えても花の中学三年生。着縮みして見えるが、身長も152センチある！」

「着縮みなんてあるの？それに、いつの間にそんなに成長したの？気がつかなかつたわ」

すかさず明莉が突っ込むと、組織の二人は苦笑する。

それを睨み付け、一步踏み出すマリ、その前に立ちはだかる二人の男。

「あんまりに調子に乗るなよ。ほんとにさらうぞ！」

「ああ、やってみるよ！」

「この野郎、少し痛い目に遭わせてやる！」

いかにも構成員らしい啖呵。だがマリは構わず歩を進める。

マリの身体を、捕まえようと、二人の男は同時に近づき手を伸ばしてきた。

フツとマリが消え残像を残し、男達の間を通り抜けた。

マリの腰のあたりまで伸びる長い、墨を梳いたような黒鉛の髪が目の前を靡いた。

「あれ？今、おれ達を通り抜けた？」

同時に声をあげた二人の構成員、遮ったはずのマリが通り抜けた事に驚きを隠せない。

「白筋だけで構成されたマリの身体は、無駄な重さを一切持たない。それは一瞬の力の解放を待つ、しなやかな竹。幼女の姿も無駄な肉を持たず、速さを追求した結果」

明莉が雑魚二人の胸元を指さす。

男達は自分の胸を見て気がついた。

「馬鹿な……いつの間！」

組織の構成員を示すクロームのネックレスが、胸元から消えていた。

「おれのネックレスはどこに……」

「これのことか？」

マリの小さな手に二個のネックレスが、握られていた。

「なんだと、いつの間に取りった？おまえは手品師か？」

「手品じゃないわ。ただ速いだけ。人より桁外れに」

明莉の言葉に、二人は不可解な表情するが、赤いジャケットの男は違っていた。

「なるほど。その幼女体型は、速さを最優先した、造られた身体というわけか」

九条の言葉に明莉は、冷静な人形のような表情を少しだけ崩した。

「あなた何者？私達を知っているの？」

ククツと笑う、赤いジャケットの男。

「さあな。だが会ってみたかったよ、おまえ達に。クシテイはいないのか？」

「おまえは、ユウとハチを知っているのか？」

ご親切に名前を挙げたマリを見て額に手を置く明莉。

「バカ。マリ、名前を出しちゃ駄目！」

「ユウとハチか。そのうち二人にもご挨拶しよう……」

男の言葉が終わらないうち、マリの身体が爆発的に力を起動、筋力を一瞬で解放しその姿が消えた。男の前に姿を現したマリは、赤いジャケットの胸にぶら下がる、漆黒のネックレスを掴んだ。

「あのバカ……」

明莉が呟いたと同時に、ネックレスを手前に引き抜くマリ。

その手に、漆黒のペンダントから、滲み出た黒い霧が絡みつく。

「冷たい！」

霧は痺れる程の冷気を含んでいた。

冷たさと違和感で一瞬止ったマリの腕を握った九條が、嬉しそうに口元を緩める。

「どうした中学生。俺のペンダントを引っこ抜くはずだろう？」

濃い色のサングラスをかけた、赤いジャケットの男の顔を睨み付け

たマリ。

「くそ、その手を放せ！」

マリの腕を右手でガツチリと掴み、身体を空中に吊し上げた男は、マリの顔をのぞき込む。

「何だ？良く聞こえないな」

今度はその場の全員に聞こえる声でマリが叫ぶ。

「その手を放せ！」

「可愛い女の子が、乱暴な言葉を使っちゃ駄目だな」

男は口元を緩ましながら、掴んでいるマリの小さな手を見た。

「こんな小さな手で、常人には見ることが出来ない速さを……いや、この小さな手、細い腕だから実現可能な速さか。だが捕まえてしまえば、自慢の速さも役には立たないな」

九條を下から睨み続けるマリ。

「……なんで私より速かった？」

九條の代わりに、明莉が疑問に答えた。

「その男はマリより速くないわ。あなたは動きを見切られただけよ。不注意な動きだったわね」

その回答に感心する九條。

「おまえがマルチブレインか？冷静でクールな頭脳。噂は本当だったみたいだな。これは楽しくなってきた」

「私は別に楽しくないけど？その呼び名は止めて欲しいわね。マリはさっきその二人からネックレスを奪うときに、速さの起動と解放をあなたに見せた。そして同じタイミングであなたのその漆黒のペンドラントを狙った。たとえどんなに速くても“さあいきますよ、一、二の三”って手を伸ばしたら、捕まえられる。ただし、いくらタイミングが分かっても、普通の人間にマリを捕らえるのは無理。成長著しい暴力組織のトップ、九条武巽、あなたも異能力の持ち主なのかしら？」

「ほう、俺を知っているのか？さすがだなマルチブレイン。異能力か？そんなものは持ってないぜ。俺は組織の、ただの管理職だよ。

ただ、少しばかりの悪運はあるらしい。なんせ、こうして可愛い二人にも逢えたからな……うん？」

何かに気がついた九条は、掴んでいるマリの手を手前に引き寄せた。「イタイ、この！なにをする！」

抵抗する小さな身体を、九条は目の前につり上げる、マリは、もがく以外は何も出来ない。

「おまえ、この左手の甲の傷は何だ？かなり深いな……なんども傷つけたように見えるが？」

「おまえには関係ない！」

足をばたつかしてマリは抵抗を試み、相手の腹を蹴るが、九条は気にもとめない。

「どんな事をすれば、こんな深く大きな傷がつく？おまえ、自殺願望でもあるのか？だがそれなら、普通は手首を切るもんだらう？」

「放せ！こいつめ！」

「マリの速さを起動させない為に、身体をつりあげ地面から離している。考えているじゃない？蹴る地面が無ければ、力を爆発させられないからね」

この状態でも冷静な明莉に、感心した九条。

「おまえがさつき、こいつを捕まえられた理由を解説したからな。

タイミングを変えられたら、かなりやつかいだ」

「そうね、今度は簡単にはいかないわね。同じタイミングで力を起動したのは、マリの慢心だから、少しは無様な姿もいいかと思っただけ……そろそろ私は限界のようだよ」

九条に近づくと明莉に、成り行きを見ていた組織の二人が身構える。九条が楽しそうに言った。

「今度はマルチブレインが相手か。その身体、かなり鍛えているよ。うだな。薬品も使っているようだ。クク、おまえ、ドーピング検査に引っかかるぞ。そこまでするのは、マルチブレインの力を抑制する為なのかな？」

「オリンピックは、出る予定がないからかまわないわ。それよりあ

あなたは何者なの？ここにユウがいれば、あなたが何者なのか分るのに」

「俺も聞きたいな。マルチブレイン、おまえは何者なんだ？」

「その呼び名は、止めなさいって警告したはずよね。聞こえなかったかな？私は普通の中学生」

「クク、この状況で俺に恐れを抱かずに、向かってくる中学生なんているわけない」

「そんな事ないわよ。結構ドキドキしている……あなたなら、私を受け止めてくれるでしょう？全力の私をね……潰して……グシャグシャにしてあげるわ」

なにかが、他の誰かが明莉の中で目覚める。

「来るぞ……おまえら気を抜くな！」

九条が叫んだ刹那、明莉は、右側の男の迎撃の姿勢を取ろうとする懐に入り込む。

男の片腕を掴みスツと体勢を落とす明莉。男の身体が空中で一回転する。

何が起こったか分からないまま、アスファルトに叩きつけられて、一瞬息が止まった男は、路上でうめき声を上げる。慌てた左の男が、明莉を捕まえようと腕を伸ばしてきた。

右に素早く踏み込んで体をかわしてから、男が延ばしてきた腕を脇に挟み、そのまま全身の体重かけて手前に強く引っ張る。

「この、なんて力だ！」

倒れまいと踏ん張る男が、後方に重心を移した時に、素早く一歩前に踏み込み、男の左の足を、内側から刈り込む。男は後ろに転倒し、頭からアスファルトに倒れこんだ。

明莉は、男の襟を両手で掴み、後頭部が道路にぶつかるのを止めた。「気をつけなさい。死んじゃうわよ！」

一瞬微笑んでから、両手を男から離し、右足で地面を蹴った。

空中で身体を捻り身体の向きを九条へと向ける。着地して、九条の戦闘範囲に入った明莉は、間髪置かずに攻撃を開始する。左足を軸

に一回転しながら、左手の裏拳を九条の顔めがけて打ち込んだ。その攻撃を左手で易々と受け止めた九条は、明莉の優雅にして、破壊力を持った動きに呟く。

「なるほど柔術を使うのか。しかもスポーツではない、明治維新の前、武士が使っていた殺人術の方だな。投げる、打ち込む、そして……」

捕まれた左手を九条に任せたまま、両足を空中に広げて、身体を逆さにして飛び上がる。

スカートがめくれて、二本の白い太股が露わになり、明莉の両脚が九条の腕に絡みつく。

「投げる、打ち込む……そして、決める。関節技よね」

明莉が九条に言葉を返し、両脚を九条の左の腕に絡めたまま、落下する勢いで、そのまま九条の腕の関節を決めにいく。

「バカかおまえ、俺の腕を決めるより先に、おまえの頭が潰れるぞ」  
九条は明莉の体重がかかった左手を、頭上まで持ち上げる。

「さすがね……ま、計算どおりかな」

「計算だと？頭を熟したトマトのように、割られる事がか！」

頭上から一気に左手を加速させ、明莉をアスファルトの道路に振り下ろす。

固い道路に落下していく最中、空中で逆さのまま明莉が呟く。

「ええ、計算どおり」

明莉の身体がアスファルトに触れる直前、その動きを止めた九条の腕。

青色に輝くモテカワヘアの髪が道路に触れている。

あと五センチで頭が潰れていた明莉、左腕に逆さまに絡みつくその顔を九条が見た。

「おまえ、最初からこれを狙ったのか？」

「ええ、最初から狙いはそっち。私に気を取られて、マリの両足を地面に付けちゃったね」

明莉の攻撃で意識が離れた九条の、右手を振りほどいたマリが地面

に立っていた。

マリの手は、明莉が絡みついた九条の左腕を、ガツチリと押さえていた。

「この力は……予想以上だな」

明莉は絡めていた両手両足を九条の腕から解き、逆さまから、後方に一回転して道路に着地。

続けてマリも後ろに飛び、九条から距離を取った。

「さて、どうするマリ？ 私としては、この男とは戦いたくないんだけどね」

頭を振って手で髪を整える明莉、その言葉はマリには、もはや聞こえてない。

「完全に頭に来た。あんたが気にしていた、この左手の傷の意味を教えてやるよ」

腰のあたりまで伸びる、墨を梳いたような黒鉛の髪を手で梳いて整え、下唇をぺろりと舐めたマリが、戦闘態勢に入り、驚異的な速さと力の解放の準備に入る。

「やっぱりね……もう止らないわね。一応私は、止めなさいと、注意はしたからね！」

九条は口元を緩めた。

「クク、今度は二人一緒か、さてどんな攻撃が待っているのかな？」  
嬉しそうに両手を前に広げ、九条はゆっくりと迎撃の姿勢をとった。  
ジリッと距離を縮め、九条の戦闘範囲に入り込むマリと明莉。

マリが力を解放する直前、三人に近づく長身の男。

「もうその辺でいいだろう。おまえら歩行中の皆さんとオレの邪魔だぞ」

神代先生が九条とマリとの間に割って入り、二人のバトルを止めた。  
直後に、マリは路上に倒れた。

「大丈夫かマリ！」

心配して抱き起こす神代先生。目を開けて右手を伸ばして、懇願の表情を浮かべたマリが、逃げられないように、先生の首をガツチリ

掴んでから呟いた。

「もうだめ、腹減りすぎ……何か食べさせて……先生」  
その言葉でガツクリと肩を落とした神代先生。

「……というわけで、この娘達に飯を食わせないとならんが」  
九條は新しい敵の力量を計りながら口を開いた。

「まだ、続きがあるんですがね。先生」

「そうか。ならば仕方がない」

明莉にマリを渡し神代先生は立ち上がった。

銀色に見える白髪、その色と獰猛な戦い方から、白虎と呼ばれる、  
現代最強の剣士の一人が、自分の下唇をペロリと舐めた。

「さあ……始めるとするか、このオレとな！」

「まさに野獣だな先生、あんたも特別製なのかな？」

「いいや、ただ、ただ、人より多くの飯を食い、ただ、ただ、鍛錬  
に明け暮れる。そんな役立たずな駄目な大人だ」

「……確かに、学校の勉強とか、道徳観を教えるのは向いてないよ  
うだ。だが、その分戦い方は教えるのは上手そうだな。そのうちっ  
ちゃいお姉ちゃんは、あんたが教えたんだろ？」

「ああ、こいつが暴走して迷惑をかけたなら謝る。だがここからは  
……」

「ここからは？正義感か、それとも弟子をかばう、そんなところか」

「いいや、ここからは……面白そうだから、オレにやらせろや」

白虎と呼ばれる、その野獣の気が満ちあふれた。

「クク、面白い連中だな……とりあえずお姉ちゃんに、飯を食わせ  
てやれよ。俺もこれから会社で会議がある」

「フツ、おまえこそ、会社員には向かないように見えるが？」

「クク、会社では管理職だね。俺がいないと部下がまとまらない。

おい、おまえら、いくぞ！」

二人の構成員を睨んでから、踵を返す九條は、歩きながら三人に右  
手で挨拶した。

「また逢おう、力ある孤独な者達よ」

## 食欲と戦闘力〜マルチブレイン

寿司とか焼き肉とか食いたい」

ご飯をおごる事になった神代先生にマリが注文をつけた。

「そんな金が何処に有る？地方公務員を舐めるな！」

そうゆう事で三人は近くのカレー屋に入った。マリは当然カレー大盛り。

ご飯は800グラム、カツ二枚乗せ、特製の特大ウインナーの二本刺し。

「もう先生があそこで邪魔しなけりや、アイツをフルボッコにしてたのに」

「マリあれ以上、力を使ったら……餓死したぞ」

悔しそうに大盛りのパルチツクカレーを、もの凄い勢いで食べているマリを、たしなめる神代先生。

「あんな奴……モグモグ……ぶっ飛ばして……ムシャムシャ……やったのに……ゴクゴク」

カレーを食べながら、神代先生になぜ止めたと、マリが再び文句を言う。

「まあ、そう言うな。武道を学んでいるものは、ケンカなんかしたら駄目だ……マリ、オレの話聞いているのか？」

諦め気味な神代先生の説得は、トンカツを二個同時に頬張った、マリには届いていなかった。

それでも雰囲気で、咎められているのが分ったようだ。

自分は悪くないと、スプーンを持っていない左手を左右に振ってから、中指を立ててファックポーズ。不満を全身で表すマリ、カレーは美味しいらしく顔は緩んでいるが……

「つまり、今度会ったら覚えとおけ！コノヤローって事か……はあ、まあマリならそう言うか……明莉！おまえもおまえだぞ。路上で飛び間接なんか使うなんて」

明莉がクスッと笑った。

「あれ？神代先生、私のパンツが見れて嬉しかったの？」

「そうそう丸見えだったぞ、またオシャレで大人っぽいレースのパンツで先生は嬉しい……じゃなくて、おまえ、マリと同時にあの男に、仕掛けようとしていただろ？」

「うん！蟹挟みを狙っていたわ！」

無邪気に笑う明莉に、ため息をつく神代先生。

「相手の足が折れるか、おまえの頭が割られるぞ。おまえらなあ……この大食らいの単純バカが、後先を考えないで行動するのは Teppan としてもだな、明莉、おまえは冷静に対処する役の筈だろう？」  
今度は大型ウイナーを一本丸々頬張ったマリが、先生の視線に気がつき、また中指を立てて、ファックポーズを決めていた。

「ほら、バカもそう言っている」

モゴモゴ言いながら、バカではないと、必死に首を振る。

「こ、こら、カレーを食いながら首を振るな、カレーが飛び散る！ああ……今年は省エネで、カジュアルっぽい服装なんか求められてな。電気は省エネ実現だが、先生は逆に服装代が掛かって、お金の排出量の増大を実現。それでなくても、地方公務員は結構大変なんだぞ。PTAはすぐ文句言ってくるし、モンスターペアアいや、親御さん達も怖いし……」

神代先生の格好は、たるみのある薄めのカジュアルジャケットをはおり、ズボンには細身の黒い色。淡いクリーム色のシャツに、少し崩して格子模様のモノクロのネクタイを締めている。

「服のセンスは悪くはないけど、いつも同じような気がするわ、もっとおしゃれした方がいい。先生自身は結構いけるから。私がプレゼントしましょうか？」

「明莉は金持っているな……って、マリ、カレー食いながらリアクションすな！」

マリと明莉に挟まれて、動けない神代先生にカレーの雨が降る。

「フフ、楽しいわね。脳筋を見ていると和むわ」

懸命にカレーを拭き取りながら注意する神代先生と、モゴモゴ、文句を言いながら食ってるマリを、嬉しそうに見ていた明莉が、九條との戦いについて意見を述べた。

「さっきの九條とのバトルだけだね。先生あれしかなかったの。とりあえずダメーじ入れて、逃げるつもりだったの。たぶん、二人掛かりでも、あの男、九條は倒せなかったわ」

「こらへマリ、もはやおまえは、わざとやっている領域だろ！なに！？おまえたち二人でも倒せなかったって？」

「そうよ。マリが臆おぼろを使っつかていれば別だけど。あのままでは勝率は六割切っちゃう。しかもアイツ、まだ全然本気じゃなかったし」

「ふん、そうか、おまえ達でも敵わない相手か、そりゃいい」

「あれ？先生なんか嬉しそうね」

「まあな、この暴走娘は少し痛い目に遭った方が将来の為だし、世の中と大人を舐めきつた、明莉にもいい経験だろ？世の中には、思い通りにならないものがあつた方がいい……だからカレー食いなから、リアクションするなへマリ！」

先生とマリのパルチックカレーバトルを見ながら、片肘をついた明莉が真顔で呟く。

「まあね、私、大人は嫌いだし、その嫌いな大人が造つたこの世界は大嫌い。時々、壊したくなるくらいに。でも先生は好きよ、これはホント。マリ、今度ユウに会つて、九條の正体を確かめてもらいたいね……って、あなた達聞いてる？」

マリが盗み食いしようとしてトンカツに伸ばした手。そこに神代先生のスプーンが振り下ろされる。ガシャン、フォークで受け止めマリが次の攻撃、スプーンによるカツ奪取を実行。

二段作戦は成功して、カツをスプーンに乗せる事に成功するが、勢い余ってトンカツをスプーン上で滑らせ神代先生に放出。油とカレーが服にベツタリ付着、先生の目がキラリと光った。

「来いマリ！真剣勝負だ！」

「望むところだ！」

スプーンとフォークを二刀流で構えた二人。

戦う場所を道場からカレー屋に代え、戦いのフィールドへと突入する。

「仲がいいわねえ。ちょっと妬けるくらい……九条の事は、私が調べられないか」

九條が組織の自分の部屋に帰った時には、外は暗くなっていた。

電気もつけずに、暗い部屋で椅子に身体を投げ出し、サングラスを机の上に放り投げる。

「どうだった？」

九條の後ろから声が聞こえた。

「クシテイはいなかった」

「そう残念ね……そのわりには楽しそうね？」

「ああ、なかなか楽しめた。今日の連中はクシテイとは仲間らしい」

「それじゃあ、ここに連れて来れるわね……どうしたの？」

「うん？せつかくだから、全員を招待したいな、と思ってな」

「そんなに気に入ったの？その子達」

「出来ればこちら側に入れたい」

「クシテイの仲間が、あなたと一緒にになるわけないわ」

「そうかな。おまえはいつも、こちら側とか、あちら側とか別けたがるが、人間は単純には割り切れない、光と闇、そのどちらもあつての人間だ」

「フフ、そんな事を言うなんて、本気で気に入ったみたいね。でもクシテイはだめよ、あなたに光は似合わない」

「俺がクシテイに、取り込まれるとでも？そんなに強い力を持っているのか？」

「ええ、私が恐れるくらいの力を持つわ。出来ればあなたには近づかないで欲しい」

天井を見上げて九條が嬉しそうに笑った。

「それはいい。あいつらと、おまえを恐れさすクシテイ。ますます

楽しみだ」

「だめよ本気になったら。私が嫉妬しちゃうじゃない、あなたは私と別れられないの……フフ」

女の笑い声が、真つ暗になった部屋に響いた。

原宿のメインストリートを、普通の少女達と群れながら歩く。

みんな楽しそうに、大して意味を持たない会話に、笑い、喜びながら歩いている。

「うん、久しぶりにすつきりした。爽快な気分だわ！この風景、ホント、普通が一番いいわね」

後ろを遅れて歩いてきたハチが、ユウの横に並ぼうと、勢いをつけて前が出るが、勢い余ってユウを追い抜いてしまった。それを見たユウは、さりげなく歩く速度を調整する。

二人は並んで歩き始めた。

「普通が良いって、今言った？」

「うん、いいね、普通の女の子って、その言葉が心地よいわ。とってもね」

首をかしげるハチ。

「いつも普通にこだわるけど、ユウは普通でしょう？どこか変わっているところあるの？」

「そうだね、普通だね。飯も食うし、おならもするし、こうして買い物もするしね。悪霊が憑いている以外は割と普通だわ」

“おならと悪霊”の変った組み合わせの単語と、ユウの大きな声に、周りの少女達がこつちを見た。

「しーい！声大きすぎるよ、みんなこつち見てるよ」

「あーらーそう？私は全然平気よ。アイツのせいで起こる騒ぎにくらべれば、多少、頭がおかしいと思われるくらい、どうってことないわ」

「もーユウ！声でかいつて言ってるでしょ？知り合いがいたらどうするのよ」

「いいじゃん、知り合いにも聞いてもらえばね。悪霊憑きでも、普通に休日をしている所を是非見て欲しいわ」

「だからー声でかいーシューイイ！」

八チが人差し指をユウの目の前に一本立てた。

しばらく店を見て歩く二人は、原宿通りを通り抜けて、横に走る大きな道路に突き当たった。

横に大きな警備会社のビルがそびえている。

「ユウ、こつちにはお店が無いよ。何か他に用事でもあるの？」

「うん？ああ、そうだね。わたし、何でこつちへ来たんだろう？」

通りを戻ろうとしたユウの視界に、気になるものが目に入る。

赤い色の皮のジャケット。

大きな通りを挟んでも、ジャケットの色は血のように深紅に発色し、道行く人々がモノクロに見える程のインパクトを与えている。真っ赤な皮のジャケットと皮の黒のパンツ、ジャケットの下には紺と白の縦のストライプシャツ。金に染めた髪と細いサングラス。まっとうな職業ではなさそうだ。最初赤いジャケットに目を引かれたが、ユウが真に注意を引かれたのは、はだけた胸に下がるネックレスだった。この距離では殆ど見えないそれは、一瞬、目眩を覚えた程、強烈な負の力を発する。

「なんだろ……この感じ。他の霊体には感じたことがない強い力を感じる」

男を目で追うと、男はいきなり立ち止り振り返ってユウを見た。

ゾクリ、体中に寒気を感じた。

「この強い悪寒は……あの男はなんなの？」

聞こえるはずがない、都会の騒音の中でのユウの呟き。

だが、その男はまるでその声を聞いたかのように、ユウに見えるように左手を開き、人差し指を道路に向けた。

「そんな馬鹿な事が……私の呟きがあつた男に聞こえたというの？」  
男の指先が指す方向を見ると、その方向には、道路の真ん中を走る

大型トラック。

男が指を内側に軽く曲げると、トラックは速度を上げ急に方向を変えた。

トラックが進む方向を見たユウに、驚きと恐怖の表情が浮かぶ。

そこにはユウを見失った八チが、周りを見渡しながら立っていた。

ユウと八チの距離は十メートル以上ある。

「八チ！危ない！」

発せられた声でユウを見つけ、八チは嬉しそうに手を振った。

「あーユウ見つけたよ！」

背後から迫るトラックに、八チは気がついていない。ユウは急いで八チの元へと走り出す。

だがトラックは速度を上げて、八チの間近まで迫っていた。

「八チ、逃げて！」

もう八チの直後にまでトラックは来ている。

「駄目だ、間に合わない……！」

八チの姿がトラックと重なった。残酷な結果を想像した瞬間、ユウは瞳を閉じてしまった。

八チの姿がトラックの大きな車体に隠れた。トラックはそのまま、八チが立っていた歩道を乗り越え、信号にぶつかって止まった。

激突の大きな音に大勢の人が集まってくる。

「そんな……八チ！」

一瞬思考が止り、ユウはその場に立ち止まった。

その肩を、後ろから押さえた小さな手。

「え？八チ！？」

その感触で振り返ると、制服を着た少女が立っていた。

幼女のような小柄な少女の細い腕には、瞳を閉じた八チが抱かかれていた。

「八チ！無事なの！？」

八チよりも小さい身体の少女は、八チを抱えたままで頷いた。

少女の答えに安心し、ホッと安堵の息を漏らす。

「八手を助けてくれたのね？マリ……」

マリは、黙って八手をユウに渡した。身体に伝わる心臓の鼓動と呼  
吸音。

「どうやら気絶しているらしいが、どこも怪我はしていないようだ。

「ありがとう……でもどうしてマリがここに？」

パシイ、いきなり少女の小さな手が、ユウの頬を強く打った。

「何をしている？八手の事は、一番おまえが分っている筈。なぜ目を離れた？」

幼く可愛い声ではあったが、少女が凄く怒っているのはよく分った。

「ごめん……マリ」

ユウはただ頭を下げて詫びるしか出来なかった。とある事件でユウとマリは知り合った。

そしてマリと行動を共にする明莉とも。その後は、仲間としてつき合っている。

自然に八手も、二人と付き合う事になったが、マリと明莉にもユウと同じく普通に接していた。

マリと明莉は、八手の存在に救われていると、良く言っている。

そして二人とも、八手をとても大切にしていた。

「ユウ、八手は歩いていてだけで災難を引き受ける。それが八手の定め。それは八手がクシテイ・ガルバだから。慈愛と救済、全ての者を救う事が八手のことわりだ。救われたい亡者達は八手を引き寄せる、例えその場が天国でも地獄でも。蟻の巣に砂糖を投げ込んだように、八手が死んでも亡者は群がり続ける。この世界の孤独は悲しく苦しいものだ。我々も亡者と同じだ、八手に救われているし必要としている。八手は異能な者が持つ、力有る者の孤独さえ、救ってくれる」

「ごめん、ほんとうに……ごめん、分っている」

八手を抱きしめながら、マリの前で頭を下げ続ける。

「……マリはあの男を尾行していて、おまえ達を見つけた。そしてユウ、いつもはこの手の災難を事前にキャッチする、おまえの勘が

鈍った……」

「え？」

マリの意外な言葉に顔を上げた。

「やはり……赤いジャケットの男が原因か？」

注意を奪った原因を口にしたマリに、ユウは驚きの表情を見せる。

「やはり……そうか」

「マリ、アイツは何者なの？悪霊にさえ感じない、恐ろしい力を感じたわ。そして走っているトラックをまるでラジコンを操るみたいに八チへと向けたの」

マリは首を左右に振った。

「まだ分らない。明莉が調べているようだ。マリも明莉とアイツと接触した。それも友好的とは言えなかった。ただその時は偶然だと思っていた」

「どういうこと？私達三人があの人と接触して、そして八チが狙われるって？」

「分らない。偶然と言いたいが、そうもいかなそうだ。ユウは八チを護れ。おまえの事が好きで、いつも側にいるクシティを」

そう言い残してマリは去っていた。しばらくして目を覚ました八チ。

「あ、ユウ……あたし寝ちゃった？」

「……帰るよ」

「ええ？待って、どうしたのよ？」

状況が分からない八チを、強引に家に送っていく。

気を失う前より元気な八チは、買い物物の中断に不満を述べる。

「なんで帰っちゃうの？まだユウの夏服を買ってないよ！」

「来年買うからいいよ。今日は早く帰ると決めたの」

「来年！？遅すぎるよ、まってよ。私はまだ帰りたくないよ」

珍しく自己主張する八チの手を、力づくで引つ張り道を引きずっていく。

意外な程の強い力で抵抗する八チに、帰り道の途中で立ち止まったユウ。

「なんか、ユウ怒っているよ。なんかおかしいよ。私が寝ていた時に何かあった？」

無言で首を振り、もっと強い力で八手を引きずりにかかった時、八手が泣きそうになる。

「私、空気読めないし、トラブルメーカーだから、ユウの嫌なことを、知らないうちに行っている？それなら……」

「違う！」

つい大きな声を出してしまう。その声にびっくりして話を止めた八手。

確かに怒っていた……ユウは自分自身に。迂闊で無力な自分に怒っていた。

いつも面倒なだけと思っていた悪霊が、憑いていない自分は何も出来なかった。

いつもいいなと思っていた、普通の女の子であることが、今は腹ただしく思えた。

いざとなれば、何とか出来ると思っていた自分が、凄く格好悪かった。

今は八手といると後悔の海に沈みそうになる。一人になりたいと思っていた。

自分勝手なのは分っていたが、うまく自分の心を収められない。

このままでは、八手を嫌な目に遭わせてしまう。八手は大きな丸い目に、涙を一杯に溜めていた。素直に話せない自分の性格を疎みながら、ユウは無言のまま、八手を家まで送っていく。

「なんでよユウ……私の事嫌いになったの？ユウのばか」

泣き続ける八手を、おばさんが受け取ってくれた時、自分も悲しくなってきた。

下を向いたユウの髪を、優しく撫でるおばさんの手。その手の温かさは心地よかったけど、このまま、泣いたら楽になりそうだけど、でもそんな姿はわたしらしくない。マリにも約束した、もっと強くなって八手を護ると。自分の娘が泣いている、その原因がユウにあ

るのに、何も言わない八チのお母さんに、ますます涙が出そうになる。

少しずつ後ずさり、おばさんと八チから距離を取ってから、黙って頭を下げた。

「ユウちゃん、また明日ね！」

泣くのに忙しい八チに代わって、お母さんが八チの分もたくさん、手を振ってくれた。

自分の部屋に帰り、自己嫌悪の海に思考を沈める。

素直でないのに、独りでもいられない弱い自分。何にも出来ない無力な自分。

放送を終えたテレビのノイズが大きく聞こえ初め、初めて深夜の時間になった事を気がつく。

部屋に悪霊の姿が無い。いつも座っている、部屋の中央のソファの上は空っぽだった。

窓から夜の風が入ってきて、部屋のカーテンを揺らしている。

ベランダの鉄格子越しに、夜の東京を見ている悪霊の姿。

ベッドからユウは起き上がり、ベランダへと出た。

しばらく沈黙が続いた後、悪霊の方から口を開いた。

「なにか過ちを犯したのか」

「うん」

「それは己のせいか」

「うん」

「過ちは仕方無い事、だが二度はしない努力はするべき」

「うん」

「分ったなら今日は眠ればいい」

さつきまで我慢できた涙が、悪霊と交わした短い言葉では止める事が出来ない。

自分の油断と緩慢で、大切なものを失う所だった。それなのに素直に詫びることも、状況を説明する事も出来ない嫌な自分。ぼろり、

ぼろりと大きな涙をこぼす。

その後悪霊は、しばらく話さなかった。

「あのね」

初めて「うん」以外の言葉を口にしたユウ。

「あのね、今度は買ひ物に憑いて来ていいよ。本当は私もゾンビが怖い」

ユウの頭を少し乱暴に二、三度撫でた悪霊。

表情が読めない、悪霊の真つ黒な霧のような顔が、今は八子の母親のような優しい表情をしている、ユウはそんな気がした。

「ところで」

「うん？なんじゃ？」

ユウが、悪霊が脇に刺している紅の刀を指指す。

鞘は目を引く臙脂色<sup>えんじいろ</sup>。握る柄の部分も橙色<sup>だいだいいろ</sup>に染めてある。

深みのある光沢を放つ姿は、刀に興味がないユウでも、つい綺麗だと思ってしまう。

「いつも大事そうに持っているわね。その刀」

「これか……そうじゃな。理由は……」

「ひみつ……でしょう？」

ユウが微かに笑った。

次の日、ユウは明莉のマンションを訪ねていた。

赤いジャケットの男について、明莉に情報を聞きたいとユウは携帯で連絡した。

すると明莉からもユウと会って話したいと言ってきた。

「丁度いいわ、私のマンションに来てくれる？ユウと二人で話したかったの」

明莉は、中学生だがユウと同様に一人で暮らしていた。

ユウの場合は父親の仕事があり、仕方なく両親と別れ一人暮らしをしている。

しかし明莉は自分で希望して一人暮らしを選んだ。

マルチブレイン、妹の咲夜と自分を守るために。

「赤いジャケットの男、名前は九条武巽。ちよっと危ない香りがあるの。私にユウのような鋭すぎる勘はないけど、心が落ち着かない。悪いけど九條を霊視してもらえないかしら」

明莉は九條の正体を探って欲しいと言った。

「この間会った時に、何かがアイツには憑いていると感じたわ」

「やっぱりそうなの。もう一度会えば、もっと情報は得られるかな？」

「たぶん、少しは分かると思う。でも、強力な負の力を感じたわ。もしかしたら、私の方が取り込まれてしまつかも」

「それも困るわね……どうしようかな」

「ところで明莉」

「うん？なに？」

「あんだ、毎日こんなもの食べているの？」

「ええ、美しさを保つ為にね」

明莉の部屋は二十畳のワンルーム。

そこに置かれた高価なデザイナーディスクの上に、並ぶ缶を見てユウが呟く。

「アンドロスタンジオール、アンドロステンジオン、バンブテロール、ボルデノン、クレンプテロール、クロステポール、ダナゾール

……なんの成分なの？」

「タンパク同化ステロイド。筋力をつけようと思ってね」

「ACTH、EPO、hGH、LH……これは？」

「ペプチドホルモンとその同族体。運動能力の向上」

「マリは家では馬肉しか食べないし、あなたはこんな摂取している。身体は大丈夫なの？」

「大丈夫よ。マリは大量の白筋を維持する為に、脂身が少ない馬肉が最適なの。一日五キロは食べてるわ。私は……妹の咲夜の為に、摂取する必要があるものなの」

「そう、明莉がそう言うなら、私は反対出来ないけど」

アミネプチン、アンフェプラモン、アミフェナゾール、アンフェタミン、バンブテロール。

アメリカの連続ドラマで見た、精神薬の名前を見つけユウは心配する。

「ユウ、咲夜が暴走した時、私の身体はボロボロになる。精神も同じく激しい頭痛と目眩に襲われるの」

首を横に振りながらもユウの心配は消えない。

「分かっているわ。明莉が無駄に危険を冒すわけない。きっと必要なだと頭では分かる……でも」

「ふう、ユウは勘が鋭すぎる。私の事を心配してくれて嬉しい。でも、咲夜と一緒にいられるこの身体は気に入っているの。普段は何一つ自由にならない咲夜が、暴走するのも、私は止めたくない。例え命を削られてもね」

「私は……」

何かを言いかけたユウより先に明莉が口を開く。

「咲夜の自由になるものが一つあったわ。この髪は咲夜の好みなの。妹が普段通せるわがままはこの髪だけね」

明莉は、カールした淡い青い色の髪に染めた髪に触れた。

優等生である明莉が、唯一校則に違反している髪。

「分かった……もう言わないよ。明莉と咲夜の二人が決める事だから」

「ユウ、ありがとう」

「わたしは、九條を見つけて霊視を試みるわ」

うん、頷いた明莉の携帯が鳴った。

「非通知表示、いったい誰から？」

携帯を耳元に移して非通知の電話に出る。

「はい。あなたか……良く私の携帯がわかったわね。今、あなたの噂していたからかな？……こっちの話よ。ところで用件は何かしら？……そう、わかった、確認させて……じゃあ」

携帯を切った明莉にユウが聞いた。

「九条からね？」

勘が異常に鋭いユウは、的確に相手の名前を挙げる。

頷いた明莉がユウに聞いた。

「ユウ、八チは携帯持っていないよね？」

「うん、必要無いって」

「悪いけど、八チの家に電話してくれるかな？八チを呼び出して欲しいの」

明莉の言葉に頷いたユウが自分の携帯を取り出した。

「もしもし。あ、おばさん。はいユウです、八チいますか？……え？本当ですか？」

携帯を切ったユウが明莉の方を向いた。

「おばさんは、八チはわたしの所にいると思っていた……って」

「やっぱり本当なのね……」

「明莉、八チはどうしたの？さっきの九條の電話に関係あるのね」

「ええ、九條が八チはここにいるから、三人で遊びに来たって」

「三人で来い？九條は何が目的なの……どうしよう明莉。八チの身に何かあったら……」

「三人で遊びに来いって言っているのなら、マリを呼んで遊びに行けばいいじゃない？」

「何を悠長な事を……！いますぐ私は行く！明莉は八チが心配じゃないの？」

「心配だから、どうやったら、無事で取り返せるか考えているの」

「ごめん明莉……そうね、じゃあ三人で堂々と正面突破で！」

「正面って……その前に、あんた場所分っているの？八チと九条がいる場所」

「知らない……どうしよう明莉」

「明莉、明莉って、も〜八チの事になると、ユウは全然ダメな子になるわね。ふう〜仕方がない。ユウの能力を使うしかないか。私が裏DBから検索してもいいけど、100%正確な情報とはいえないから、裏付けを取る時間が掛かる」

「ホントに私はダメだなあ。まさに弱点を相手に教えているようなものね。その点、明莉はいつも落ち着いていて、さすがだと思う」  
「バカね、本当は私も焦っている。だから出来るだけ早く八子の居場所と状況を、正確に早く知りたい。そうじゃなければ、あなたに能力を使えなんて、私が言うわけない」

「そうね、と大きく頷いたユウ。」

「それで、あなたの能力を使うのに、最高の環境は何処？すぐに準備する」

明莉の問いに、ユウが窓に向かって空を指さす。

高層マンションの三十階、明莉の部屋。その窓辺から見上げる場所。  
「なるほど！あそこへ行くのね」

「うん、出来るだけ多くの思念をキャッチしたい。思念は電波と同じ特性を持つから、東京で一番高い場所へ。東京スカイツリーのテツペンへ行くわ」

「これに乗るのか？」

九條の要求の三人目、急遽呼び出されたマリが、少し蒼の瞳を大きくして呟く。

「そうよ、深夜にスカイツリーの一番上なんて、歩いて行けないでしょう？あら、出来るって顔ねマリ。私は良くて、バカ速&一瞬力のあるたと、見かけ倒しのユウには絶対無理よ。あと、警備員もいるから、空からの急襲の方が問題が少ないわ」

バカと、見かけ倒しは、顔を見合わせて同時に言った。

「正面突破でいいだろう？」

駄々っ子の母親のような、困った顔になった明莉が肩を落とす。

「バカ+バカはイコール、バカね。さつきも、正目突破とかユウが言っていたけど。あのね、二人に質問するけど」

バカ+バカは、また顔を見合わせた。

「はい、では第一問、あなたは出来るだけ早く八子を救出したい？」  
二人が、ハイと勢いよく手を上げた。

「でわ、第二問、ハチは無事に救出したい？」

二人が、ハイと手を上げた。

「でわ、第三問、体力には自信がある？」

二人が、お互いに顔を見ながら、おずおずと手を上げる。

「ブブー、はい、嘘はいけません、二人とも不正解」

目を合わせた二人の嘘つきは、そんな事は無いと手を横に振る。

その二人の髪を、いきなり鷲づかみにして、自分の手前に引き寄せた明莉。

「何をする！」

二人が文句を言うが、明莉の力はもの凄くて逃げられない。

「いいかな？二人とも、良く聞いてね。無駄な時間を使う余裕は無いの。九条はたぶん私達を待っていると思うけど、ハチが100%安全とは言えないわ。今の状態では、情報が少なすぎて安全性を確立出来ない。そして情報が揃っても危険性は残る。例えば1%でも危険があるなら、ハチが安全な可能性はFifth Fifty Dead or Aliveつまり確率は良くて50%なの。だからこの時点で、見栄や争いごとは無しにします。分りましたか？保護者の私も疲れるし、なによりハチの命が掛かっている」

髪の毛を鷲づかみにされたまま、二人をグツと自分の顔に寄せて納得出来たか聞く明莉。

「You understand？」

うん、うん、と頷く二人をへりの入り口から放り込んだ後に、明莉も乗り込んだ。

パイロットに離陸を命じる。真っ黒に機体を塗った、所属不明のヘリが空中へと飛び上がった。

「もう……乱暴だな、明莉。そのバカ力で、格闘界に革命を起こせるぞ！」

力負けして、悔しいマリが文句を言う。ユウも窓から外を見ながら独り言のように呟く。

「まったくよね。私はマリとは違うから、口で言えば分るのに。大

体バカつて言うと、バカつて、こだまに言われるわ」

にこやかな顔で二人の頭をガッツリ掴んだ、明莉の八十キロを越える握力が発動する。

「Sharappu!」

イテテ、とユウとマリが声をあげた。

「なにを小学生みたいなお事を言っているのかしら？こんなバカな頭は潰しても問題ないわね」

その笑顔の怖さに二人は、両手を合わせて合掌して謝った。

ため息をついてから手を離れた明莉は、足下に置かれた箱をガソゴソ探り始める。

「うん？明莉、トイレか？乗り物に乗る前には必ず行くように、幼稚園で言われなかったか？まあ、見ていないから、ここでシーしても……」

おもいつきりグーで頭を殴られたマリ。

「バカ、アホ、なんて事言っているのよ。はい、これ。レーション。いまのうちに食べておいて。途中でガス欠は勘弁だからね」

「レーションって、軍隊とかが使う携帯食料でしょう？もしかしてこのへりも軍隊のもの？」

ユウの言葉に頷く明莉。

「相変わらず勘の鋭い事。そうよ、軍隊の協力を得ているわ。どこの国かは聞かない方が、あなた達の為にはいいわね」

「中学女子が、どっかの国の軍隊に協力要請ですか」

感心を通り越して呆れるユウ。

明莉の父親は世界中に信者を持つ霊媒師。そのツテと考えるのが普通だが、明莉自身も裏社会でマルチブレインと呼ばれ、かなりの権力を持つらしい。

もしかして明莉本人の力かと思う。

そんなユウを見つめる明莉は、ユウの勘の良さがリアルな自分を、言い当てる事が怖かった。

リアルな明莉の姿に、この二人はどう思うだろうか。異能の力は、

三人ともに、自分で望んだものではない。ある意味どんな力でも二人は、嫌い恐れはしないだろう。

だが、明莉が異能の力を使って得た、新たな“大人の力”はどうだろう？

もしユウが持つ能力、霊と話せる、交霊を使ったら全てが知れてしまう。

ハチとユウとマリ、四人の関係は失いたくない。

……大丈夫、ユウは能力を使い、仲間の考えを覗いたりはしない……  
「まったく、大人の狡い考えね」

明莉は、計算無しで人と接する事が出来ない自分が、仲間と一緒にいる時だけは嫌いになる。

「うん？何か言ったか？」  
耳の良いマリが聞き返す。

「……計画を話すわ。まずユウを一番高い所へ降ろす。下から見つかっても、直ぐにはへりでも使わない限り邪魔はされない。ただ、今日は風が強いから転落には気をつけて。へりも長い時間はこの場に止まれないから、旋回してユウを待つ。終わったらこれで連絡して」

軍隊用と思われるレシーバーをユウに渡した。

「これはいいわ。余計な電波は交霊に支障が出る。終わったら直接あなたの霊へ呼びかける」

ユウは明莉にレシーバーを返した。

「分ったわ。でも通信を送るのは私によ。妹じゃなくてね。それだけは間違えないで」

ユウは分ったと頷いた。

## どうしたの悪霊？〜スカリツリー大作戦！

「おまえは俺たちが怖くはないのか？」

見張り役の組織の男が八チに聞いた。ウトウトしていた八チが眠そうに目を開く。

「うん？それより眠いーおじさん達は眠くないの？」

見張りの二人の男は、八チの側に来て強面の顔をより強調する。

「おまえは、臓器を売るか、ペットとして外国へ売られか、どっちがいいんだ？」

「ちよつと待つてね。うん〜どっちがいいかなあ？」

真面目に考え始めた八チに、イライラする二人。

「あのな、そこは選択するんじゃないやなくてな、どっちも嫌です！助けてください！……だろう？」

「そうだぞ。あと、泣いたりすれば、もつといいぞキョトンとした八チ。

「そうして欲しいなら、そうするけど。その方がいい？」

その答えにキョトンとした二人。

「そんな事を、俺たちに聞かれてもなあ？」

両手を上に上げて、伸びをしてあくびする八チ。

「ふああーヒマだよ。でもあと一時間くらいかなあ。それまでお話でもする？おじさん達」

「お話だつて？何の話をするんだ？それと一時間つてなんの事だ？」

「お話はなんでもいいよ。おじさんが話したいことを話して。一時間ユウ達の事だよ」

「ユウつて誰だ？」

「仲間だよ、あと一時間でここに来ると思うよ」

「おまえを助けに、仲間がこんな所に来るつて？クク、ハハ」

笑い始めた二人を見てキョトンとした八チ。

「あたし、なにかおかしな事を言っただかな？」

「ここはな……金と暴力が集まる所だ。そんな所にノコノコ来るバカはいねーよ」

「そうかーここは、危険な場所なんだね。でも、ユウ達は来ると思うよ」

「くだいなおまえ。来ないんだよ！自分の命より大切なものはないんだ。仲間の為に命を賭ける？そんなのはアニメの話か、本当のバカにしか出来ない」

「うん、うん、ユウとマリはバカだから絶対来ちゃうよ。明莉もお目付役で来ちゃうな。どうしよう？ここ危険な場所なんだよね？」

また考え始めた八ちに、イライラする二人。

「だから、来るはず無い……そう言っている……」

「そうだ！おじさん達にお願いよ」

「なんだいきなり？」

「危険だからここには来ないように、ユウ達に言って欲しいの。だめかな？」

眼下にスカイツリーが近づいてきた。

明莉が一番高い場所として、塔のメンテ用のステーションをパイロットに指示する。

作業ステーションは柵も簡単なもので、横幅も人が一人立てるくらいのスペースしかない。

「あんな狭い所に、どうやって降りるの？」

「はいこれ。キッチリ身体に結んでね。途中で外れたら、下まで落ちるからね」

明莉がユウに渡したのは、レスキューが救助に使う、ヘリからぶら下がる降下用のロープ。

「これ、テレビの特番で見た事があるな。嵐で船に取り残された人を救助していた」

マリが呟きながら、金具でユウとロープ固定する。

「まじですか？私がこのロープで一人で降りるの？」

だんだん怖くなってきたユウに、明莉が注意点を伝える。

「この金具で落下速度を調整してね。早すぎると足とか腕とか折るし、ゆっくりすぎると、風に煽られスカイツリーの側壁に激突するから」

明莉の説明にますます怖くなってきた。

「あの～ですね、私はあなた達と違って、肉体は日本のごく標準基準値……以下の中学生なんですが」

呟きは聞こえないふりで、黙々と二人は、ユウの身体に降下用機材を取り付ける。

「あの～ものすごく～不安になって来たんですが……わたし五階の階段でも息が上がって……あの、二人とも聞いてます？」

「よし、こっちは準備完了よ」

作業用ステーションの少し上にホバリングしてスカイツリーへ近づくへり。

パイロットが位置を固定出来たと、OKサインを出す。

へりの横の扉をマリが開けると、強い風が機体の中に吹き込んでくる。

身を乗り出したユウの身体が、風で揺れ恐怖で動けない。

「あり得ないくらい高いよ……しかもこの風。ついでに深夜で視界が効かない空……怖すぎる……」

足がすくみ、ユウはなかなか降下を始められない。その手をマリが掴む。

「ユウ頼む、おまえに無理な事を頼んでいるのは分る。でも八チが危ないんだ。私が代わってやりたいが、八チを探す事はおまえにしか出来ない」

「うん……分かった、頑張る……」

マリの言葉に頷き決心し、扉から外に身体を乗り出す。

外では風が塔の上部で強く渦を巻いている。

一瞬機体が大きく揺れ、必死にへりの手摺りにしがみつき、ユウが泣きそうな声を出す。

「……身体が動かないよう……どうしよう、八手を探さないといけないのに」

へりの出口にしがみつくとユウに、近づいたマリ。

「ユウ、一緒に行こう」

「え？」

返事を返す前にユウの身体を右手で抱えたマリは、降下速度を調整する金具も付けずに、扉から一気に飛んだ。空中を風に流されながら落ちていく二人。

目標の作業用ステーションに激突する瞬間に、ロープを強く掴むマリ、落下速度が一気に遅くなる。代わりに風を受けて大きく揺れ始めたロープの先の二人の身体。

マリは上を見上げ、ステーションの位置を確認してから、左右に身体を振り始めた。

振り子のように左右に大きく振られる二人。

「きゃああ、日本一高い場所でブランコなんかしたくない〜！」

いつもより恐怖で女の子っぽいユウの様子に、マリは微かに笑った。身体を振った反動で、上方へ飛び揚がりステーションへと着地する。

「大丈夫かユウ？」

マリの言葉で意識がハッキリしてくる。

「さつき、空中に飛んだ時、一瞬意識が無くなった……今でもボーンとしていてる」

作業用の細い手摺りがあるだけステーション、意識がハッキリしてくると、強風のこの場所に立った今も脚が震える。

「今更だけど……ちょっと忘れていた。私、高所恐怖症なの」

「大丈夫。マリもそう」

「それなのにあんな大胆な事をするなんて。落ちたらどうするのよ？」

「ユウがいるから」

「え？私？」

「おまえを抱えて、失敗する事は出来ない」

マリの言葉で、少し心が落ち着いた。

「そうね、私も頑張るわ。ありがとうマリ」

頷いたマリがロープから手を離れた。ヘリがロープを巻き取って上昇を開始した。

ヘリが遠ざかって、聞こえるのは風の音だけ。ユウにまた恐怖が襲ってくる。

その時、頬に触れた小さな手。

「マリがおまえを支える。心配するな、落ちる時は一緒だから」

「そんな事を嬉しそうに言わないの。涙が出そうになるわ」

「そうか、仲間と一緒に死ねるなら、幸福とはまでいかないが、悪くはないだろう？」

「うん。そうよね、ごめんね、マリ」

「なんの事？マリは役目を果たしているだけ」

「分ってるよ。でもごめん」

ユウの頬に触れるマリの小さな手は、酷い火傷を負っていた。

さつき飛び降りたときに、左手の摩擦でユウと自分の落下速度を、調整した為に負った傷。

「これか……気にするな、たいした事じゃない。それより始めるぞ！」

ステーションの細い手摺りを背に座り、マリはユウの身体を両手で抱えて支える。

風は強く視界が無い暗い夜の空。だが仲間が支えてくれる今は、怖くなかった。

ユウは瞳を閉じて集中し自分の霊力を高め始める。

ユウは生まれつき強い霊力を持ち、霊との会話が行えた。

小さな頃は、高い霊力をうまく使えずに、悪い霊に憑かれ、霊障を受けて死にかけた事も何度かあった。でも誰も助けてくれなかった。いや助けられなかった……両親には霊力は無かった。いきなり恐ろしい事を叫びながら、転げ回る自分の娘に恐怖するだけだった。

そのまま意識を失い、次に目覚めた時にユウの目に映るのは白い天

井。

そしてたくさん端子をつけられた自分の身体。

一週間くらい記憶が飛ぶ事なんかよくあった。医者は難しい病名を言い、脳に障害があると検査を繰り返す。でも脳には問題は無く、身体はいたって健康だった。

ユウの症状に首をひねる医者は、看護師からユウを退院させる事を懇願される。

ユウが入院すると、病院で奇妙な事が多発した。

他の人間より人の死に対して経験がある看護師でも、恐怖で仕事にならない。

目覚めた翌日には、ユウは検査の途中で退院する。

迎えに来た両親の顔、その表情から、退院を心からは喜んでいないのがよく分る。

ユウが孤独を一番感じていた時だった。

「いける！ユウ。大丈夫、絶対離さない」

マリの言葉に頷く。心の底を見たような勘の良さ、そして霊と交信できる能力。

異能のユウを理解する事は、血の繋がりがあっても不可能だった。だが今はこうして信頼できる仲間がいる、何を恐れる事がある。

巨大な光のオブジェ、東京が眼下に広がる。

その美しい景色に向かって、両手を伸ばしユウが交霊による、霊達との会話を始めた。

「みんな聞いて。私の大切な仲間を捜して欲しい。お願い時間が無いの」

霊力が高まり始め、徐々に白いオーラに包まれ、光り始めるユウの身体。

その姿はへりで旋回する明莉にも見えた。

「まさに光の十字架……」

マリと明莉は同時に呟いた。

目映い十字の光を放つユウが受信機となり、都内の霊が集まってく

る。

数千もの霊がユウの身体突き抜けていく。その度に揺れるユウの身体。

それを必死に支えるマリの小さな身体。高い霊力を持つユウだが、こんなに一度に大量の交霊は経験がなく、想像より体力と精神力の消耗が激しかった。

「だめ……このままでは、都内の全てとの霊の交信なんて……とても出来ない」

強い風でユウの声は途切れて聞こえる。

「どうしたユウ？何が駄目なんだ？」

トランス状態に入ったユウに、マリの言葉は届かなかった。

「もう……私の……魂が……壊れる」

そう呟きユウが崩れ落ちる。その身体を支えたマリが風の中で懸命に呼びかける。

「ユウ！どうした？大丈夫か！」

へりで様子を見ていた明莉が首を振る。

「都内の死霊、生き霊、悪霊、その全てと交霊する事は、ユウであってもやはり無理。これ以上続けるとユウの魂が消える……どうする？」

明莉はタブレットPCを操作して、八子の検索情報を確認する。

「裏DBの検索結果は、まだ地区単位で候補があがっているだけ。

これでは……いや、この手でいくしかない」

明莉はへりのパイロットに指示を出した。

「ユウ達がいる場所へ急いで！」

「ユウ、おいユウ、起きろ！」

マリは必死にユウを起こそうとするが、ユウは反応しない。

へりが近づく音が聞こえてくる、その音に一瞬、周りを察知する感覚を上空に取られた。

再びステーションに感覚を戻した時、信じられない者の気配を感じ

た。

明莉もマリも靈感はない、幽霊は一度も見た事がない。

街中でユウが顔色を変える時があり、その時は側にいるらしい。

だがソレは、剣の達人レベルのマリには、見えなくてもその気配を感じる事が出来た。

その男はマリの側に悠然と立っていた。

当世具足、張子を付けた当世兜を被り胴丸を身につける。

その顔は真っ黒な霧のようになって表情は読めない。

ただ二つの赤く丸い光る目が、こちらを向いていると感じる。

「あんたは……ユウが自分に憑いている、と言った悪霊か？」

表情は読めないが、悪霊が苦笑したように感じた。

「お主かなりの腕前じゃな。私の姿を気で感じて存在を把握しておる。相手の感情を読める者など、この世にはもうおらんと思っておった」

「そんなことよりユウが目覚めない。どうしたんだ？」

「ふむ、どうやら先の後悔、八手を守れなかった事を反省する余り、己の限界を越したようじゃな。数十もの強力な霊に身体と魂を占拠されておる」

「ばかな、マリがあの時、ユウを責めたからか？どうすればいい？出来る事ならなんでもする、マリの身体はおまえにやる、だからユウを助けてくれ」

「心配するな、小さな戦人よ。ユウを守るのは私の役目……だが」

「だがなんだ？なにか問題でもあるのか？」

「いや、いい仲間に恵まれたものだけじゃ。寂しがり屋のユウには宝であろうな」

悪霊が見る先にヘリが近づき、扉が開き、明莉が身を乗り出す。

「マリ、そっちへ飛び移るからキャッチして！」

「ばか、十メートル以上あるぞ！」

マリの言葉が終わる前に、ヘリからダイブする明莉。その身は作業用ステーションまで届かない。爆発的に力を起動するマリ。一気に

明莉へと飛び込み、その身を掴んだ。

落下する二人の身体。マリが柵に結んでおいてロープ引く。落下が止った、振り子のように左右に身体を移動して、再び反動を使いステーションへと飛び乗る。

「見事！」

ステーションに着地したマリは、明莉の下敷きになりながら、悪霊の褒め言葉に、右手を軽くあげて答えた。それから自分の上に重なる明莉を睨む。

「この……無理しやがって！おまえが一番バカなんじゃないか？顔をあげた明莉がマリに抱きついてきた。」

「怖かったよ……マリ、メチャメチャ怖かった……」

マリの顔が真っ赤になる。

「分った、分ったから離れる！人が見ている！」

「だって怖かったんだもん。降下用の器具が無いから、飛び降りるかなかったし、一刻を争いそうだったしね。マリなら、なんとかするって思ってたけど。ところで、誰が見ているの？ユウの意識が戻ったの？」

「正確には人ではないが……見てるんだよ、悪霊がこっちを」

赤い丸い目を二人に向けている悪霊は、明莉には感じられないようだ。

「大丈夫だ、我は恋愛には理解がある、おなご同士でも別にかまわんぞ。戦国時代は小姓と恋仲になる武将もおった」

ますますマリが顔を赤くした。

「あれれ？なんで顔が真っ赤になったの？本当に私の事好きなのかしら。いいわよ、私もマリなら……」

急いで明莉を振り払って立ち上がった。

「お前らは、なんて事を言っているんだ！マリはごくノーマルだぞ！」

「ハハハ」

楽しそうに笑う明莉と悪霊。もう明莉は普通のCool Eyeに

戻っていた。

「そんなにマリをからかうのは楽しいのか？」

「そうね、マリをからかうのは、私の数少ない良い趣味だと思うわ。でもマリならいいと言ったのは本当よ。さて、どうこの状況を打開するか。まずはユウを起こさないと」

マリに悪霊が手振りで、少し離れろと伝えてきた。

マリは考え事をしている明莉を抱き、急いで出来るだけ悪霊から距離を取る。

「あれれ？ やっぱり本気なわけ？ マリ、嬉しいけど今はやばいんじゃない？」

「バカは黙ってる！」

明莉を胸に抱いて、小さな背中を悪霊の方向に向け、マリは衝撃に備える。

悪霊は二人が離れたのを確認してから、紅の脇差しを抜いた。

鞘は目を引く臙脂色。握る柄の部分も橙色。その刀身は白く輝き光りを放つ。

抜いただけで強力な力を感じる紅の刀。

紅刀を両手に持ち替えた悪霊は、真つ向上段から、倒れているユウに刀を振りかざす。

刀がユウの身体を通り抜けた、その時、もの凄い叫びが聞こえた。

「この娘に仇なす者共、この娘より去れ！」

悪霊の気合いで、ユウを中心に衝撃波が放たれた。

ユウに憑いていた霊が、数十体はじき飛ばされ、叫び声が辺りに広がったりつむじ風が起る。

「何？ この冷たい風、この声は！？」

「黙っている、何も見るな！何も聞くな！」

飛ばされないようにマリは明莉を強く抱きしめる。

目と耳を塞ぎ、怨念の声と風から逃れようとする明莉。

怨嗟の声と風は数分続いた後、徐々に弱まりそしてフツと消えた。

目を覚ましたユウが頭をかきながら呟く。

「この前に交霊やった時は、百くらい同時にいけたんだけどなあ」  
悪霊が刀を紅の鞘に収め、ユウを見た。

「ユウ、確かに古い霊には、神に等しい力を持つ者もおるが、本来死んだ者を恐れる事は無い。死んだ者を恐れるのは、その人間の良心じゃ。人を殺したり騙したり、相手に悪いことをしたと自分の良心がその者を苦しめる。死んだ者に相手をとり殺すなど出来ん。だが生きている者は別だ。生き霊は恐ろしい。殆どが無意識で放つ負の波動は、人を病気にしたりする。そして死んだ者ならば供養でもお被いでも出来るが、生きている者を殺す事は出来ない。近くの間が無意識におまえを呪っていたとしても、それだけでその者を殺せない。気をつける事だ、真に恐るべきは、生ある人間であると」  
「分ったわ、気をつける」

ユウの言葉に悪霊は頷いた。

「ユウ、おまえがいつも言ってる、悪霊ってそこにいる人か？」  
起き上がったマリが近づいてくる。

「そうだけど、まさか……マリには見えるの？」

「見える、というか感じると言った方がいいか」

髪を整えスカートのホコリを払った明莉が頷く。

「そうね、一流の剣士のマリは戦う相手の動きを読む力がある。その時に感情のリンクを行うの。ユウの悪霊の霊力が強くて、マリがその姿をイメージできるくらい、強いリンクが起きたみたい」

「そうみたいだ。そして今感じる悪霊は、私が想像していた者とはまったく違う。その人の発する波動は、軍神のような揺るぎない武の力を感じる」

マリの言葉で悪霊を見たユウ。

「あんた実は偉い人、いや霊だったの？」

「さてどうかの。だいたい偉い人とはなんじゃ？」

「世界の英雄、チンギスハン、シーザーとか。身近なところでは、あんたの知っている戦国武将、徳川家康、武田信玄、織田信長、あと伊達正宗なんかどうかしら？」

「……そうか。ユウは力が残す歴史こそが、絶対と言うか？」

「違うの？だって、凄いことでしょう？何千、何万つて人々を率いて国を造り治めていく。結局、歴史の結果でしか判断出来ないじゃない。負けたら終わり。勝ち続けた人が英雄と呼ばれる、それが偉い人よ」

「後生では英雄と呼ばれる者も、その時代ではただの人殺しかもしれん。一人の英雄が現れる度に、たくさんの戦が起こり、たくさんの民が泣くことになる」

「ふ〜ん、本当に悪霊さん、そこにいるみたいね」

ユウの独り言を聞いていた、明莉が話しかけてきた。

「とりあえず、ユウが回復したようなので、八チの搜索を続けたいのだけど？」

ユウは明莉に交霊が失敗した理由を話す。

「多すぎるの、とにかく入ってくる霊が多すぎてパニックになった。そこにつけ込まれ、生き霊に憑依され意識を失ったの」

「うん、上から見ていても、その事を感じていたわ。だから探索するポイントを絞る」

ヘリから飛び降りた時に大事に抱えていた、タブレットPCを開けて電源を入れる。

「裏DBを検索して情報を確認した結果、八チがいる場所、つまり九条の居城は、この三区に絞られる。その中でビルの借り主を検索した結果、約二百件がヒットしたわ」

「なんでそんなに一杯あるんだ？九条つて金持ちなのか？」

マリの妙な感心に首を振る明莉。

「バカね。本名で暴力組織が、事務所を借りたり出来るわけないでしょう？偽名が普通だし、その名前も数多くあるわ。だからこまでしか絞り込めないの」

頷いたユウ。

「分ったわ、一件ずつやってみる。人数が多かったらフロア毎になるけど」

「お願い、時間が無いけど、今はこれしか方法がないの」

時間が掛かりすぎる、明莉は不安を抱えていた。へりの燃料も少ない、朝までに八手を検索する作業を終えられるか？それまで八手は無事なのか？

「八手の探索は一気に行えばよい」

悪霊の言葉で、ユウとマリが振り向く。

「だからね、出来ないの！私が交信できる生き霊は十が限界。それを越えると身体を乗っ取られる。あんたもさつき見ていたし、危険だと言ったじゃない」

ユウの言葉に頷く悪霊。

「ああ、そう言った」

「何か、策があるみたいですね」

「ええ？まさかのマリの丁寧語？わたし初めて聞いた……」

「さつきも言ったが、この人は高い位の方だと感じた。古き時代の立派な武将だったのだろう」

「はああ、こいつが高い位？私の恋路は邪魔するし、ゲーム好きなこいつが？」

「ゲームが好きでも武将の価値には関係無い。ユウが男に振られるのは、おまえに魅了が無いだけだろ？」

「なんですって！マリ、勝負するか！」

エキサイトするユウをたしなめる悪霊。

「落ち着けユウ。マリと言ったか、我は策など特に持ってはいない」  
「なに〜それで偉そうにしてるか〜！」

興奮気味のユウの頭をポンと軽く叩いた悪霊。

「落ち着けと申しておる。八手が心配なのは分かるが、焦りは敵の手中にはまるだけじゃ」

その言葉にハツとしたユウ。

「策は無いが、今度は皆でユウを支える。無論、我も含めてな」

「ちよつと、ちよつと、二人で何盛り上がっているの。あ、三人ね。で悪霊さんは何て言ってるの？」

ユウとマリは、悪霊の話をも明莉に伝える。

「……なるほど。私も心の中では焦っていたわ。その辺が伝わったのかな」

ユウとマリが自分たちも同様だと頷く。

「それじゃあ作戦だけど、悪霊さんの力でユウの霊格を上げる。高い霊格により不浄な霊は弾く。それで一度に数千の交霊をする。そして検索した情報の整理を私がする」

少し思案した明莉が頷いた。

「この作戦で行きましょう。もうへりの燃料もギリギリだし、うまくいけば一分程度で終わる。ただ、私だけでは、数千の生き霊の情報から、八チのものだけを取り出すのは無理ね」

「大丈夫、私も手伝う」

「悪いけどマリだと計算の邪魔にしかならない。ふう〜しょうがないわね。あの子に頼むしかないか」

「あの子、今から誰かここに呼ぶのか？」

マリの問いに首を振る明莉とユウ。

「違う、明莉は咲夜の事を言っているのよね？」

「そう、私の双子の妹の道明寺咲夜を呼び出す」

「いいのか？」

マリが短く聞いた。

「妹がおるとは何事なのじゃ？」

事情を知らない悪霊がユウに聞いた。

「うーん、今は私からは言いにくい。後で話すよ」

「いいよ。本人がいない場所で、話されるのは嫌だわ。例え相手が悪霊さんでもね」

「その悪霊さんは、無理には聞く気はないって、言ってるけど？」

「あら、ありがとう悪霊さん。でも今回は、妹が暴走する可能性があるから、事情は知ってもらっていた方がいいわ」

「悪霊さんは、そういう事なら聞くなって、言ってるよ」

ユウの言葉に頷いてから、明莉は話し始めた。

「私は母親のお腹の中にいる時、双子として生を受けて育っていた。でも成長して人の形になった時、妹は吸収されて私は一人になった。妹は身体を無くしたけど、脳は私のものと混ざり残った。医者が私の頭をスキャンすると、マーブルチョコレート溶かしたように、グニャグニャに二つの脳幹と神経繊維が、混ざり重なり合っているそうよ。これで生きているのが不思議だとね。子供の頃はモルモット扱いだった。それが嫌だった私は、普通の子供、いや優等生を演じるようになった。検査で見つかるのを防ぎたかったから。妹の咲夜が生きている事をね」

「ふむ、それでおまえからは、二つの心を感じるのか……と悪霊は言っております」

「悪霊さんから見れば、脳なんか見なくても直ぐに分っちゃうのね。私の脳は妹と二つ分あって、何かを考えたり覚えたり、身体を動かしたりを同時に行える。PCの頭脳であるCPUは、最近は複数を一つにまとめたマルチコアが多いけど、理屈は一緒ね。ネットで調べ事をしながら、ファイルのダウンロードが快適に行える、そんな感じかな？勉強しながらマンガが読めるし、戦いでは防御に徹しながら、全力で攻撃が出来る。私の脳はマルチブレイン、妹の咲夜と同時に思考が働き、この身体に同時に命令を発行出来る」

「二つの事を同時にできたら便利だの……と悪霊さんは言ってます」「そうね、便利かもね。でも二つ問題があるの。一つめは、咲夜は普段はおとなしく、私と心を同居させてくれる。でも私が興奮したり意識が無かったりすると、咲夜は表面に現れる。その後は、まるでバーサーカーが暴れたような状態になるの」

「ふむ、普段、抑圧された心、そして人間として、この世で認識されない事への苛立ち……と悪霊が言ってます」

「咲夜は生きているのに、私だけが生きていると世間は認識する。そして臓器的に見た場合、咲夜は思考するだけの器官。身体の痛みや疲労はまったく感じない。身体との接合は私の脳のみがされている。痛みも疲れも知らない咲夜は、無邪気にこの身体を酷使する。」

筋肉が裂け、骨が折れても嬉しそうに……二日も三日も血だらけで遊び続ける」

「それで、あの薬品が必要なのね。あなたの家に行った時にあった、精神薬や身体の強化剤」

「そう、強化しておかないと、咲夜が現れた時に、咲夜の遊びに身体が持たない。脳や神経も同時に二つの命令に、神経系統が直ぐにオーバーヒートする。咲夜の暴走がいつ始まるか、この身体と神経がいつまで持つのか、その二つがマルチブレインの問題なの」

「脳が疲れるまで、火事場の馬鹿力を発揮するのか？……と申しております」

「ええ、咲夜が暴走する様子を見た両親は驚いたらしいわ。私は意識が無かったけどね。私の父親は世間では結構有名な霊媒師。大きなお寺の住職なの。まあ、その霊力はユウとは比較にもならないけどね」

「ユウは血筋だから……と言っております……え？そんなの初めて聞いたわよ！？もしかしてあなた、私の先祖とかと知り合いなの？……本当にこの娘の感の鋭さは、本質をさりげなく触れすぎる……と言っております」

「フフ、その意見は私も同じよ。ユウ、あなたには時々、心の奥を覗かれた様にドキリとさせられる。あなたが力を使えば、人間でも霊でも、心がある者の考えを読むことが出来る。自分に相手の霊を降ろして、心を一緒にするのだから嘘なんかつかない」

「私は無闇に人の心なんか読んだりしない。今回は特別なケースよ」「うん、私も最初にそう言った。あなたに力を使わせるのは嫌だね。ユウとマリは自分の力を、自分の為には使わない。でも私は違うの……」

「何を言っているの？あなたも同じでしょう？」

ユウの言葉に首を振る明莉。

「私は世間から優等生と見られるために、マルチブレインを日常的に使っている。その理由は……」

「化け物と言われ、世間から排除されない為だろうか？」

そこまで黙って会話を聞いていたマリが口を開いた。

「そうよ。私は化け物としてモルモットにされ自由を奪われる、そんなのはもう嫌なの。だからお金と権力が欲しいの」

「おまえが大嫌いな、大人の力だ！」

「ええ、構わない。金と権力で私と妹を守る。そしてあなた達も…

…」

「思い上がるな、自分が否定する矛盾な力を得ても、自分さえ守れない。まして他人を守るだと？笑わせる」

「そうよ！私は弱いわ。マリあなたのように、ピュアに造られなかった」

「造られた…何の事だ？」

「私は金と権力を得るために、世の中の影の部分の情報収集と、それを基に裏DBを作成し、世界の国々へ情報を提供している。その代わりに私が欲しいものを得る。今回のヘリの要請も見返りの一部。けれど一番見返りは深部の世界の秘密。その中であつたB・U計画」  
マリが飛びかかりそんな勢いで、明莉の前に出た。

「それと私が関係あるのか？今まで黙っていたのか、明莉！」

詰問するマリ、その時流れる静かな威厳がある声。

「おまえたちは、八チがいないと仲がうまく保てぬようじゃな。ならば何が今一番大切かは分る筈だ。揉めるのも喧嘩もよいだろ。心をぶつけ合える関係であれば、死地に挑もうとも一緒に生きる道を探せる。だが、失ってしまったら、二度と戻らないものもある。今八チを無くす事は、おまえ達の未来へ選択肢を無くす。まずは今やらねばならぬ事をせよ」

ユウの口を借りた悪霊の言葉が、二人の言い争いを止めた。

「それとマリ。なぜ明莉が今、自分の心境を話したか。情報を得る為に、闇の深部へ進んだのは、明莉の事情だけではない。おまえの過去を明莉は調べようとしていたのじゃ。だがおまえに嘘をついている事が、明莉にとって一番の重荷。今から行う事は、明莉にとつ

ても難しいもの。失敗すれば、明莉の脳は焼けてしまうかもしれない。だから今、おまえに統べてを打ち明けた。自分の心が乱れぬように。まだ所詮十五才、明莉はこの中で一番冷静で、大人でいようとしているだけで、本当は一番脆い子じゃ。それはおまえが一番知っておる」

悪霊の言葉が終わり、身体が戻ったユウの顔を、マリと明莉が真剣な目で見ていた。

「……おいおい、この状況で私にバトン渡すな！こら悪霊どこ行つた！」

シリアスな状態に耐えきれないユウが、消えた悪霊に呼びかけた。

精神を集中するユウ。その身体が再び白い光に包まれる。

「ユウ、恐れるな、皆がいる」

悪霊の言葉に頷いたユウが両手を広げて、千体も生き霊に語りかける。

広げた両手と身体が、クロスの形に輝き、光の十字架を創り出す。東京の輝きと闇の中から、蛍のように霊体が集まってくる。

空気の質が変化していくのが、霊感がない明莉にも感じられる。イオン化した空気はさびた鉄の匂いを微かに放つ。

地上から集まった霊体は、グルグルとユウの周りを回り出した。そして自分呼び出した者の力を値踏みする。

「……なんだ……この娘……我々を呼び出して……」

「……大した力だ……この力があれば……」

完全に幽体の渦に巻き込まれ、マリと明莉の目からユウの姿が消えた。

「……こんな……小娘には……勿体ない……」

「……そうだ……我々で……奪えばいい……」

ユウの力に惹かれた霊体は、その力を欲し、ユウの身体に入ろうとその形を変えていく。

蛍のような光の珠は徐々に球体から、横に少しずつ伸びていく。

一個の霊体がその姿を完全に変化させた。

【鎗】

強力な霊力を持つユウを突き抜け、その身体に入る為に自らを、人を貫く武器へ変えた。

「……この娘の力……強大……だから……」

「……そう……突き刺せばいい……一気に……」

一体の霊体が鎗へと変化すると、ユウの周りを廻っていた他の霊体も変化を始める。

数分後、ユウの周りに浮かぶ千本の鎗。

ユウを囲む全ての霊体は、その姿を尖った鎗に変化させた。

「……前から……後ろから……上から……下から……突き破れ」

千本の鎗は矛先を光の中心、ユウへと向ける。

「……さあ……差し込め……娘の身体と魂に」

千本の鎗が空中を走り、光の筋と化してユウの身体に突き刺さった。

「うう……くっ」

その衝撃は激しくユウの身体を揺らし、苦悶の表情を見せる。

マリがユウの元に駆け出す。それを止めた悪霊。

「待て！マリ。全ての鎗がユウに差し込まれるまで待つのがじゃ」

「でも、ユウが苦しそうだ。あんなに鎗が刺さって……見てられない」

「自分が傷を受けるのは平気だが、仲間の姿を見るのは辛いか？」

ユウの姿を見ている悪霊は、腕組みをして微動だしない。

「見ていてやれ。ユウの事を信じてやれ。先程ユウは、おまえを信じていた」

頷きユウを見る幼き蒼き瞳。

千本全ての鎗がユウに差し込まれた。

「よしいくぞ。マリ、ユウを押さえてくれ」

頷いて走り出したマリが、ユウの両足を支える。

「ユウ大丈夫か？」

千本の鎗がもたらす怨嗟が、ユウの身体を外から内から揺らし、足

下が大きくふらつきだす。

「マリ……」

視線をマリに向けユウが微笑む。

悪霊は意識を失いかけているユウの前に立った。

「ユウ、案配はどうじゃ？」

「もう倒れそう……そろそろ厳しいかも……どうやって……私の霊力を上げるの？」

紅の刀をスラリと抜き、それをユウの前の前にかざす。

鞘は目を引く臙脂色。握る柄の部分も橙色に染めてあり、深みのある光沢を放つ刀。

「……刀は……武士の魂……じゃなかったけ？」

「そうじゃ、他人には決して触れさせない。特におなごにはな」

「……またそうやって……女子差別する……今どきは違うの……」

「男と女は違うもの。どちらがいなくても世の中は成り立たない。」

さあ、この紅刀を握れ」

「……この、男尊女卑め……いいの？あんたの魂……女の私が触つて……」

「おまえが言う“今どきは”は女とて平等なのだろ？さあしつかりと握れ！我の魂を！皆の者よ聞け、我こそは奥州の名門の生まれであり、家門最後の頭領。そしてこの刀は、名工なれど、あえて無名で生きた者が打った刀。その名も紅刀朱音<sup>あかね</sup>」

紅刀の柄を握ったユウの身体へ、刀から純白の光が吸い込まれていく。

大きく呼吸をして、紅刀が出す純潔な息吹を吸い込んだ、ユウの全身に、高位の霊力が巡り初める。

目を大きく見開き、紅刀を構えて勢いよく、右、左と切り返し、上段から縦へと三度振りぬいた時、断ち切られる呪縛。ユウの霊格が急激に上昇していく。

ユウの身体に差し込まれた千本の鎗が振動を始めた。

「……ばかな……なんだこの娘の霊力は……ありえない……」

振動していた千本の鎗は、逆回しのビデオのように、次々とユウの身体から離れ、最初にあった位置へと戻る。そして鎗は姿を変えて、霊体へと戻っていく。

「さあ帰りなさい、悲しき魂よ、悩む心よ。自分の身体へ」

大きく紅刀を振り上げたユウが、斜めに空中をなぎ払う。白い衝撃波が渦を巻きながら空中を進んでいく。霊体は竜巻のように巻き上げられ、雲まで届き東京へと散っていく。

紅刀の切っ先を膝元に下げ、ユウは霊体が散った眼下の東京をしばらく見ていた。

「ごめんなさい。そしてありがとう」

自分の身体から離れ、元の身体へ去った霊体に、お辞儀をしながら感謝を述べた。

「きたわ！」

ユウからの霊体から得た膨大な情報を、明莉と咲夜、二人の霊体がそれぞれ受け留める。

マルチブレイン、明莉と咲夜、二人が可能したスーパーコンピューターを越える演算速度。

二人の脳でユウから得た情報が、驚異的な速度でサマリー（解析・蓄積）されていく。

続いてPCの画面を見て、視覚からスキヤニングを実施、脳内でデジタルデータへと変換する。

「PCから検索候補のビルのデータ、取り込みを完了しました」

咲夜のスキヤニング終了の言葉を受けて、明莉が頷く。

「了解、インデックスの生成を開始する。咲夜、レコードの最適化をお願いします」

ユウから受け取った情報をサマリーし、PCから得たハチがいると思われる、ビルの情報と合わせて高速化する。

「レコードの最適化を完了しました」

「こっちも検索用インデックスを生成完了」

「これより最終タスクを実行する！」

明莉の声と共に、数億個のニューロンを持つ、現在のノイマン型スーパーコンピュータが、足下にも及ばない、超高速のデータマツチングが開始された。

右目は明莉の黒い瞳、左目は咲夜のシルバーグレイ、オッドアイが輝きを強くする。

「これ……明莉、これかもしません！」

「見つけたの？咲夜、どれ？これか……うん、間違いないわ」

「マツチング完了です」

明莉と咲夜が、同時に八チの居場所を探し出した事を伝える。

手を振る明莉の姿にホツとするユウとマリ。

「よかった」

ユウが呟くと目の前に立つ悪霊が、静かに語り始めた。

「先程聞いたな、ユウ。偉い人とは何かと。おまえは歴史に名を残した者。英雄が偉い人だと言ったな」

「ええ、覚えている。勝ち続けなければ意味が無い、負けたらお終いだと。そうわたしは言っただわ」

「そうじゃ、確かに歴史に名を残す者は偉大な者だろう。だが、名も無き者達、主君に従い命を落とす者、愛する者を守って平凡に一生を終える者。それもまた勇者のことわりと我は思う」

「そんなの馬鹿馬鹿しいわ。死んで花実が咲くものか、生きていてこそ的人生よ」

「我の時代は死ぬことで、花を咲かした者も多かった。特に武士はそうであった。今どきは、命を賭ける事は、たしかに馬鹿げた事かもしれない。だが、まるでおまえと仲間のようじゃな？」

「それは……一緒にしないでよ」

「生きる自由があるように死ぬ自由もある。結局はどう生きたかが大事なのじゃ。良き人生であったかは、自分自身が決める事。我は心残りがあった。だがこれで約束を果たせそうだ」

「何を言っているの？……まるで……お別れを言っているみたいよ」

「我がいなくても、布団をかけて寝るのだぞ。おまえは寝相が悪いし、寝ぼける事もある。あと朝も一人で起きられないし、それに寂しがり屋じゃ……」

「こんな時に冗談は止めて。あれほど、わたしから離れなかったあんたが、なぜ今消えるの」

「力を使い果たしたみたいじゃ……これでユウは自由じゃな」

「まって！どうして？なんで弱くなるのあんたの意識……」

ユウの目の前で霧のように薄くなっていく悪霊の姿。

「なぜ感じられないの？あいつの姿が見えない……」

「どうした？なぜ、あの人の気配が消えた？」

ユウに悪霊の存在を確認するマリ。

姿だけではなく、気配も希少になり、ついにはユウにも悪霊を感じられない。

「わかんないよ……あいつの気配が消えたの……突然……あ！」

悪霊の姿が見えなくなり動揺するユウが持った、紅刀朱音から光の粉が蒸気のように立ち上る。

さらさらと光の粉末は東京の夜空へどんどん立ち昇っていく。それに触れたユウが呟いた。

「あたたかい……これはアイツの……心」

目の前から、揺らめきながら紅刀が消え始めた。

「え！？待って、あいつの心が……消えちゃう！」

思わず胸に、紅刀を抱えて座り込む。だがユウの腕の中で紅刀は光の粉となって消えていく。

ユウを中心に強い風が吹き始め、作業用ステーションの上は木枯らしのように塵が舞い始めた。

木枯らしはすぐに止み、緑の草の匂いが微かに広がり始め、心地よい一陣の風が吹く。

「気持ちの良い風ね。少し冷たい……雪解けの春の風……」

明莉の淡い青い色の髪が風に流され、心地よさそうに明莉は両手を広げ、吹き抜ける春の風に乗る。緑の風が吹く中、目映い光が広が

り始めた。

緑の風と目映い光は、目を開けていられないくらい強くなった

一瞬視界を無くしたユウが、再び目を開くと、自分の胸を押さえた  
両手だけが残っていた。

悪霊と紅刀は完全に消えた。

## 進入！異能の力を持つ者

ホバリングしたへりに乗り込んだ三人は、作戦通りに手に入れた八子の居場所を目指す。

しばらく無言だった三人、マリが最初に口を開いた。

「一緒にいればトラブルはあるだろう。戦国の世の武将と現代の中学女子。考え方はまったく違う。だがあの人はおまえを、守っていた。その事は事実だ」

「そんな……アイツは悪霊なのよ。私がついてないのはアイツのせいで……」

マリの言葉に反論するユウが、ハッキリ言えない結論を明莉がつけた。

「ユウは分っているよ。あの人が悪霊ではないことなんてね。ただユウは甘えているだけ。家に帰っていないと寂しがる、たぶん大泣きだね」

「そ、そんな事は無いわ。アイツは悪霊、いなくなっただけはせいせいしたわ」

真剣な眼差しに変わった明莉が、ユウに願った。

「悪霊さんの事は八チが戻るまで我慢して。八チも入れて四人で考えましょう。何か方法があるはずよ」

「だから……わたしは……せいせいするって……あいつ黙って……いなくなっただけ」

ユウの髪を撫でながら謝る明莉。

「ごめんねユウ……」

へりのパイロットから割り込みが入る。

「マルチブレイン、詳細な着陸地点を教えてください」

「……了解、場所を今から送る」

明莉のPCからへりのナビへ座標の転送を開始する。

明莉の心遣いにユウは心を切り替えた。

「分かっている、まずは八チを取り戻す……ついでにあいつも連れて帰る……あくまでもついでだからね」

「うん、ありがとうユウ。必ずうまくいくわ、全てね」  
微笑みを返した明莉の携帯電話が鳴った。

「もうこんな時にだれなのよ!？」

電話に出た明莉の耳に、ヘリの騒音を越えるポリウームの声が聞こえた。

「明莉か!今どこにいる?八チがない。それでユウが探しに出たらしいだが、八チのお母さんは、八チよりユウの事を心配している、おい聞いているのか!」

「まじい、神代先生だよ。どうする?」

「いない事にしてくれと、マリとユウが同時に手を左右に振る。」

「えーっと、先生、今どこにいます?」

「うん?千葉の自宅だが、それがどうかしたか?」

「自宅だと、車飛ばしても一時間以上はかかるわね」

「なに?明莉、おまえ、もしかしてユウとマリと一緒にだろう?それで八チの居場所をおまえが見つけて、これからタクシーで向かうところか?」

「先生はやっぱり素敵、ほぼ正解!野生の勘ってやつです?」

「バカ、おまえらと何年付き合っていると。とにかく俺も行くから、場所教える!」

「先生、本当に今自宅?」

「くどいぞ明莉、俺が嘘をついたことが……あるが、下手なのはおまえも知っているだろ?」

「そうですね。嘘つくとき直ぐ分りますね。じゃあいいですか?場所は東京都XX区XX町のXXビルです」

「えー!何で言っちゃうの!明莉?先生、絶対来るでしょう!?!」  
ユウとマリが驚きの声をあげた。

「だって、私も嘘つくの下手なんだもん」

「もん……って怪しすぎるよ」

ユウが怪しみ、マリが否定する。

「それは絶対に嘘。一番上手だろう。策謀関係は明莉が一番に決まっている」

ケラケラ笑い出した明莉。

「あら、そうかしら？その一番の策謀家の私の計算だと、移動に十分、八手奪還十分、帰宅十分の合計三十分で作戦完了の予定。だから先生は間に合わないの」

「もし、おまえの予定が狂ったらどうするんだ？」  
マリの質問にあっさり答える。

「その時は、急襲で一気に八手を奪還出来ず、乱戦になっているから、先生にも来てもらった方が楽ね。雑魚は倒してもらいましょうよ」

「さすが明莉、そこまで考えるか普通？」

「褒め言葉と取っておくね！マリ。うん？どうしたの、ユウ難しい顔して？」

「明莉、電話代わって！」

「なあに？まあいいけど」

少し嫌な予感がしたが、データ主義の明莉には、天然主義ユウの考える事どうせ分らない。

「はい、どうぞ。みじかくね」

明莉の携帯を受け取ったユウ。

「もしもし、先生」

「うん？ユウか？どうした？」

「先生、B・U計画って知ってます？」

「ええ！」

明莉が一番驚いた。

「なんで、先生に聞くの……はあ、ユウあなたやっぱり、勘が鋭すぎる」

明莉の次に驚いた神代先生。

「えっと、それは何かの略語かな、例えば Brave Union

とか」

「Brave Unionですね！」

チラツと明莉の顔を見たユウ。

「明莉に代わります。先生、待ってますからね。さつき明莉が言った場所に、必ず来てください」

明莉に携帯を戻す。

「先生、さつき言った、素敵は取り消します。まったく余計な知識を、子供達に与えないください。ちゃんと責任を取ってユウとマリに、説明してくださいね。私はBrave Unionなんてまったく知りませんから」

「うーん、やっぱりそこへ行くのは止めようかなあ」

「なにを今更、もう遅いです。本当は来てもらいたくなかったけど、必ず来てくださいね。ただし急がなくてもいいです。一時間半くらいがいい感じですね」

「なんだ？その時間指定は？明莉、またなんか企んでるだろう！あ、分ったおまえ……」

プチ、明莉が携帯を切った。

「まったく野生児も勘が鋭くて困るわ。ということでも八子奪還後に、頃合いを見て私から話そうとしたB・U計画の事は、先生から聞いてね」

「ふーん、そうなの、子供の頃にそんな事があったのねえ」

八子が頷き、一人最後まで残った見張りの男が話を続けた。

「ああ、警察に迎えに来た親の顔を見た時思った。おれなんか、この世にいらぬ人間だな」

「でもねーやっぱり困っちゃうと思うよ。お父さんもお母さんも、おじさんがそんなに、泥棒さんとか、人を叩いたりしたらね」

「頭が悪くて、人付き合いも苦手。家も貧乏なおれには悪い仲間しか出来なかった。いったん仲間になったら、そいつらは裏切れねーだから誘われれば何でもやった」

「頭が悪いのは私も一緒だよー八手の仲間もいろんな事する。でも八手も仲間が大好きなの。仲間がいて幸せだ！と思うよ、おじさんも仲間がいるなら幸せね」

「おまえは善悪に甘い奴だな。本当の仲間だと言えれば確かに幸せだがな……自分たちがの上がる為には、どんな事でもしてきた。例えば人を刺したりもな」

「刺した人、死んじゃったの？」

「いや、死にはしなかった」

「良かったね」

「良くねーよ。刺されたそいつは、おれと同じ、クソみたい奴。死んだ方がこの世の為には良かったんだ」

「ううん、良かったって言ったのはね、おじさんの事だよ」

「おれ？なんでだよ？」

「だって、相手の人が死んじゃったら、おじさん苦しいでしょう？八手を不思議な顔で見た見張りの男。

「おまえ、おれは人を刺したんだぞ……おまえ相当変っているな」

「うーん、みんなにも言われるなあ、ユウなんか毎日一回は八手は変っているって、そう言うよ。なんでかなーおじさんにも言われて、ちよつとシヨックかも……あたし思うんだけど、本当に悪い人なんかいないよ。みんな懸命に生きているの苦しいの。どんな環境でも生きていくしかない。生きている物は全て、自分の死が訪れる時までは、抗い続けるしかないから。神様がそう造ったから」

「……おまえは、本当に変わっているな」

「そーかなー普通だと思うよ。おじさんに、何度も変っている、と言われるとへこむよー」

「やっぱり変っているよ、おまえ……ハハ」

「何をやっている！？」

見張りの男が振り向くと、面長で切れ長のつり上がった目が睨む。

この暴力組織のトップ、九條武巽が不機嫌そう立っていた。

「あ、すみません。つい話し込んでしまって……」

「そうか……」

ドガツ、いきなり見張りの男を殴りつけた九條。その胸には漆黒のネックレスが揺れる。

「す、すみません、九条さん……」

謝る男を何度も殴る九条。

「やめて！おじさんは悪くないよ。私が無理矢理、お願いしてお話していたの！」

九条の前に出た八手が、両手を広げて、見張りの男をかばった。

「い、いいんだ……おまえは下がってる」

口から血を流す男が、八手に言ったが、首を左右に振りそれには従わない。

九条は右手を八手に振り上げる。

「フツ、じゃあおまえが、この男の代わりに殴られるか？」

八手は両手を広げたまま、瞬きもせずじつと九条を見つめる。

見張りの男が腕を伸ばして、目の前の八手を引き寄せ、自分の胸へと引き寄せた。

「一体なんのつもりだ？」

八手を九条から守る態勢をとった見張りの男。

「すみません、おれを殴ってください。九条さんの気が済むまで殴ってください。でもこの子には手を出さないでください。お願いしますから」

九条は見張りの男の腕の中から、真っ直ぐに見つめる大きな瞳をしばらく見ていた。

「いいか、俺達は、表の社会でつまはじきにされた。だから裏の社会で生きると決めた。今更、その娘のひだまりの暖かさを求める事は出来ない」

八手は首を横に振る。

「そんな事無いわ、誰だつて覚えているよ、揺りかごの中で、何の心配もしないでいられた時。ひだまりで、お母さんの眼差しを感じ、安心して眠りついた頃の記憶を……」

「俺にはそんな覚えは無いんだよ。母親の腹の中で、俺は親たちの喧嘩の罵声を聞き、生まれても放っておかれた。親父に殴られ飯も貰えずに、何度も死にかけた。人間の世界は、仏教では地獄に入るらしい、まさしく親が子供殺す、子供が親を殺す、この世界は鬼が住む地獄だ」

八千は九条の言葉を黙って聞いていた。

「だが人間を鬼に変えるのは、悲惨な環境ではない、絶望だ。この世界で必要とされていない者が持つ、明日が見えない絶望の日々。そして鬼となる、全ての不安から抜け出す為に牙を生やし、暴力を言葉とする」

八千が何か小さく呟いたが、興奮気味の九条には聞こえなかった。

「そしておまえみたいなのが、その鬼すら、さらなる絶望に墮とすんだよ。見るその男を、おまえの暖かさに情を思い出している。鬼が情を持ったら、死しか待っていない。牙を失った鬼は、仲間に食われるか、人間に殺される運命なんだ」

今度は九条にも八千の声が聞こえた。

「かわいそう」

「クク、そうだな、かわいそうだな。こいつが今ここでおまえに逢った事、ぬくもりを感じている事は、こいつにとっての不幸だ」

九条の言葉に首を振る八千。

「違うわ、あなたが、かわいそうなの」

「なるほど、俺か。人はそう決めつける。不幸な境遇、かわいそうな人生。何が分かる、おまえによ？おれは感謝しているよ、そのかわいそうな人生を送れた事にな。こうして強い力を持てたからな」

「かわいそう」

繰り返す八千の言葉に、怒りを表に出す九条。

「クソ、おまえと話しているとイライラしてくる。とりあえずその口をきけなくしておくか」

近づくと九条を、恐れもなく怒りもなく見ている大きな瞳。

「それか……その大きな瞳を潰すか」

見張りの男が九条から、隠すように八手を自分の背後に廻す。  
「フツ、まずはおまえからか。いいだろう、後で後悔するなよ」

八手が捕らわれているビルから、数百メートル離れた空き地に着陸したヘリから、三人が急いで飛び出す。

「ここで待機していて。誰かに見つかったり、三十分しても、私達が帰らなかつたら、帰還して頂戴」

頷くパイロットに手を振った明莉。

「よろしくね！さあ、行くわよ、ユウ、マリ」

走り出した三人は、数分で目的のビルまでたどり着く。

「よし！いく！」

マリの言葉にユウが元気よく応える。

「よっしゃあゝ！一気にやっちゃまおう！」

正面玄関から進入しようとする二人の頭を、ガツチリ掴んだ明莉がため息を漏らす。

「あなた達、さっき私が言った事、完全に忘れてるでしょう？」

「え？何か言ったけ？」

マリがユウに聞いた。

「さあ……でも、このズキズキする頭の痛さだけは、覚えがあるよ  
うな気がする」

さつきより一段と大きなため息をついた明莉は、グツと両手に力を加えた。

「こんなバカな頭は潰しても問題なさそうね」

「イテテ、明莉の馬鹿力め……うん？なんかこんな事が前にもあったよな」

「そうね……デジャブ現象かしら？」

「いいえ、あなた達が、バカなだけです。いいかな？正面から入れば、組織との全面対決となり、乱戦になります。ここまではいいですか？」

うん、うんと頷く二人。

「乱戦になった場合、相手はもしかした拳銃とか、使用するかもしれません。バーン！って弾が飛んでくるわけですね」

「別に回避すればいいだろう？そんなの。イテテ！」

「マリはそれでもいいかもしれないけど、私とユウは拳銃の弾を回避なんて出来ません。ましてや八手には確実に当たります。分りますか二人とも？」

無言で話を聞いている二人を、グツと自分の顔に寄せた。

「You understand?」

うん、うんと頷く二人から手を離す。

「だからね急襲でいくの。ユウに詳細をスキャンしてもらい、八手にいる部屋を確定後、部屋に直接、もしくは最短距離で侵入する。誰かに見つかったら、相手を速やかに無力化。そうね、ユウが魂を抜くか、マリが叩いて気絶させる、もしくは私が絞め技で気絶させる、そんな感じかな」

「なんか面倒……」

マリの頭をグーで叩いた明莉。

「なんか、この痛みも前に感じた事が……」

「デジャブ現象かしら？」

二人の会話を聞いて益々力が抜けた明莉。

「えっと……とにかくユウ、八手にいる部屋のスキャンをお願い」

「はい、ちよっとトランス状態に入るね。数人の霊を降ろして聞いてみる」

「あと、アイツの居所もお願い」

「アイツ？」

「九條の居所も探っておいて。アイツだけは、私の予想に収まらないわ」

十分以上、見張りの男を殴り続けた、九條の息が上がる。

「くそーなんだっていうんだ！？おまえは、根性なんか無いんだよ。早く俺に詫びて、その子を渡せ！」

「もうやめて！本当に死んじやうよ」

「もうこうなつたら止められない。意地を通すなら死ぬ事になるぞ」  
九條の言葉に八チが男の前に出ようとす。それを止めた男は、歯が折れ唇は腫れ、喋る事さえおぼつかない。だが、八チを守る強い意志は揺らぐ事がなかった。

「そうか、おまえにそんな、根性があるとは知らなかった。中学生に惚れたか？」

九條がジャケットの裏ポケットから、大型のナイフを出す。

「だめーおじさん。ここ通して刺されちゃう」

自分の背に隠した八チの言葉。それでも微動だしない。

「いい……んだ……前に……人を……刺したから……これでイーブンさ……」

八チは九條を見た。

「私が嫌いなら私を刺せばいいだけだよ。このおじさんは関係ないでしょう？」

九條はナイフを構えて近づいてくる。

「もうそんな問題じゃねえ。裏の世界では舐められたら終わりだ。

飼い主の命令を聞かない犬はいらねえのさ」

「そう……おれは……犬なんだよ……だから刺されても……気にする事は……ない……」

「そんなのは絶対駄目！」

「いい根性だな、刺されてからが楽しみだ……うん？なんだ……この感じ？」

部屋の空気の質が変わっていく。淀んだものが清々しいものへと変わっていく。

薄暗かった部屋は徐々に明るさを増して。光が満ちていく中で暖かさが身体を包む。

「これが……クシテイ、おまえが言ったひだまりの記憶か？」

九條の問いに瞳を閉じた八チが答える。その顔つきは全てを許す慈愛と威厳が溢れていた。

クシテイ・ガルバ……ハチが身に宿した、ことわり。

「これがあなたの真に望んだもの。例え現世で経験する事は無くても、前世であなたは感じたことがあるはず。人は死に、生まれ変わり、新しい道を進みます。でも根本に残る記憶は消えることはありません。ひだまりに包まれた記憶、親の愛情を感じた記憶、無邪気に笑った記憶。それらは生きる者全てが持つ、生きる為の根幹の記憶なのです」

表情と口調が変わったハチを見る九條。

「これがハチの正体……真の姿クシテイ・ガルバ。神の力か」

九條の言葉に、瞳を閉じたまま静かに微笑む、クシテイ・ガルバ。

「私に力などありません。出来る事はただ一つ。あなたと一緒にいるだけです。それが地獄でも構いません。あなたが地獄に生きると言うなら、私は一緒に地獄へ墜ちましょう」

「おまえは全てを捨てて、おれと地獄へ行くと言うのか。そんな事は、偽善者の言い逃れだ。

どうせ、おまえはこの男を助ける為に、私を殺しなさいとか言うのだろう？おまえの仲間達が来るまで、俺がおまえには手を出さないとタカをくくつてな。そんなもんは、おれには関係ない。その男を殺してから、おまえの首を切り取ってやる、それをアイツらに見せてやる！」

「あなたがそう望むなら、そうすればいいでしょう。私には止める力などないのですから」

日差しはまるで昼間のように部屋を照らし、流れる空気には草木の緑の匂いが立ちこめる。

「これはなんだ、力が抜ける……」

九條は急に身体から力が抜けていくの感じた。

「くそーなんでだ、なんでこんな時に眠くなる！？クシテイおまえの仕業か？」

「あなたの魂が疲れているだけです。心が休息を欲している。今は眠りなさい。私は何処へも行きません。あなたが目覚めるまで側に

います」

「馬鹿な……おれの魂が休みたがっているだつて？……そんな事は……ない……絶対に」

その場に崩れ落ちた、九條と見張りの男。

深い眠りについた二人の男は、今は怒りも痛みも忘れ寝息を立てる。八チが目を開いて、ヘナヘナとその場に座り込む。

「あーよかったよ。でも私も……眠くなった。ふああ〜」

二人の男の側らで眠り始める八チ。

部屋の中はひだまりと緑の匂いに満たされ、風は優しく八チの髪を撫でる。

背中より長く伸びる緑色の髪が、まるで風を受けた草原のように揺れていた。

光の十字架が再び再現し輝きを強める。

ユウが交霊を行う時、その全身は白い光に包まれる。

両手を広げたユウの姿は、その荘厳さも合わせて、まさに聖なる十字架のように見えた。

八チが拉致されていると思われる、このビルに存在する生き霊と会話が始める。

会話と言っても、自分の身体に霊を降ろして、意識を共用し記憶をスキャンする。

かなり強い霊力がないと、次々と憑依する生き霊を、自分の身体に入れては外す行為を繰り返すなど出来ない。しかも、霊一体でも莫大な記憶を持っている、その中から必要な情報だけを取得するのは、経験も必要とした。まさにユウのみが行える異能力。

「……いた！見つけたわ！」

二分程でその大変な作業を終えたユウが、霊体を通して明莉にその情報転送する。

「情報が来た、ちょっと待って。こここの二階の一番奥の部屋ね。そこに八チがいる。ビルの見取り図とマッピングを開始する」

PCで図面データを見ている明莉。ユウからの情報と、PCで表示されるビルの見取り図を合わせて、正確なナビゲーションを行う。「この部屋は窓が無いわね。最短は……二つ離れた部屋の窓。そこから入るのが良さそう。」

ユウ、今その部屋に人はいる？」

「ちよつと待つてね！」

再度、光の十字架で情報を再度検索する。

「進入しようとしている部屋は、今は誰もいないみたいね……あと、九條の霊体はキャッチできない」

「分ったわ。ユウご苦労様」

明莉が頷き、ロープをマリに渡した。

「あそこの窓から入るから、このロープを結びつけてきて」

「分ったけど、窓についている鉄格子はどうする？いくら私が、ちっちゃく……でも、あの隙間からは入れない」

「え？なんだって？マリが何？聞こえないわ」

「ちっちゃくても入れない……もく自分で言っちゃったじゃないか！」

明莉は意地悪だと呟いてから、軽々と二階へ飛び上がり、マリは鉄格子の太い鉄の棒にロープを結びつけた。

「あの鉄格子は、これでマリに切ってもらっわ」

マリが二階の窓から飛び降りた時、明莉が取り出したのは刀。でも刀には刀身が無い。

「それ刀身がついてないじゃないの。握る部分だけあっても役に立たないわ」

ユウが不思議そうに呟く。

「これが重さの無い刀“朧”（おぼろ）よ」

「重さがない？そんなものは世の中にあるわけないわ」

ユウの言葉に明莉が解説を始めた。

「宇宙の初期の状態で、素粒子は自由に動きまわることができ、質量がなかった。しかし自発的対称性の破れが生じ、真空中に相転移が

起こった。真空中に、ヒッグス場の真空期待値が生じ、素粒子がそれに当たって、抵抗を受けることになった。そして素粒子の動きにくさ、すなわち質量となる。つまり重量とは、プールの中に物質が沈んでいるように、水の抵抗を受けて重さとなる。そのプールの水”ヒッグス粒子”と反発する粒子が理論的に推論された。その推論を基に“反ヒッグス粒子”を集積してコーティングに使用する。理論上は重さが無くなる」

ユウだけじゃなく、臙の持ち主であるはずのマリも、ポカンとしている。

「やつぱり、あんた達には難しいか。えーとね、雨の日に傘を差さないで歩くとする。服は直ぐに濡れて重くなるよね。それは服が水を含んだから。でも防水加工を施せば、水を吸わずに服は重くならない。臙には防水加工がされているわけ。それで重力を弾いているから、重さを含まないの。この説明なら分った？」

「なんか、明莉に騙されたような感じはする……」

二人の答えに、それで十分だと頷く明莉。

「ところでこの臙って刀に、刀身が無いのはなぜ？」

「ああ、刀身は折りたためるのよ」

明莉が臙を上差し上げ、一気に右下に振り抜く、スラリと刀身が姿を現した。

「はい出来上がり。持ち運びに便利でしょう？」

「持ち運びに便利はいいけど、こんなおもちゃみたいな刀で大丈夫なの？刀身なんか薄いしペナペナじゃない」

「うん、私達なら、おもちゃの刀の方が役に立つわ、でもマリにはこれが最高の武器なる」

「なんで？それなら、そんな難しそうな理論を持ち出さなくても、おもちゃの刀でいいじゃない？」

「まあ、見てて。はいマリ、臙を渡すね」

明莉から臙を受け取ったマリは、柄の部分を両手で掴んで目を閉じた。

ポオオツと刀身に蒼い光が入り、ユウラユウラと蒼炎が立ち始める。「ええ？何この光は？……揺らめく蒼い炎はどこから出ているの？」この光、揺らめく蒼炎は、マリの持つオーラが、コーティングされた粒子に反応しているの。マリのオーラはこの世界には存在しない、特別な蒼い色。蒼いオーラとコーティングされた粒子の反応により、朧は大幅に強度が増加する。硬度はダイヤモンドを凌ぎ、柔軟性は風にしなる竹のように。これは狙ったわけではなく、偶然の組み合わせらしいけど」

「ダイヤモンドより固くて、竹のように柔軟って、そんなものが……」  
「二人ともさがって。いく！」

マリの言葉に従い、二人は会話を止め後ろに下がる。露出を開けっ放した星の写真のように、蒼炎を放つ朧の光の軌道が、何重と重なりながら、蒼い光の真円を空中に何度も描き来だした。

「もう、動いていい」  
マリの言葉で明莉が、ビルの二階から地面に垂れているロープを拾った。

「さあ、ユウ上るわよ！」  
スルスルと上る明莉の後を、懸命についていくユウ。

「キツイ〜やつぱり、私の体力は中学生の平均の下だわ……」  
たどり着いた二階の窓には、鉄格子が填ったままだった。

「なによ！全然切れてないじゃない！」  
「ユウが切れてどうするのよ。大丈夫ちゃんと切れているわ」

明莉が鉄格子の一本を握ると力を込めた。するとスツと、音もなく手前に鉄格子が外れた。

「おお、切れてる！切り口がツルツルね」  
「あまりに素早く、薄く硬度の高い刀で切ったから、力を込めないとくっついたままなのよ」

鉄格子を三本ほど外した明莉が、下にいるマ리에聞いた。  
「窓のガラスは？」

「大丈夫、切つてある」

頷いた明莉がスカートをめくり、内ポケットからガムの包みを幾つか取り出し、全部を口に含んだ。

「あんたのスカートつてド エモンみたいに、色んな物が入っているわね」

ユウが感心していると、明莉が口からガムを取り出し、ガラスに貼り付けた。

それからトントンとガラスを叩く。ポコと真円に切られたガラスは簡単に外れた。

ガムのおかげで下に落ちなかったガラスを、慎重に取り外す明莉。

「あんた、立派な泥棒になれるわ」

ユウが変な感心をしていると、明莉が切り取ったガラスと鉄格子を渡して寄こした。

それから開いた穴から中へと入る。

「中はどうなの？大丈夫、明莉？」

返事の代わりに、穴から明莉の手が、ニユウと伸びて手渡せと手招きする。

その手に鉄格子とガラスを渡すと、いったん引つ込んだ手がすぐに入れと手招きする。

「さあいくぞ！ユウ」

一気に二階に飛び上がったマリが、ユウの肩に手を置いた。

「助かった、どうやら間に合いそうだ」

深夜の空を飛ぶジェットヘリ、時速400キロ以上の速度を出している。

「もうすぐ指定の地点へ到着します。戦闘の準備は大丈夫ですか？」

「ああ、これがあれば大丈夫だ」

「あなたにはいらぬ心配だと思いますが、そのバンブー材で出来た剣では、相手を倒せないのでは？我が社の近接用武器もお貸しできますが」

「いや、これで十分だ。ところで臙はマリの手に届いているか？」  
「ええ、マルチブレインから要請があつて、昨日お渡しています」  
パイロットの言葉に少し安心して外を見る。

「おや？」

「どうした？」

「どうやら、あなたの教え子は、既に到着しているみたいですね」

「アイツら、ヘリをチャーターするなんて、なんて中学生だ」

「フフ、そうですね。あのヘリとは、まんざら知らない仲でもない。  
危険はなさそうですね」

「じゃあ、あのヘリの横に並んでつけてくれ」

「わかりました」

ユウ達が乗ってきたヘリの横に着陸した直後に扉が開き、地上に降り立った長身の男。

その手には一振りの竹刀が握られていた。

「さて、どうするかな？」

明莉が進入した部屋から、廊下の様子を伺う。

「三人いるわね。見張り」

ユウの言葉に頷いて、マリが提言する。

「ぶっ飛ばすか？」

「扉を開けて三人か。ちょっと離れすぎているなあ。騒がれたら面倒ね。何か良い方法は……うん？何か下が騒がしい」

明莉の言葉に廊下のスキャンを始めたユウ。

「見張りの三人も、一階に移動したみたいね」

ユウの言葉に、明莉が決断した。

「よし行くわよ。目標は二つ奥の部屋」

頷いた三人は、扉を開けて一気に走り出す。

「八手、無事でいてね」

三人は祈りながら、目標の部屋の扉の前に立つ。

明莉がドアノブに手をかける。

「あれ？鍵が開いている……」  
「いい？開けるよと、二人に視線を送った明莉。  
扉を開くと同時に、マリが部屋に飛び込み、朧を構えて臨戦態勢に  
入る。」

続けてユウ、明莉が部屋に入る。

三人の目に、信じられない状況が映し出された。

「バカなこんな事が……」

ユウが床に膝を落とす。

「八手が……」

目の前に血だらけで倒れている八手。その側には、見知らぬ男と九  
條が倒れていた。

「いやああ八手！」

ユウが半狂乱になって、倒れている八手の所へ走る。

「八手ごめん。また私あなたを守れなかった……」

八手を抱えて泣きじゃくるユウ。明莉が八手の状態を確認する。

「ユウ、ねえ、ユウ」

「うあーん、八手ごめんね」

「寝ているだけみたいよ」

「うああん。八手が死んじゃった……え？寝てるって？いったい  
どうゆう事？」

「出血してないし、心拍も脈拍も安定している。この血はこの男の  
ものね。呼吸も深くてゆっくりとしている。そしてこの顔は……楽  
しい夢を見ているわね」

顔を緩まして寝息を立てる八手が寝言を言った。

「マリ、お腹いっぱいよ……もう食べられないよ……明莉怒っちゃ  
駄目だよ……ユウまだ帰りたくないよ……」

八手をギユウツと抱きしめ、その頬に顔をすり寄せる。

「バカ、心配させて、八手なんか嫌い」

大粒の涙が八手に顔に落ちた。ユウの髪を撫でる小さな手。

「私の事嫌いなのか？」

目を覚ました八チが、泣き続けるユウの髪をなで続ける。

「嫌い。心配かけるから」

「じゃあ、どうしたら好きになつてくれるの？」

自分の髪を撫でる、小さな手を掴んで八チを見た。

「ずっと、私と一緒にいる事。八チは、私や明莉やマリと一緒に年を経るの。中学を卒業して高校へ通い、その後、短大か大学へ行く。勉強は明莉が教えてくれるわ。学校を卒業したら、どこかの会社に勤めて、二十歳を過ぎたら四人で朝まで飲みながらカラオケするの。それから結婚してね。あ、彼氏は私に見せてね、ちゃんと霊視してあげるから。それで子供を産んで、子育てするの。子供が大きくなつたら、四人で温泉行こう。旦那と子供の愚姉と惚気をみんなで話すの。そして私達の子供にも子が生まれる。四人ともお婆ちゃんになるのよ。窓際の小さなひだまりの中で椅子に座り居眠りをしながら、静かに時を過すの。そして百歳になったら、四人で世界一周をして、その後に私は海の見える場所で、三人に見取られて息を引き取るの。明莉とマリも同じくらいに逝くから、八チはみんなを見送るのよ。いい？一杯泣くのよ？私達のためにね。だから私達より先に死んじゃいけないの。絶対八チは長生きしなさい。百五十歳まで生きるのよ」

「八チは独りぼっちだよ。寂しいよ」

「もし八チが寂しかったら、わたしが迎えに行くわ」

「うん、なら、三人を送つたらすぐに迎えに来て欲しいよ。一人でいたくない」

「駄目だよ、八チは百五十歳まで生きて、私達の子供や孫に見送ってもらうんだから」

「ユウ達の子供かあ、会うのが楽しみ！」

ギユウつと、ユウは力一杯八チを抱きしめた。

「そんなに力をいれたら痛いよ」

明莉とマリが左右から、八チの頭を撫でる。

「それくらい我慢しろ。ユウが終わつたら次は、私と明莉がギユウ

ツとするからな！」

「えー私、壊れちゃうよ」

三人に囲まれて、ハチは嬉しそうに笑った。

## 決戦！〜クシテイ・ガルバの力

「おい誰か来たぞ」

一階の入り口に近い部屋で、玄関の監視をしている組織の構成員。

「深夜に裏の組織のビルに、正面から乗り込んでくる人間なんて…」

…警察か？」

「いや違うだろ。警察なら捜査令状も見せるし、こんな深夜に一人じゃ来ないだろう？」

「それもそうだな。とりあえず帰れと言えよ」

五人の中で一番若い男が、玄関の男にインターフォンで指示する。

「早く帰れ。夜中に訪問するのはエチケット違反だぞ」

「うん、そうだな。俺も早く帰りたい。うちの娘どもを探している。ここに入り込んだようなんだ」

玄関のカメラに写った長身の男は、頭を掻きながら答える。どうやら帰る気はなさそうだ。

「おまえ、ここがどこだか分っているだろうな？」

「東京都XX区XX町のXXビルだよな？」

「正解！じゃなくてよ。ここは裏組織のビルだ。魑魅魍魎が集まる場所。入ったら二度と出ることは出来ない。生きてるうちにはな」

「ふむ。どうやら間違いなさそうだ。そんな脅しを恥ずかしくなく言えるバカがいる場所。うちの娘達がぶっ潰しそうな組織だ」

「バカ？ぶっ潰すだと！」

「ああ、そうならない前に止めに来た。おまえらの為だ。早くここを開ける！」

振り返った若い男は、玄関に立つ男に後悔させていいかと、後ろのリーダー格の男に視線を送る。

「ほどほどにな。まあ、やり過ぎたら、この間と同じ手順で……」

「はい、バラシテ、臓器売買に」

若い男はとなりに座っていた男と、木刀を持って部屋から出た。

一階のビルの玄関の鉄の入り口が開いた。

「やっと開いたか……ふああ」

長身の男は待ちくたびれたと、あくびをする。

「待たせたな。その分、歓迎するぜ」

「それは嬉しいが、うちの娘どもは来ているか？」

「まだらしいが、まあ中で待てばいい」

「では、お邪魔するとするか」

「ところで、おまえさんは、どこの組織のものだ？もしかして警察か？」

「ふああ、眠いな。いや、一市民で一応、教師をやっている」

あくびをしながら答えた長身の男、銀色に見える短い白髪を立たせ、ラフに後ろへ流す。

細身でなで肩の体型は、武道家に見えない程着やせして見える。

今着ている、胴衣は一重白晒、袴は一重紺、腰帯は本結、厚手の綿で織り込まれた、真新しい武道着。その由々しき武者姿。

神代先生はあくびを繰り返して、隙だらけの状態で、竹刀を左手に掴んで立っていた。

前に立った構成員が、こつちだと手招きをした。頷いてビルの中に入る。

静かに神代先生の後ろに廻った、インターフォンで話した若い男。持っている木刀を振りあげる。

「ふん、先生か。夜中に竹刀なんか持って物騒だな。まあゆっくりしていけや！」

振り下ろされた木刀。しかしそれは眠そうな神代をすり抜けた。

木刀は宙を切り、大きな空振りになり、廊下の床を打った。

反動で前を歩く構成員にぶつかる若い音。

「おまえなにを……」

ぶつかられた構成員が振り返り、文句を若い男に言いかける、その時、のど元を強く突かれて、後方へはじき飛ばされた。驚く若い男の後ろから、神代先生があくびをする。

「早く娘どもの所へ連れて行け。眠くてたまらん、いつもならとくに寝ている時間だ」

振り返り木刀を構える若い男の喉もとに、竹刀の切っ先を当てた神代。

「竹刀でもな、扱う者によっては人を殺せるんだ。うん？おまえ、信じてないようだな」

若い男が一瞬、神代を見失った。その直後、大きな音と木片が降り注ぐ。

男の頭の上すれすれ、壁が竹刀で突き破られ、さっきまで男が待機していた部屋まで貫通した。

突然、竹刀が壁を突き破って出てきたのに驚き、残りの三人が飛び出してくる。

同時に警報がビル中に響き三十人を越える男達が、手に金属バットや木刀、チェーン、大型ナイフを握って、神代を囲み始める。

「まあまあの数だな」

竹刀を壁から引き抜いた神代。その手にした竹刀をまるで日本刀のように、恐れる若い男。

「うああああ」叫びながら逃げ出した、その後頭部を、軽く竹刀で突き気絶させる。

「おっと、一人は残しておかないとな。あとでこのビルの案内を頼むよ」

取り巻く男達は、罵声を浴びせながら神代に近づく。

「死んだぞ！おまえ」

「フツ前置きはいいから、かかってこいよ」

一斉に神代へ襲いかかる三十人の男達が一瞬、その気配で立ち止まる。

学生時代からの白髪、猫科の猛獣を思わす俊敏で獰猛な戦い方、白虎と呼ばれる現代最強の剣士の一人が、自分の下唇をペロリと舐めた。

「いつだっけな、このクセが出たのは。世界選手権の決勝と、マリ

の婆さんと戦った時か。久しいな。あ、九條とヤル時に少し出たかな」

「え？警報が鳴っているの？」

ビルに響く警報に、ハチへのギョウツの三周目のユウが振り返る。

「どうやらおまえ達以外にも、どっか馬鹿が進入したみたいだな」

部屋の奥の方で、ゆらりと立ち上がった、面長で切れ長のつり上がった目。

「九條！」

マリが、三人を守るように一歩前に出た。

「まったく、いい大人が……クシテイの子守歌で寝てしまつとはな」

「おまえが、ハチに害を与えようとしたからだろう？」

マリは、いつでも戦闘に入れるように、準備しながら九條を見る。

「ああ、指の二、三本切り取って、泣き叫ぶ姿を楽しむ予定が、この男がクシテイに操られて、俺に向かって来やがった。おかげで隙をつかれ、三人でオネンネだ」

固まった血のりがついた男は意識が戻っていない、

鼻が折られ喉が潰され、呼吸が苦しそうだ。

「おまえの仲間だろ？なぜここまでやる？」

マリの質問に、手で髪を整えながら九條は椅子に座った。

「仲間？そんなものは俺にはいねーよ。組織は上下しかいない。お友達関係なんかないんだよ。そいつは飼われた犬だ。主人の俺に殺されようが文句は言えないのさ」

両足を組み、大きな机の上に投げ出した九條。両手を組んでからマリを見る。

「なるほどな、組織は犬の集団つてわけだ」

「ああ、だが、中には上にも食らいつく、狼も混ざっているがな」

「狼だつて？おまえの事を言っているのか九條？狼は仲間思いなんだ。仲間をいたぶるおまえとは違う」

マリの言葉に頷き、言葉を繋ぐユウ。

「そうよ。ハイエナだって、ライオンだって、仲間と協力して生きていく。人ならそれは必然。独りで生きていける強さなど、人間にはないわ」

二人の言葉に口元を緩ます九條。

「そんなのは昔のお話だ。昭和の時代はみんな一緒に教えられた。今の平成はオンリーワンだと。笑わせる。独りで生きられない、弱い者がオンリーワンになれるわけない。だがどんな世でも全ての人間が必ず降れ伏すものが、ちゃんと昔からある。それを学校では何故か教えない“暴力”こそ不変な力なのさ。力で競い合うの止めた、今の世の中を見てみればいい。親が金持ちで無能な者達のなんと多いことか。戦乱の世は暴力が全てを決めた。強い者が全て決定する。明快だろう？この世は再び戦乱に変えるべきだと俺は考えている」

「フツ、新しい戦乱のリーダーが、おまえということか？」

部屋のドアが開いた。そこには、胴着は一重白晒、袴は一重紺、真新しい武道着を着た神代先生が立っていた。

「案内ご苦労さん。もう逃げた方がいいぜ、おまえのボスはオレ以上に、残酷そうだ」

神代と九條の顔を見比べてから、案内してきた若い男が必死な形相で逃げ出した。

「おやおや、ここにも戦乱の英雄たる、人物がおられるわけだ」

部屋の中に入った神代先生が首を振る。

「オレは一教師だって言っているのだがね。さっきから、おまえの仲間にもな」

「フツ、三十人もの武器を持った人間を竹刀で、汗もかかずにぶっ倒す。どう考えても、このつまらない世界には飽き飽きしている筈だよ、先生」

「三十四人だ、自分の仲間の数くらい覚えておけ。オレはこの世界を、結構気に入っている。だから、オレの調子を狂わす、例えば、深夜に生徒を誘拐して、担任を呼ぶような行為には かなり腹が立つ！」

口元は笑っているが、ユウ達をここに連れ込んだ事に、白虎は野獣の視線を九條に送っていた。

「いつもの先生じゃない　なんか怖いよ」

普段見た事のない、神代先生の殺気にユウが呟く。

「マリと戦う時は、いつもあんなもんだけど」

「そうね、九條が狼なら、先生はベンガル虎ね」

また眠り始めた八子を、胸で抱いている明莉が答えた。

「えらい言われようだな……とにかく帰るぞ！」

神代の言葉が止り、西条が手にしているものを見た。

「クシティは危険すぎる」

九條は拳銃を、眠っている八子に向ける。

「力で対抗するおまえ達になら、俺は勝てる。だがクシティはそうはいかない」

九條の言葉が終わらないうちに、八子へ数発の弾丸が撃ち出された。

「だから、ここで死んでもらう……クク」

「八子！」

ユウが駈け寄ろうとするのを止めた明莉が前へと進む。

「良く狙いなさい。当らないわよ」

明莉は八子に近づき、その身体を自分の後ろに廻した。

「わざと外したんだがな。おまえ達は殺したくなかった。とくにマルチブレイン、おまえは俺の方に近い」

「フフ、それなら今のうちに私を殺すべきね。私が上に登り、あなただが、私の犬に成り下がる、その前にね」

「クク、そうか分ったよ、後ろのクシティと一緒に殺してやる」

九條が拳銃の狙いを付ける。

明莉が、右手を自分顔の前に突き出した。

「なんのまじないだ？それは……じゃあな！」

九條は引き金を引き続け、残りの全ての弾を、明莉と八子に撃ち込んだ。

弾丸は明莉の身体を貫通した。

「明莉！」

コウとマリが叫ぶ。

「大丈夫です。近づかないでください。今は危険です」

冷静で落ち着いた慇懃無礼な言葉使い。

「おまえ、明莉じゃないな？咲夜か？」

マリの言葉に頷く咲夜。

九條は持っていた、弾切れの拳銃を後ろに放り投げる。

「信じられないな。俺の打ち込んだ弾丸を、右手で受けて軌道を変えやがった」

「あなたが拳銃を打つタイミングとクセを基に、弾丸の軌道を計算しました。私の顔を狙った致命傷の弾丸一発、八手に当たる可能性があった一発は、右手で受けて軌道を変えました」

「クク、致命傷ではない弾丸は、そのまま受けたわけか？やはり信じられない」

「姉の明莉と一緒に、計算と身体の動作を同時に行いました。今、姉は痛みに懸命に耐えています。私の脳は神経と繋がっていません。でも、十分姉の痛みと、あなたへの怒りは理解出来ます」

一歩、二歩と前に出る咲夜。

「それでどうするんだ？そんな大怪我をしているおまえが？」

「はい、とりあえず、あなたをぶっ飛ばします」

弾丸を受けた手を、九條の座っている前の机に置く咲夜。開いた弾痕からは血が流れる。

「俺をぶっ飛ばす役は、後ろの誰かに頼むんだな。傷の手当てをしる。俺はおまえを気に入っているんだ」

「はい、お気遣い有り難うございます。すぐに後ろの方々と変りま

す。これが終わったら」

「これだと？」  
ニコリと九條に微笑んだ咲夜は、右手だけで机を持ち上げそのまま横に振り払う。

椅子ごと壁まで吹き飛ばされた九條。その上にさらに机を放り投げ、

両手を叩いて終了を伝えるポーズを決めた咲夜。

「あんまり私達を甘く考えない方が、良いと思いますよ？九條さん」  
頭を左右に振りながら、起き上がった九條が笑い出す。

「どうかされましたか。打ち所でも悪かったら、とっても嬉しいのですけど？」

「クク、さすがマルチブレイン。妹もいいじゃないか。このまま続けてもいいが、後ろの方々が既に我慢できなさそう……」

九條の喉元に、強烈な一撃、竹刀の切っ先が打ち込まれた。  
今度は、後ろの壁まで吹き飛ばされる九條。

「咲夜、さがれ。まだ心残りだろうが、それ以上は明莉の負担が大きすぎる」

「はい、神代先生。残念ですが、まもなく姉が意識を無くしそうです。そうなる私と私は自分の暴走を止める事が出来ません。申し訳ありませんが後はお願いします」

「分つたと言いたいが、おまえやオレより先に暴走している奴がいる」

速さを爆発させ一瞬で九條との距離を詰め、その前に立った幼き姿。  
「立て！そして武器を持つがいい。拳銃でもマシンガンでもなんでもいい」

壁に寄りかかる九條に切っ先を向けたマリ、臍から蒼炎がゆらめき立ち、その瞳も蒼に輝く。

「なるほど、本当に人材が豊富だな……咲夜、また後でな」

「はい、もしあなたが生き延びれたら、必ず姉と一緒にお礼に参ります」

そう九條に答えた咲夜は、意識を無くして倒れ込んだ。

咲夜の身体を、ユウが滑り込んでキャッチする。

「マルチブレインの使いすぎと、身体に傷を負いすぎたみたいね」

ユウの言葉に八チが駈け寄り、小さな手で明莉の手をとった。

八チの温かさを感じて、意識を取り戻した、明莉が目を開いた。

懸命に涙を堪えて、明莉の手を握る八チの髪の毛を触る。

「……ハチは温かいね。この緑色の髪の毛は、日の光を浴びた緑の草原の匂いがする」

「ユウ、この薬を明莉の傷口貼ってやってくれ」

マリはスカートの中から、皮の包みを取り出してユウに投げた。

マリはよく怪我をするが、その速さ故、大きな怪我になること多い。その為にマリは祖母に貰った、特別な薬を常備していた。受け取った皮の包みを開けてみると、薬を浸したセロファンのようなものが、何枚か入っていた。

「あんたもスカートの中に色々詰めているのね」

ユウの言葉にマリが答える。

「マリはガーターベルトに仕込んである」

明莉が顔をあげた。

「マリがガーターベルト？犯罪的に萌えるわね」

「たまには黙っている！明莉、無茶するのはおまえの役じゃないと、この間も先生に言われただろう？」

「仲間を見捨てる……とは言われてないわ。どっちが大切かなんて分りきった事でしょう？イタイ、ユウももう少し優しくしてよ」

「それくらい我慢しろ、後でちゃんと医者に見てもらえ。その薬で血は止るはずだ」

九條は明莉の手当を見届けてから、立ち上がり、咲夜に壊された机の引き出しを開けた。

「さてと……始めようか。おれの武器はこれでいい。気をつけるよ、これを持つと俺は手加減出来ない」

九條の手に握られた刀は、幅広で、黄金の柄には青い宝玉が埋め込まれ、鞘は金の打紐で巻き上げられていた。

「その刀は……奥州での戦乱で亡くなった、有名な武将が持っていた刀。伊達政宗と奥州統一の戦いで散った、その強者の墓に一緒に埋葬されたはず」

ユウの解説に神代先生が感心した。

「ユウ、おまえ学校の成績は良くないが、こういうのは詳しいな」

「うん、私が詳しいのではなく、私に憑いていた悪霊が、戦国の刀とか武將に凄く詳しいの」

「ふん、そうか悪霊な。ところで九條は、なんでそんな刀なんか持っているんだ？そんな刀ならおれも欲しいぞ！」

「先生、あの刀は人間が持てるものではないの」

「アイツは持つて良いのか？一応人間のはずの九條は？」

「九條は鬼になりかかっている。首の漆黒のペンダント、あれが九條に強い暗き情念を与えているわ。その念がああ剣を引き寄せた。」

九條に使われる為に。みずからここに来たのよ」

「まったく、勘が良いお姉ちゃんだな」

刀で自分の肩をトントンと叩きながら九條が言った。

「さて、一番手はちっちゃい、お姉ちゃん、だったよな？」

「ああ、前回、おまえのネックレスを奪えなかった、その醜態の続きも兼ねてな」

ユウが、九條とマリのやりとりに、明莉の治療を止めた。

「マリが、ちっちゃいを、禁句事項を受け入れてるわ……」

「不思議だね。こうして八手に手を握られていると、ひだまりの温かさを感じて、痛みも引いていくみたい」

八ちは明莉の言葉に、首を振りながら謝り続ける。

「ごめんね、私のせいでこんなに痛い事になって」

「いいのよ。それでも私は幸せなのよ。八手に手を握られ、草原の緑の匂いを嗅げてね」

「私って、そんなに臭うの？」

「うん、とつてもいい匂いがするわ。これで私は心置きなく死ねるわ……ガク」

「わーん、明莉く死んじゃ嫌だ！」

ペッシと、明莉の頭を叩いたユウが、残った薬を八手に渡した。

「バカ、この状態で八手を泣かさないでよ。薬、残ったのどうする？」

マリが答えた。

「血だらけの男にでも使ってやれ」

ユウが頷いた。

「ハチ、これをあのおじさんにも貼ってあげて」

「うんー分ったよ」

倒れている男の傍に走るハチ。死んだふりを止めた明莉が舌を出した。

「私も一応怪我人なのですが……薬は九條とやるなら、取っておかなくていいの？」

「今怪我をしている者にこそ必要だろう？」

「おや、優しいわね。いつもそうならいいのに」

「アイツとの戦いで傷を受けたら、その薬では済まない。それにハチを守ってくれた」

蒼炎を吐く臍を中段に構え、マリは九條の前に立つ。

明莉が心配して声をかけた。

「マリ、気をつけて。アイツは」

「ああ、奴は強い。そして私に似ている」

「似ているのは私よ。マリはまったく似てないわ」

「正確に言えば、おまえ達に逢う前の私に似ている」

「前のマリ？どういう事？」

「私は、戦う以外に目的は持っていなかった。力のみが絶対のものと思っていた、生まれた時からそう教えられた」

「マリは強いよ。私なんかと違って本当に真っ直ぐにね」

「それは心が無かったただだ。まるで戦闘をする人形。ただ相手を倒すだけを考える。剣道の道場でも私より小さな子達を、可愛いと思っただけもなかった。小さな子達も私を恐れていた。だが、ハチやユウ、おまえや先生は、私を心ある者と扱ってくれた。おかげでいつの間にか、子供達は私に普通に接するようになった。それは私が心を持つようになった証拠と思いたい」

「マリ、心ならある、前からあなたには。そしてあなたが造られた

理由は……」

「いいよ、別に理由などなくても戦える。心があれば仲間のためにな。おまえが今そうしたように」

九條の前にたどり着いたマリが臙を構えた。

「待たせたな九條」

「ああ、この刀を押さえるのに苦労したぜ」

スラリと金の打紐が巻かれた鞘から、真つ黒な刀身を抜き去る九條。その手が握る幅広で黄金の柄には青い宝玉が埋め込まれている。

「先生、マリ大丈夫かな？」

ユウの問いに腕組みをして首を振る

「難しいかもしれん。戦国時代の刀は、いつも死を覚悟して戦った武将の魂が籠もっている。それには技量だけでは勝てないだろう」

「そんな……先生なら勝てるでしょ？マリが危なくなったら……あ、二人で一緒に戦えば……ううん、私も一緒に戦うからなんとかなる。マリに怪我なんかさせたくない。命を賭けるなんて問題外」

ユウの言葉でも動こうとしない神代先生。

「一対一の真剣勝負におまえも混ざる？ユウ、おまえが死ぬぞ！」  
神代先生の雰囲気、高まる九條とマリの気の圧力に、ユウは恐ろしさを感じその場に座り込む。

「そんな……なんでこんな事をしなくちゃいけないの？逃げればいいじゃないの。逃げよう先生。ねえマリも逃げよう」

マリの瞳は九條のみを写し、周りの声や姿は見えなくなっていた、既にユウの言葉も届かない。

「無駄だユウ、二人は既にゾーンに入っている。我々の干渉はマリの心を乱すだけだ」

……こんなところで、究極の剣士に心が必要かどうか、試されるのか？明莉の不安が的中したな。いやまだ、マリに心が与えられた事が、弱さに繋がるかどうかは分らない……

「じゃあ、黙って見ているしかないの？」

「そうだ。これはマリの心が試される勝負。だが、初めての真剣勝

負が、九條レベルだとは思ってなかった。マリには命を賭ける戦いになる」

九條の黒刀にうつすらと水滴がつく。それは九條の刀が妖刀である証拠であった。

そして臍もマリの気を受けて蒼炎を放つ。

二人の異能な者が、二本の異能な刀で行う真剣勝負が始まる。

「いざ！尋常に勝負！」

マリの気合いに、九條が嬉しそうに一瞬笑い、黒い刀を上段から打ち込んできた。

下段で受けて止めるマリ、上に九條の剣を跳ね上げ、真っ直ぐに九條の喉元へと臍を突く。

身体を反らす九條の首をかすめる、マリが放つ臍の切っ先。そのまま身体ごと九條にぶつける。

九條は飛び込んできたマリを、右からの蹴りで左へ吹き飛ばし、体勢を即座に立て直し、踏みとどまったマリの首を、黒刀の刃を切り返して刎ねにいく。マリは頭を下げてその攻撃を回避。

打ち込んだ九條とかわしたマリは体勢を崩すが、そのまま勢いをつけてお互い一回転。

互いの刀に必殺気合いを込めて、斜めからぶつけ合う。

殺気が籠った剣筋、一太刀、一太刀に全ての力を乗せて戦うマリと九條。

九條が放った胴への横一闪、それを両手で臍を支えて、胸の下で受けるマリ。

「さすが……だな」

嬉しそうな九條。

「ああ、マリも楽しいが、おまえを倒すには本気を見せない」と

「クク、今まで本気じゃなかったのか？」

「いいや、本気だったよ。ただし、命は取っておいた」

ふん、と全身の力で九條の黒刀を弾いて、距離を取る。

「前に聞いたよな」

マリが呟く

「何を？」

マリの言葉に短く返す九條。

「左手の甲の傷の跡はなんだと」

マリが話を続ける。

「そういえば、そんな事を聞いたな」

「教えてやるよ」

マリは臙を自分の左手の甲、深い切り傷に当てた。

「なんのつもりだ」

「来いよ九條、この傷の意味を教えやる……おまえの身体にな！」

「フツ、そうか……」

ダダン、圧倒される気合いと踏み込みで、九條は一気に間合いを詰めてマリに襲いかかる。

動かないマリに刀を上段から、一気に振りおろした九條。

二人の間にあつた机が真つ二つに切り裂かれた。

「なるほど……やるな。それが本気になったおまえの力か」

九條の横に回り込んだ、斬られたはずのマリ。

速さを爆発的に起動して、九條の刃をかわしていた。

「あの太刀筋は人を何人も斬り、生き残ってきた戦国の強者のもの」

「マリの方が速かったわ。先生だって妖刀なら九條に勝てるでしょ

う？」

ユウの言葉に首を振る神代先生。

「現代の方が技術は研究されているだろう。だがあれは必殺の気合

いに溢れた、命を捨てた荒ぶる剣。戦国時代を生きた者の戦い方、

この時代の者が勝てるか……」

「そんな……」

ユウが九條とマリを見た。

「その速さはやっかいだな。じゃあこんなのはどうだ？」

九條が胸のペンダントを左手で掴む。

「出番だぜ、よろしく頼む」

九條の言葉でペンダントから。漆黒の霧が空中に流れ始める。漆黒の霧は部屋に広がって、マリの身体を包み込む。

「こんな感じかしら？」

「ああ、そんな感じだ」

「九條、誰と話している？」

九條はマリに答えた。

「彼女と作戦会議中だ」

「彼女？冷たい……これは、あの時の……おまえのペンダントを奪う時に感じた……」

マリの身体を包んだ漆黒の霧は、氷のように冷たく固く凍り付き、マリの身体を封じた。

「さあ、これで自慢の速さも発動できないな」

黒い霧が固まった氷はマリの身体を完全に押さえ込み、その圧力はマリの身体を締め付ける。

「九條！卑怯よ！」

ユウが九條に叫ぶ。

「卑怯？なにがだ？真剣勝負にスポーツのような公式ルールなど無いぜ。負けられないんだよ、どんな力使ってもな。さあ、この世に恨みを持つ者達、怨嗟の声をこいつらに聞かせてやれ！」

「九條あなた、慰霊の礎を壊したわね。その欠片があなたのペンダントね」

ユウが部屋を取り巻く黒い霧の正体を言い当てる。

「鋭い、鋭すぎるよおまえ。あたりだ。この国で歴史に埋もれた礎。多くの無名の人々の魂。その上におまえたちは暮らしている。そして思い上がり礎を軽んじる。ならば聞かせてやろう、どんな苦しみの中で死んでいったか、その無念さを、その身をもって感じさせてやろう」

「開けたのね……異界の門を」

「そうだ。今はまだほんの少しだけだが、徐々に門は大きく開く。この世を亡者が覆い、戦国の世が再び訪れる」

明莉が首を振る。

「異界の門を開くなんて、あなたは分ってないわ、九條。戦乱の世はやってくる、あなたの望み通りにね。けれどそれは今じゃない。戦う準備を整える必要があるのよ」

明莉の言葉に口元を緩まず九條。

「今度はマルチブレインの解説か。つまり俺は間違っていないわけだ。このまま礎を壊して、門を開けていけば、亡者が世界に解き放たれ、大きな戦いが始まるわけだ」

明莉が首を振った。

「ちゃんと聞いてなかったみたいね。準備が出来てないのよ。こちら側が亡者に滅ぼされるわ」

「そうか。それでも別におれは構わないぜ。どうせクソみたいな世界。おれと滅んだ方がいい」

「あなたは、いいかもしれない、けど私は嫌なの！」

明莉に続いてユウが九條に言った。

「そうよ私達の人生はこれからの。クソみたいな世界か、それは私達が決める事。あんたの考えなんてどうでもいい」

「そうかい。見解が分かれて残念だ。マルチブレインは分つてくれると思っていたが……残念だよ。では全員、あの世へ連れていくとするか。この場でクシティも消滅させてやる。礎の封印。数万人が殺し合った戦場の鎮魂塔。野に放置され、忘れられた者達の想いを受けて、魂まで失うがいい」

迫る九條の圧倒的な圧力と悪意に、ユウは叫ぶ。

「マリ！早く逃げなさい！」

「そもいかない、これは真剣勝負」

「クク、ちっちゃい姉ちゃんもいいねえ……俺の好みだ、その強気と瞳の力」

「そう？マリは、おまえのような奴は嫌いだ」

「フツ、嫌われたもんだな。じゃあ、続きを始めようか？」

グツと全身の筋肉に力を込めてからマリは、瞳を閉じてスツと力を

抜いた。

「ほう？何か奥の手があるのかな。それなら今出した方がいいぜ。別の能力とかな。そうでないと、次の一撃でおまえは死ぬことになる」

九條が刀を上段に構えた。

「……私には、速さ以外に持たされた能力はない」

九條を見上げたマリの幼い顔立ち。

しかし、大きく見開かれた瞳は蒼に輝き、強い意志を称えている。

「そうか。ならばこの一撃で決着をつける。まだお待ちのお客さんがいるんでな」

上段から九條が振り下ろした刀、ユウが叫ぶ。

「やめて！マリ逃げて！」

身動きできないマリの身体に、九條の黒刀が食い込む。

黒い氷が砕ける音と、右肩の鎖骨が砕ける音が聞こえた。

黒刀をマリの肩に、グリグリと食い込ませる九條。

「自慢の速さはどうした？おまえなら、この一撃もかわせると思ったがな」

痛みを堪えるマリ。鎖骨砕いた刀は少しずつ、マリの固い白筋を切り裂き血が噴き出る。

「この剣士バカめ！もういい私が助ける！」

マリのところへ駆け寄るユウを、明莉の大きな声が止めた。

「やめなさい！ユウ！マリの見せ場を取るつもりなの？」

「まったくだ。ちょっとは待ってやれユウ。これからいいところなんだ」

「先生、五回ですか？」

「いいや、七回だ。見えている五回は全てフェイント」

明莉の問いに神代先生が答えた。

「さすが先生は見えたのね。やっぱり素敵です」

九條の顔から笑いが消え、ふらつき始めた。

「おまえ、あの五回の剣筋は、全てフェイントだったと言うのか？」

マリが下げていた顔を九條の声に応じて上げた。  
右手の臙は、いつの間にか左手から離れ、マリの前方へと、払らわれた状態になっていた。

「すげーなおまえ……」

大きく左右に身体が振れた九條は、後ろによるめく。

九條の赤いジャケットに一本の剣筋が入り、みるみる血が滲んできた。

左手で九條がネックレスに触れた瞬間、切断され床に落下する漆黒のペンダント。

床に落ちたペンダントは半分に分れ、同時に、後ろへと倒れる九條の身体。

「見事！」

明莉と神代先生が同時に口を開いた。

「いったい何が起こったの？」

ユウにはマリの剣筋どころか、刀を振った事さえ分らなかった。

「先生、これでハッキリしましたよね？」

明莉の言葉に神代がすぐに答えた。

「ああ、マリは強い。心を持っていても、それは変わらない」

「よかった、これで今のマリでいられる……」

「あのねえ、二人で分ってないで、ちゃんと、わたしに説明しなさいよね！」

「ああ、そうね……マリは動かなかったの。わざと九條の剣を肩で受けた。纏わり付いた冷たく凍りついた霧を砕く為に、あえて九條の剣を肩で受けた。覚悟したマリの白筋は針金のように屈強な繊維になって身体を守った。そうじゃなかったら、マリの身体は、真っ二つに縦に裂かれていたでしょうね。そして九條が勝った、と警戒を解いた時に、最速の剣を打ち出したの。マリの左手を使ってね」

「マリの左手？あ、血が出てるわ！」

「そう、居合いの技は鞘を滑らせて、通常より速い斬撃を打ち出す。同じ原理で自分の左手を鞘にして最速の剣を打ち出す、それがマリ

の最速の斬撃技」

「それであの傷が……キチガイ沙汰だわ。自分の身を切って打ち出す技なんて……」

「だから、見事だと言ったのよ。覚悟が無ければ出来ない技だから。しかも利き腕の鎖骨を砕かれても、その痛みさえ見せない、今までの最速の斬撃だった」

ゆっくりと膝を立てて、立ち上がったマリが続けた。

「臙は重さを無くした刀、鞘など余計な重さを持つ事が速さを阻害する。一切の余分を無くし、自分の身を切るこの技は、私が絶対の勝利を得る為に、自分自身の結論で導いた技」

臙を収めたマリが、ユウ達のところに向かおうとした。

その時、形容しがたいものを感じて立ち止まる。

「九條の気配が……まったく変っていない……しまった！」

音もなく立ち上がった九條が、素早く八手を捕まえ、その首に黒刀を当てた。

「クク、別に亡者が憑いていたから悪だとか、消えたから善になるとかそんなのではないぜ。俺はなにも変わらない。暴力で愚かで無能な人間達の上に君臨する。生き方や考え方が違うだけで、必ずしも善が正しいわけでもない。人を一人殺せば殺人で間違った事、戦争で数十万殺せば英雄として正しい事。そんなのは全て人間の都合だろ？この世界はもともと、地獄なんだ、生きる事が苦痛なんだよ。その苦痛から逃れるすべはどこにもない。ならばこの世、地獄の王にでもなつて、人の苦しみを見物している、上の世界の者どもを攻め滅ぼすのさ」

「そうね、それもことわりよね、あなたのね。でも八手は関係ないでしょう？離して頂戴！」

明莉が九條に言った。

「駄目なんだよ、クシティは上の世界の者、俺の敵だ。敵は一人でも減らしておきたい」

明莉は首を振った。

「ハチはそうは思わない。クシテイ・ガルバ、地蔵菩薩は、路傍に立つお地蔵さんなの。何の特別な力も持たない。亡くなった寂しがる子供や、地獄を彷徨い続ける寂しい者達を、ただ見つめ続けるだけの存在なの。ただ一緒にいてあげる事、それがハチのことわりなの」

ハチが口を開いた。

「おじさん」

「なんだ？命乞いか？それなら、おまえもその辺の人間と同じ。おれには興味はない者。すぐに放してやる」

「ううん、私が必要なら連れて行っていいよ」

「おれが欲しいのは、おまえの命だが？」

「なら、それでもいいよ。私は役立たずだからね、こうしてみんなにも迷惑をかける……」

「九條あんた、ハチがそんなに怖い？あなたの心が温かい光を求めるのが怖いのか？」

ユウが心を見抜くような言葉を放つ。困惑の表情になった九條。そしてマリが口を開いた。

「九條、おまえの好きなようにすればいい。どこかへハチを連れて行き、殺したければ殺せばいい」

ユウがマリの言葉に驚く。

「何を言っているの？マリ、ハチを殺せつてなに？」

「ハチの意志は変わらない、それはマリにはどうしようもない事。ただ九條、一つ言っておく。今おまえがマリの目の前でハチに害を加えた場合、マリは自分を抑える事は出来ない。全力でおまえを倒し、一番の苦痛を与えてから殺してやる。ここからハチを連れ去った後に、害を加えても同様だ。ハチを失った時、私達三人は普通である事を捨てる。これからの一生を異能な者として生きる」

睨み合う九條とマリ。

「……フツ、分った」

ハチを手放した九條。部屋に転がっていた椅子を起こして、ふらつ

きながら座った。

「今の俺はお前達を倒す力は残っていないし、普通を辞めたおまえ達はやっかいだ。あえて弱点を奪うこともないだろう。クシティは返す。さあ、もう帰るがいい、おれも少し疲れた」

## 待っています〜奥州の夢

誰もいなくなつた暗い部屋椅子に座り、肘をついて顎を触っている九條。

「こんな感じでよかつたか？」

九條の呟きに答える声があつた。

「ええ、上出来とはいえないけど、あの子達の力も確認出来たし、厄介者も消えたしね」

「あの娘に憑いていた武士の霊は、かなりの強者だつたらしいな？」

「ええ、そうよ。源氏の時代から続いた、名門の最後の頭領だつた者。腰に差す刀は、名工なれど、あえて無名で生きた者が打つた刀。人ならざる者を斬る紅刀朱音」

「ほう、それは一度戦つてみたいものだ。ところで、おまえの亡者を失つたが、いいのか？」

「あなたの兵隊が、怪我したみたいだけど？」

「問題ない。雑魚はいくらでも補充できる」

「そうでしょう？わたしも同じよ……フフ」

「それにしても怖かつたなクシテイ」

「そんなに強かつたの？」

「心地良かつたのさ、この俺が悪い夢も見ずに、気持ちよく眠つた。恐ろしい力だ」

「フフ、だから言つたじゃないの。あなたは私とお似合いなの」

九條の背後にうごめく黒い霧の中で、妖艶な人ならざる者が笑つた。

二機のへりが停まっている大きいビルの工事現場。

扉に囲まれたこの場所は、人に気づかれる可能性が、深夜の時間も手伝い確率を下げていた。

オレンジ色のへりのパイロットが、歩いてくる怪我をした男に声をかける。

「大丈夫ですか？かなりやられたみたいですね」

「ああ、九條とあの女は気がついたみたいだ。あの子達のおかげで助かった」

「そうですか。でも我々はあの子達の事を調べて、利用しようとしている」

「そうだ、恩を仇で返す、まさにそれだな。だが、採れたデータにより、我が社の開発は進む」

パイロットにメモリチップを渡した、九條に殴られ怪我した組織の男。

「確かに頂きました。あの子達の能力のデータは、すぐに研究所へ送信します。さあ、へりにお乗りください」

「先生は置いていっていいのか？」

「フフ、どうしたんですか？あなたが人の事を気にするなんて。大丈夫ですよ、隣のへりが送ってくれます。我々がいないほうが、先生には言い訳しやすいと思いますよ」

エンジンをスタートさせたオレンジのへり、顔の血を吹きながら扉のハンドルに手をかけた男。ハンドルの直ぐ傍に Brave Union Co. とへりの所有先がペイントされていた。

「ほんとうに不思議な子だった……八チ、クシテイ・ガルバの魂を持つ娘か」

九條の組織に潜入していた男が乗り込むと、直ぐに上昇を開始したへりは、東京の暗闇に消えていった。

「おい、オレが乗ってきたへりがいないぞ」

五人がビルの工事現場に戻ってきた時、神代先生のへりは消えていた。

「まじかよ 帰るの面倒くさ。明莉くさ」

名前を呼ばれ、チラリと神代先生を見た明莉。

「先生、高いわよ」

「そうか……ならおれの体で返すか」

「はいはい、分かりました送っていきますよ。そんな古典的な借金返済方法は、おっさんでは正直、きもいだけです」

「マリは腹減ったよ」とマリ。

「わたしも減ったわ」とユウ。

「あたしもお腹が空いたよ」と八チ。

「ついでおれも腹減った」と神代先生。

「ふう」と明莉。

全員を見渡してため息をついてから、裾に白い横のラインが入ったスカートをめくり上げる。

「おーい、こんなところで目の保養か。もっと明るい所でやってくれ」

ジロリと神代先生を見た明莉が、スカートの奥から携帯を取り出した。

「……私よ……子供達が、お腹が空いたと言っているわ。約一名おっさんが混ざっているけど……うん、そうね十人前でいいかな」

携帯で何か指示を出している。

「やった！のり弁だあ！」

「でたでた、こんな事まで、勘が良くなっていいわよユウ……ってまったく聞いてない」

「のり弁、のり弁、速く食いたい」

美少女軍団、のり弁の歌&踊りに、おっさんも一人混ざって楽しそう。

「おまたせしました」

黒い車の運転手から、ユウの予告通りのり弁を、十個受け取った明莉。

「えーと、八チとユウは一個ずつで、私も一個でいいから、マリに四個と先生に一個ね」

既にフライングスタートで食べ始めているマリ、嬉しそうにフタを開けたユウと八チ。

「なんでおれは一個なんだ？大人なのに」

「子供みたいな事を言う大人ですね。運転手とヘリのパイロットに一個ずつです」

「なんか納得できないような……」

明莉は、ヘリに備えてある、非常用のオイルランプを中央に置いた。点火スイッチを押して火を灯すと、柔らかい光が周りに広がった。さっきまでの激しい戦いが嘘のように、静かな時間が流れ出す。ゆらゆらと揺れるランプの光を中心に、みんなで弁当を広げる。

「ふうう、千葉から駆け付けたのに、なんか扱いが雑だな」

「なにか言いましたか先生？送っていきませんか？」

明莉の問いに、首を振って手を合わせた神代先生。

「なんでもありません！頂きます！」

その時マリが大きな声を出した。

「のり弁の替え玉一丁！」

振り返りながら、神代先生が笑った。

「おい、マリ、のり弁には替え玉はさすがに無い……いや有った……」

……

コウが先生の微妙な答えを聞き直す。

「先生！のり弁の替え玉は、あるんですか？無いんですか？」

「さっきまでは無かったが、オレはのり弁の替え玉を見た……今ここに」

空っぽになった自分の弁当箱に、パツコツと、神代先生の弁当の身を移すマリ。

「こら〜！マリ、おれの弁当だぞー！」

「お金出したのは明莉だし、一食くらい食わなくても死にはしない。既に半分以上、自分の弁当をマりに食べられた、神代先生はのり弁回収を諦めたため息をつく。

「はいはい、分かりました」

それを見たコウとハチが笑い出す。つられて明莉も笑い始めた。

風を巻き上げながら上昇していくへりを、髪を押さえながら見ていたユウが歩き出す。

へりが着陸した大きな病院の側の公園から、十分ほどで家に着いたユウは鍵を開けながら呟く。

「あゝ今日は、ホント大変だったなあ。八子のトラブル、確実にスケールアップしてきている」

靴を脱いで部屋の中に入るユウ。

「ねえ、あんた　今日は結構格好良かったよ」

ユウの呼びかけに、部屋はひっそりしたままだった。

「そうか、あんた……消えちゃったんだよね」

静かな部屋に、ユウは急に胸を捕まれたよう感覚に襲われる。

「なんか胸が苦しい。これって寂しいってこと？悪霊がいなくなっ  
て寂しい？わたしどうかしている」

着替えを済まして、部屋着になってベッドに寝転ぶ。

しばらくすると、何かの音が聞こえてくる。

それが時計の音だと気がつくまでに、しばらくかかった。

起き上がったユウは、いつも悪霊が座っていたソファの上に座ってみる。

「こんなに広がったっけ？私の部屋。今日の騒動で身体と精神は、  
疲れ切っている筈なのに、全然眠れない」

しばらく何もせず、ソファの上で足を、ぶらつかせてみる。

「アイツのバカ……本当にいなくなるだったら、ちゃんと挨拶しな  
さいよね。いつも私に挨拶は大事じゃとか、言ってたくせに……ま  
ったく」

ソファに横になり天井をただ見ていた、音も画面もネットも今は欲  
しくなかった。

ただぼんやりと時間が経っていくのが感じられた　目を閉じたユ  
ウの意識が一瞬遠のく。

五月の日差しは強い。だが吹く風にはまだ冷たさが残っている。

この土地の緑は強い色を放つ。

それは強い春の日差しと、長い冬がもたらすもの。

雪は半年近くも土を隠し、そして奥州の春は燃えるような緑に包まれる。

しばらく風の中で立っていた、十二、三歳の娘が口を開く。

「……いつお戻りになられます?」

問われた若き武将は、娘より二、三歳くらい年上に見えた。

「今度の戦は、我が家、最大のものになるだろう」

「はい……城下では伊達との大戦が話題おおごくちになっています」

「我も、父上と一緒に出陣する」

「お聞きしております。大事なお立場だとか」

若き武将は綺麗にまとめられた髪に、春の風を受けて空を見ていた。しばし、風の音だけが聞こえていた。

「……いつお戻りになられます?」

空を見上げたまま、若き武将は自分に言い聞かせるように言った。

「今回の戦いは絶対に負けられない大戦だ。我も存分に戦おう。だから我は命を惜しまない」

娘は下を向いた。

「伊達は強い、我が生き延びるようでは、とつてい勝てないだろう」  
娘は若き武将の顔を見つめた。

「死ににいくと申されますか?」

「そうではない、だが負けるわけにはいかないのだ」

また風の音だけがしばらく聞こえていた。

そろそろ正午、太陽は高く輝く。

「よい天気だな。おまえはこの国が好きか?」

「はい、冬は寒く雪も降りますが、春はそれは美しく、里の物もな  
んでも良く育ちます。そしてこの地を守る男達は強く、約束は絶対  
に違えません」

若き武将の手をおそろおそるとつた、小さな白い手。  
しばらく空を見上げていた若き武将が、静かに言った。

「それにしても気持ちの良い風だな。少し冷たい……雪解けの春の風か……」

「お戻りを約束してください、あなたは約束を違えません」

真摯な娘の顔を見て、若き武将は始めて笑顔を見せる。

「分かった、戻ってこよう。おまえの元にな」

「はい、その時はお向いたします」

「ああ、その時は出迎えの言葉を頼む……あかね」

娘の手を引き、自分の胸に寄せた武将。

少し驚いた娘はすぐに愛おしそうに武将の胸に頬をつけた。

「はい……おかえりなさい……と……」

さつきまでと風向きが変わり、風が強く吹き始めた。

春の嵐がそこまで迫っていた……

目が覚めたユウ。部屋が少し明るい。

「起こしてしまっただか？」

ユウの横に悪霊が座ってゲームをしていた。

ポリウムは絞っていたが、ゲーム画面の明るさが部屋を照らしていた。

「好きね、戦国のゲーム」

「そうでもない」

「うそ、毎日やっているじゃない」

「そうかの」

「あんだ、消えるって言ったじゃない。なんでここにいるのよ」

「うん？ああ、先程は力を使いすぎたから、一度戻って靈力を回復させたのじゃ」

「じゃあ、そう言ってよ」

「そう言ったではないか」

「言っていない！」

「そうかの」

「あんたさ、本当に若かったんだ？」

「悪霊の年は関係なかったのではないか？」

「そうね、関係ないわね。でも見ちゃったの」

「何を見たのじゃ？」

「あんたの生きている時の姿」

「どうやってじゃ？四百年前の話ぞ」

「でも見たのよ。絶対間違いない」

「そうか」

「あんたね、好きな子がいたでしょう？」

「さあな、昔の事で忘れたの」

「そうなの？約束したでしょう？」

「何を？」

「帰るって」

「知らぬ」

「言っただでしょう？絶対言っただ！」

「くどいのユウ、知らぬと言っただおる！」

悪霊が珍しくユウの言葉に反応したが、ユウを見て自身が驚く事になっただ。

「ユウ、泣いておるのか？」

「知らない」

「なぜじゃ？我がいなくなっただからか？」

「それもあつたけど、違つた」

「言葉がきつたのか？」

「そんなの気にしない」

「じゃあなぜじゃ？なにを悲しむ？」

「うそをついたでしょう？好きな子に」

「それは……だが、ユウが申している事が本当だとしても、何故ユウが泣くのじゃ？」

「苦しかったでしょう？あんたは自分が死ぬのが分つていて、好きな人に二度と会えないのに、帰るって言うの悲しかったでしょう？自分が死ぬことなんか微塵も恐れていない。でも好きな人の未来、

後に残る者達への心配が心を大きく占めていたから……心残りだったでしょう」

「……その若き武將の為に、泣いているのか？」

「女の子は待つていられる、あんたがうそはつかないと信じているから。例え死んでも逢いに来ると思ってたから。あんたは前に言っていたよ、死んだ者には何も出来ない。恐れる事は無いとね。恐れる事がない者があの子を守れる力なんて無い事、あの歳で分っていたんだね。今のわたしと変らない歳のあんたが……」

ぼろぼろと大きな涙を流し続けるユウを、ジツと見ていた悪霊が言った。

「ユウは優しい娘じゃの」

「……似てた」

「うん？誰にじゃ？」

「あんたの好きな娘……似てた」

「だから誰に？」

「私に……似てた」

悪霊は少し動揺したように見えたが、その真つ黒な顔には表情はない。

「それはどうかの」

「似・て・た！」

「だから、知らんと言っておる！」

「絶対に似てた！私とそっくりだった！」

「そうかの？」

「うん、そうよ、絶対似てた」

「ふーむ、その件の決着は明日でもいいが、ユウ、おまえが長椅子に寝ているから、我は袖に座っているだが」

「あ、そう？じゃあちよつと待つて！」

もぞもぞ……少しずつ下に動いて、悪霊が座る場所を空けた。

ユウの脚の膝から下がソファからはみ出す。

「こんくらいでいいかな？」

空いたスペースに座った悪霊が呟く。

「なんか落ち着かん。もしかしてユウはこのまま寝るつもりか？」

「うん、今日はここで眠る……て、またゲーム？それもゾンビ系ってあんたね、ゾンビゲームは十八禁って言ったでしょう？しかも女の子がこれから寝るのに、その前でドロドロしたのをやるもんじゃないわよ！それと……」

「うん？なんじゃ？」

ユウが悪霊を見つめた。

「帰ったら、言う言葉があるでしょう？」

「そうだったな……ユウ、ただいま。今帰ったぞ！」

その言葉に……安心して瞳を閉じた……ユウが答える……

「うん……おかえりなさい」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8779z/>

---

ひだまりメモリーズ

2011年12月28日02時00分発行